女鑑

明治三十二年一月五日發兌

第百七十二號

東京國光社

女鑑第百七拾二號

目録



香川景樹か女



明治三十二年

明治三十二年は如何なる年ぞ。いよ〳〵内地雜居の實施さるゝ年にて、實に、文明開化の一階をます年とも云ひつべく、又人間の行路に一歩を進むきべ年とも云ひつべし。我々臣民は云はず、我々婦女子等、一よに二よといつまでも羽子遊び歌留多遊びに耽るべき年ならず。君が御世を思はれむ者は、とくも身を立て、心を立て、御國を、御世を守らざるべからず。守りて穢さしむべからず。抑、我が日本國は、神の生み給へる國にて、先哲の說きたる如く、他邦に優る所七つあり。一に曰く時氣正し。之はとつ國は南に偏し、北により、或はあつく、或は寒く、半年は夜のみ、半年は晝のみ、さばかりならずとも、四時の運備はらぬ地のいと多きに、ひとり我が國は正しき南北の沖にありて、偏せず、四時平分にして寒煥時に順ひて和調す、是

其の一なり。二はみづほの國とて穀食美しく、五穀菜蔬他國にまさりてよく實り、三に器服備はり、四は風俗うるはしく、五は、法律嚴に、六は外侮りなく、七は能く文字に通ず。漢史にも、東方に君子國ありとて、文武帝のとき粟田の眞人唐國へ渡りけるとき、我が使に云ひけるやう、海東に大倭國あり、之を君子國と云ひ、人民豐樂にて禮儀敦厚なりと、今使人を看るに、儀容大に淨し、豈信ならずやと。されば則ちわが邦人我が邦を指して君子國となす、げに證驗あることにして、其の他米人等我が國の風裁をよろこぶとか。これ實に我が國人のほこるべき所にして早くより君臣の禮あり、男女の別あり、君は仁、臣は忠、男は英、女は順、共に國を愛し、國を守る。されば、日本國は小なれども、國亡びず、侮られず、殊に日本は姫氏の國とさへ稱され、英氣ありて、支那婦人の如く萎縮せず、又男女の別を正しくして西洋各國女子の如く輕薄ならず、能く順にして柔ならず、よく英にして敢ならず、みなよく夫に事へ、國を裨益す。敷島の大和心、實に他國に見ざる所なり。實に此の風、此の俗、各國人民にはこるべき所なり。

然るに善より善にうつらんとしてか、我が國人民は、とかく他を學ぶが僻にて、其のよき事は元より學ぶがよろしかれど、あしき事さへよしと思ひて學ぶが多し。殊に年若き婦人は、善悪を知らず、たゞ新らしきを開化とし、あやしきを文明とするの習ひあり。我が國の文字を知るよりは異國の文字を知りたるを開化とし、わが國の風俗よりは、外國の風俗を文明とす、殊に人は情欲の勝ちたるものにて、善よりは悪にうつり安きものなり。外國のあたしぶりをよしとて之に習ひ、何事も珍らしき外國を神の如く、師のごとく尊び仕ふなどは、是やがて日本國をして彼に仕事さするにて、不忠、不愛、日本國の威風をれとするものとや云はまし。されば善にうつるはよし、悪をは決して習ふべからず、習ひて日本風俗をれとすべからず。慕ふなる大和魂魄輕々すべからず。吾等婦人は實に國の母たるべき者。大切の母たるべき者。あはれ今よりは一際女子たるもの、心を用る、魂魄を磨き、且かしこく、且愼しみて、事を學び事をとるべきにてろ。



學識に富みたる婦人の教育思想に乏しきを歎ず

總南　多田房之輔

抑々女子の學問を修むるは、智識德行を高めて其の天職を全うせんとするに在り。天職とは何ぞや、曰く子女を擧げて之を教育し、且つ一家を經理すること是なり。果して然らば現今女子の學問しつゝあるものは、よく其の本分を確認し居るか。又學識に富める妻女、即ち高等女學校等を卒業して令夫人となりし人々が、其の家庭の教育をよくし、其の一家をよく整へて恥づる所なきか。彼の學識ある婦人を妻としてし良人の口より、女學校卒業生は生意氣なり、はた書生風なり、一家を托するに忍びず、況して家庭の教育をやとなげかしむる所以のものは何にかよれる、思ふに學問ある女子に教育思想の乏しきが致せるならんか。他語之れを云へば、學問ある女子がその天職を全うするに必要なる學科、即ち幼稚保育法、兒童心性學、教育學、學政學等を等閑にするのみならず、最

も尊敬すべき女子師範生徒、保姆、女教師等を目して、恰も資産なき女子の團體の如くに見做して省みざるに由るならんか。此言少しく穏かならぬに似たれども、試みに高等女學校生徒につき女子師範學校生徒を許せしめよ。又中等以上の學校を卒業し、中人以上の家に嫁したる婦人をして、保姆、女教員等を許せしめよ、又進んで學問ある令夫人達に對し、彼等の現に奔走しつゝある男子的公共事業に代ふるに、孤兒及貧民教育、幼稚園擴張等を以てせんことを勸告せよ。其の結果は頗る失望落膽に堪へざるものあらん。こは余輩の云ふをまたず、彼等が平素の言行に徴してあまりあるにあらずや。特に甚だしきは教育者たらしめんとて國費を以て養成したる女子師範學校卒業生にして、偶々其の身を財産家に寄するときは、直に教職を擲ち、もはや教育の事は念頭にかざるに至るもの多きこと是なり。

嗚呼女子は天然に教育者に。產れ來りしにあらずや、家庭にありて其の子女を教育すると共に、國民教育の幾部分を分擔するの覺悟なかるべけんや。



女徳のしをり（十九）

三輪田眞佐子

第十　刻薄　鳥にあらざれど以て林間の狀態を知ること難く、魚にあらざれど以て水中の

事情を知ること易からざるべし。人亦我と境遇の同じからざるものに對しては、その憂苦につきても、おのづから同情の感強からず、動もすれば刻薄に流るゝ傾向あるは自然の結果ならんかし。見よ主人が婢僕を刻薄に使役し、富者が貧者を刻薄に處置する如き例は少からず。

韓子曰く、君子責己重以周。其待人也輕以約と。質に德高き人は、一切の行は忠厚に基き、敢て刻薄に陷ることなからん。常人は、身自ら悲境にある間のみ、刻薄は仁の道にあらざるを唱へて、大に不平を鳴すめるも、一朝青雲に登るなど得意の地位を占めんか、忽ち他人の慘狀を目にせんも、さながら越人が秦人の肥瘠を見けん如し。更に道心なき輩に至りては、刻薄を以て人生の常となし、毫も物の哀を知らず、人の情を辨へず、總べて利己主義を以て一身を處し、他に向ひて刻薄を極むなるべし。されど論語に、躬自厚。薄責於人則遠怨とあるが如く、おのづから刻薄なる人は、怨の蝟集するところとなりて、萬一の秋に臨むも、他の同情を得る能はざるのみならず。つねに左視右顧して、つかのまも精神の安堵する機なかるべし。借問せん、かゝる人は寛仁を施しゝため、他より注がるゝ感謝の涙は、人生に最も愉快なることを未だ知らざるか。將たいつもながら春の日の如き平和は、幸福の大なることを猶悟らざるか。

(我が子なら供にはやらじ夜の雪)は西鳥なる人の妻が俳諧なり。實に能く世俗の人情を寫しけり。思ふに、刻薄に流るゝは、我と人との差別甚しきに由るならん。故に若し公平博愛の心を以てつねに己が欲せざるところを人に施さゞる恕の一字を行爲の標準となさんには、女子たるものゝ德操一層高さを増すに足らんか。

第十一過分　禮記に欲不可縱。志不可滿。樂不可極とあり。蓋人の空想及び願望は、無限なり。無邊なり。これを以て、其の欲を制し、志を御し、及び樂の程を定むるにあらざれど、遂に禍亂の域に迷ふに至るべし。

人各、分あり。其の分を過ぐるは不德なり。然るに、空想と願望は人の心をして其の分を越え、以て不德の境界に導くものなり。今日操行修まらざる女子が、高德の婦人と譽を競はんとし、貧にして富むものと華奢を爭はんとし、將に男女の分を忘れ、同權を唱ふ如きは、悉く過分の空想と願望となり。深く戒めざるべからず。

されど、不足及び不滿を感ずるは、進歩の基なり。すなはち其の德の足らざるを憂ひて德を琢かんか、漸々聖賢に近づくべし。學の滿たざるを歎きて學を修めんか、漸々識者と化すべし。其の他萬般の人事は、欠乏を感ずるより進化の端緒となるものなり。昔日晏子の御者、揚々として主の馬に鞭ちて頗る滿足の色ありけれど、その妻大にこれを諫

めけりとかや。必ず自暴自棄を以て應分と誤信し、進歩の道な閉しそ。おのれさいつころより病に罹り、右手自由ならざりけれど、暫し文など書かじと思ひしが、月日に關守なきものから、年は茲に新まりぬ。從ひて、頭に積る白雪はまされども、未だ徳と學とは依然と進まざるかと考ふれど、などか安臥を貪るべきと、百感交々起りぬ。由て傍人をしておのれが思ひ出づるまゝの言の葉草をかきあつめしめけり。あはれ若木の讀者も、新玉の年と共に萠え出づる徳と、學の芳薫及び積華を養ひてよ。



香川景樹の女

壚井ふく子

明和の歌人、文政の文豪と世にもかぐはしき名を博したる香川景樹、男を茂松、女を孝子とて、はじめ二人の子をまうけぬ。而して、その茂松、いやしげれ、いや榮えよと生ひ先きを待ちたる男の子茂松は、如何なる過世なりけん白雪の積るも知らぬ二葉のみどりのまゝにて空しく枯れ果てぬ。あはれ親心景樹はいたく惜しみ、

いでや手足のまたゝかにのびらかなるは、千早ぶるいさをとかるや成るらん。さらば大刀遣はせ强弓まかなはせてん、いみじきすぐ世に世のあやまちし、いろづきわろきものゝえせものともなりゆかば、やをらひと屋をつくり、押しこめおき、うまきかぎりの

物して、かなしくも養ひはたしもし。心ざへみやびたらんには歌よみにやせむ、手書にやすべき、さりとて病をさへ引き出づべし。をとなびまめやかに仕へてなよびんよりは、本性のまに〳〵、あらゝかにをゝしかれ、この子嫁とる時ありなん、その嫁かねは、今いづくにかあるらん。こはいまだ此の世に生れぬ成るべし。生れ出でらん家こそいとゆかしけれ。をぎの葉のうちさやぎするときに、やがて庭あそびせんずらんに、手づさはり、手きりなん、そのくるしさよ。と。

一ずちに生ひ先きをまちたる松の子のあられもなく枯れてよりまた得たる孝子、白銀にも黄金にもかへ難き寶とし、汝、孝子、孝なれ、親にな先き立ちぞ。茂松が千歳のかげをもそちはそへよとぞかり、いつくしみ一人にあつまれぞ、母は殊更わがためにをみなを一人得させ給へと神に祈り、其の月よりはらみそめて、生みける子なりとて、神の子とまであがめていつくしみにいつくしみたり。才ある人の子は中〳〵に薄命の者なりと、父も子に迷ふ一すぢに、しき島の道、さぞかりしかんとはせねど、流石に蛙の泣く音に、鶯の歌ふ聲に、孝子を抱きたるまゝうち詠ずれど、母もまたいみじき歌人、孝子を撫づるにも、塵をだにすゑじとの句をよみぬ。教へんとはせねど、父のみが薫陶、母がねが口ぶりをひなの頃より覺えしたひて、折りにつけ、時につけ、歌ひ出でゝ己が心父母が心を慰むること多かりき。やう〳〵長じて十六と云ふ年の葉月に、伯耆守寛寧に嫁ぎぬ。寛寧は九條家の諸大夫に、芝氏なるよし。

文政二年の冬、母がね、包子、難波の假寐に重き病にかゝり、日に〳〵あしかることを聞くや、孝子はいたく憂ひ、夜も晝もたゞ母を思ひに沈みけるが、眠ぶれぬ夜の幾夜かさなれる曉、うつ〳〵まどろみける間、母と共に花見にまかりける夢見て、父の許に歌をぞ送りける。

たらちねと共になぐさむ花見こそ
さめて果敢なき夢にはありけれ

其のあくる年文政三年五十三歳にして母なる人、枕の上の花瓶に桃櫻折りませたるをうち守りて

いろ〱の花見ることもこれかぎり
青葉をまたぬ我が身なりけり

と一首の歌を殘して、げに青葉を待たず、彌生十三日むなしくなりけり、その頃、孝子は、夫に乞うて、母が介抱に日を暮らし、夜を明かして、衣帶を解かざりけり。其の介抱に心をつくしたる。奥村晴月尼が包子をいたみたる文中にも籠りて見えぬ。

去年の秋、人のよめ君となり給ひしひとり子の君、此の日來は、此方がちにかへり居まして、われにもあらず、身をつくし給ひけるが、云ひがひなき世を如何になげきふしれはさんや、云々

とあるにてもその介抱、なげきのほどはくまれけり。後、母の御墓に詣でゝも

手向けする水にうつろふ我がかげは
よになき母の形見なりけり

年ふりて老いぼけたる寺男の側らに草取り居たるさへが、これを聞きて、げにやさなり、さぞ〱ればすらんとうめきたりと云ふも誹りにはあらざりけらし。あはれ身體髮膚父母にうく、實に我が身は親の形見なりけり。草葉の下の人も如何にかなしみけん、またその毀傷せぬ心を如何によろこびけん。かの貫之が女が、勅ならぬの歌よみて奉れると好一對の歌にて、孝女がかなしき心情、さこそは人を動かしけるよとあはれなり。

須美女



山本正周

美濃の國、方縣郡、石谷村に住める某といへる者の女須美女、九歳の時、父母を喪ひしかど、外祖母の許にて、養育せられ、十四歳のとき、婿を迎へたり。しか

るに、其の後、數年を經て、夫は、いまはしき病にかゝり、起居も不自由の身となりしを、須美は、善く心を盡して、之を看護し、晝は外に出で、耕作を勉め、夜は、夫の病を看護して、嘗て、衣帶を解かず。後また、人の家に傭はれて、婢となりけるが、毎夜、必、わが家に歸りて、夫の看病をなし、朝は、又、はやく主家に赴きて、働きつゝ、如何なる雨風の夜といへども、欠ぐことなかりけり。或る時、風吹きすさび、雨降りしきり、川水さへ、増したれば、今宵はよも歸らじと思ひ居たりしに、須美は、なほ辛うじて、水を渡りて、家に歸り來つとなん。親族の者は、このありさまを見て、不便に思ひ、須美に向ひて、汝の夫の病は、世の常の病にあらで、聞くもいまはしき不治の病なり。汝は、年もまだ少ければ、今が中に、離縁して、更に、佳き婿を擇べよと勸めけるに、須美は、涙ながらに曰へるやう、夫の病は、不治の病なればこそ、妾は、ひたすらに、心を盡すなれ。不治の病なればとて、之を捨てんやは。妾は、さる情なき行をばゑもなし侍べらじとて、固く執りて、動かず、親族も、今は、詮方なくて、祖母と談合して、若しも、離縁せずといはば、親族の縁を絶ち切るべしとまで、いひけれど、須美は、たとひ親族の縁を切らるゝとも、夫を捨つるに忍びず。かゝる夫に嫁ぎしは、妾の不幸とあきらめ侍るより外なしといひて、いつかな心を變へざりければ、何れも、みな、其の節義の固きに感じて、其の意にまかせけるが、夫死して後は、祖母に事ふること、ますます厚く、終には、其の行、官に聞えて、租を免じ、門閭に旌表せられけりとなん。



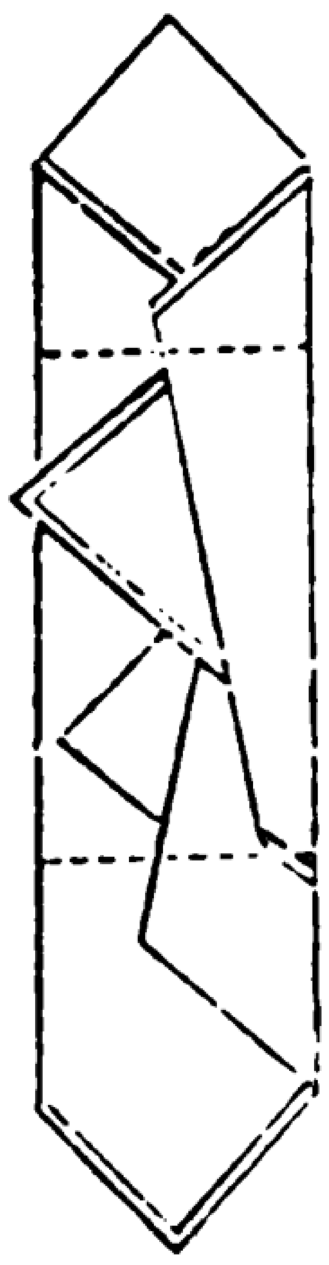


家政

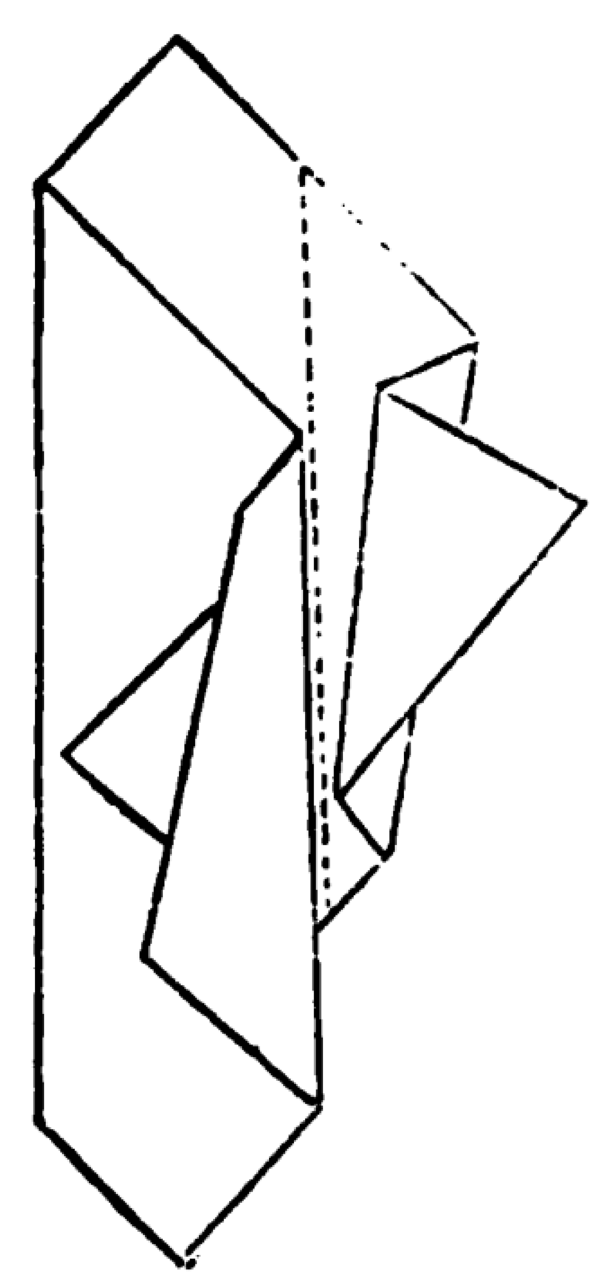
包の記

故有住齊先生教授
門人 なみ子 鏾子 筆記

盃包

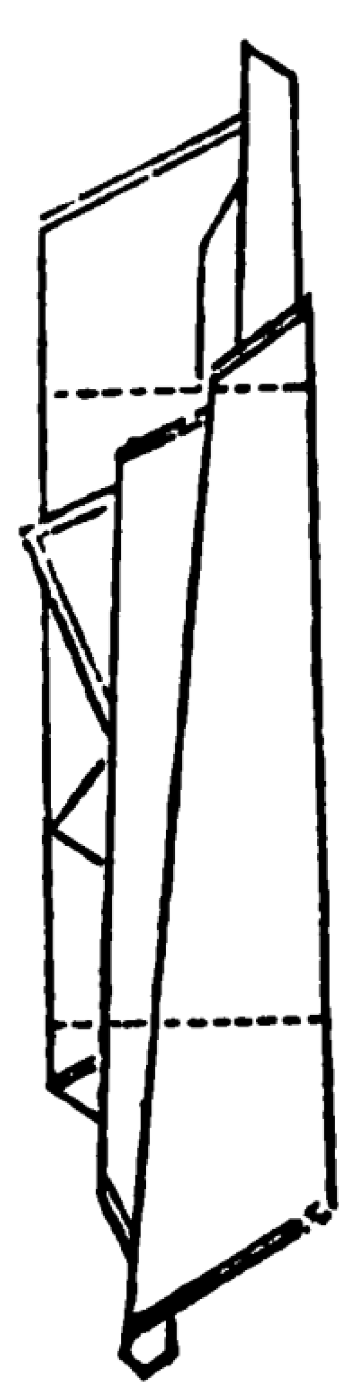

上下の點線を引きたる處を裏へ折り返すべし

常の如く紙取をなして、解の圖に示せる如く折り、之を形紙となして造りなす。


解の圖

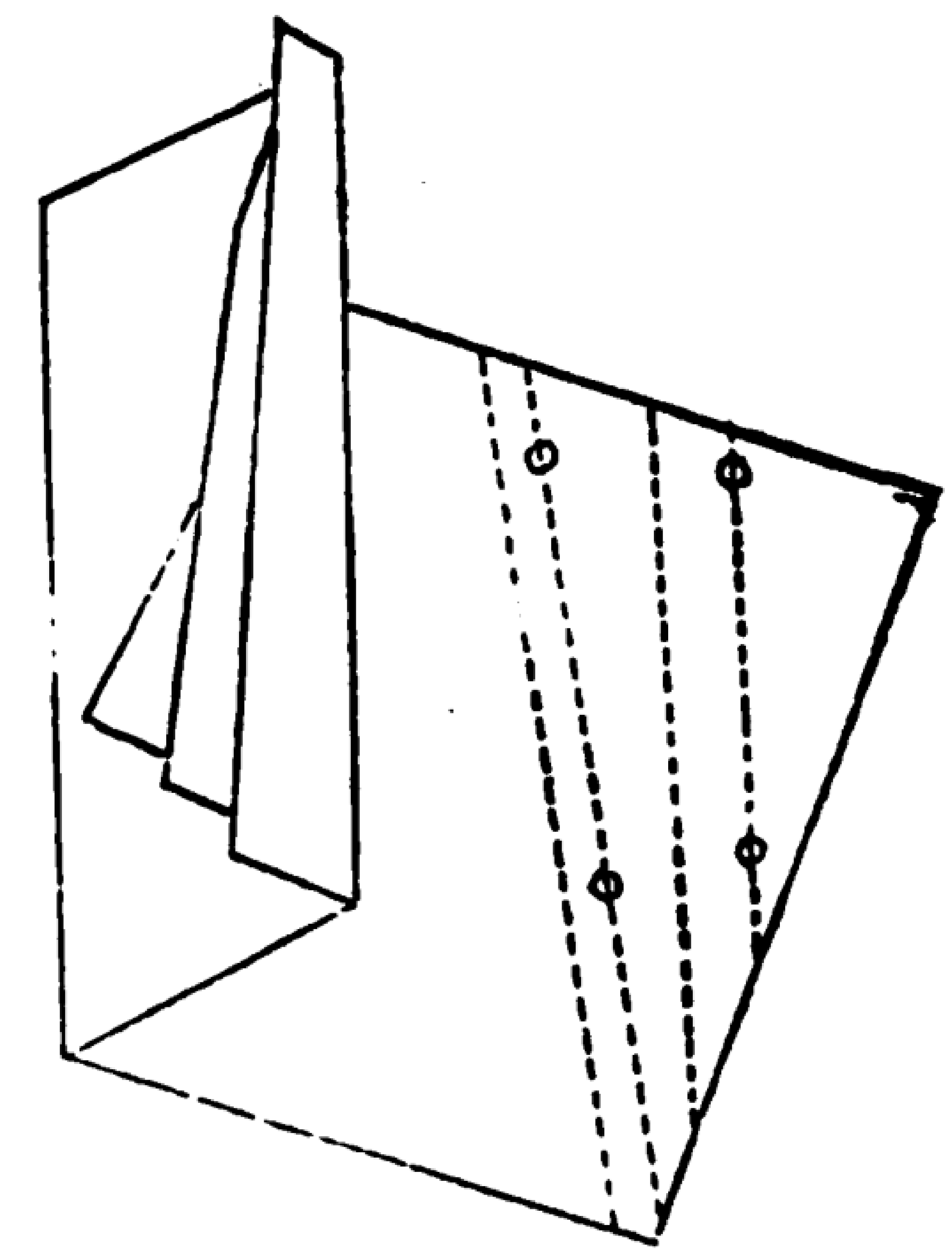
表美濃紙、裏紅紙。にほひをとる（裏の方を表の方より四方一分位づゝ大きく斷ちて、裏表重ねたる時回りに裏の紅紙見ゆる樣にするをにほひをとるといふ）こと常の如し。

繪元結包


上下の點線の處を裏へ折り返すべし

繪元結、入元結ともいふ、元結の上を更に飾りて結ぶ元結なり。童の髮飾に用ゆるもの。之を贈る時の包みかたなり。

解の圖



紙取常の如し。解の圖に示せる如く折り、點線の處は、丸の印を着けたるは外に、其他は内に向けて折り、後折り上りの圖の如く左へ折り重ぬべし、之を形紙として折りなすこと、又にはひを採ること等皆常に同じ。

茶の湯

孤峰庵碌仙齋不笑
關　葦　雄

歳月は、茶の湯の釜の湯氣の如く立ち去りて、亦元に返すべくもあらず、夢うつゝの間に、とく一歳は過ぎゆきてこゝに新玉の年は立ちかへりぬ。いざ。倚是より益々進みて、諸孃と共に此の道を研めんとす。諸孃、浅識の故を以て余を捨て給はずは、幸なり。

さて、こたびは年の始なれど、例の茶禮初學をつゞけものせんより、こゝに、千氏丁々軒如心齋宗左の撰なる年中行事を掲げて、聊か新年の祝詞に代へんとす、庶幾くは斯道の參考に資する所あらんか。

如心齋年中行事

正月元日

一大福

黒塗四本柱臺子　（小道具畧す）

千の字臺

茶入交趾

一二重切花入端の坊寫

花、柳　白梅

一上段床　宗旦拜領　卯花御歌懐紙

一次の間床　探幽主馬兩筆竹の繪
大福の式終て探幽筆玉の繪と掛換
一讀初掛物は父母孝行の爾し
三日濟右飾換る
一稽古始は七日、十九日、二十八日、此の内の日取にて始む。
一二月二十八日　利休忌
茶かふき　夕飯精進
上段利休像　三ツ具足　茶湯一對
次の床　宗旦筆三幅對　利休、少庵、宗旦
其外道具年々見合
一四月に入風炉道具に替る
同風炉名殘に、右道具の內見合、二三種替る。
口切　始內切
一書院床　利休像　三具足
利休堂出來候てより附書院へ壺飾る。
是は利休堂正面に成故式の通正面にて壺口切
其外挽初めは如心齋挽かけ、跡は弟子へ渡し爲挽候、
是は覺々齋も如此
一精進の懐石家內座敷にて出し、菓子濟て小座敷へ通し、如心齋茶を點る、雜煮出、暮に及、精進落出入の者迄振舞。
一冬至の夜は例の豆腐、家內弟子へ出す。
不淡曰此本文難レ解追て良本を得て校正すへし
一初雪降候へと
利休靈前へ茶湯一對、極詰花香備る。
一霜月二十八日利休火焚
書院付書院前利休堂正面にて火焚
盛菓子　みかん　まんちう　昆布まき　此菓子を直に客方へ出す、
數茶點る　右濟て、暮て精進上け
いわし燒て　つほく　かき膾　埋豆腐飯
重箱　から大根　鮭ハチ叩キ牛蒡
吸物　ひれ　取肴三種

鉢　たこ　吸物　蛤
さかな
書院飾小座敷次八疊飾きまりなし。例年見合。
一暮除夜
小座敷家内打寄湖茶　會付是より順なし。

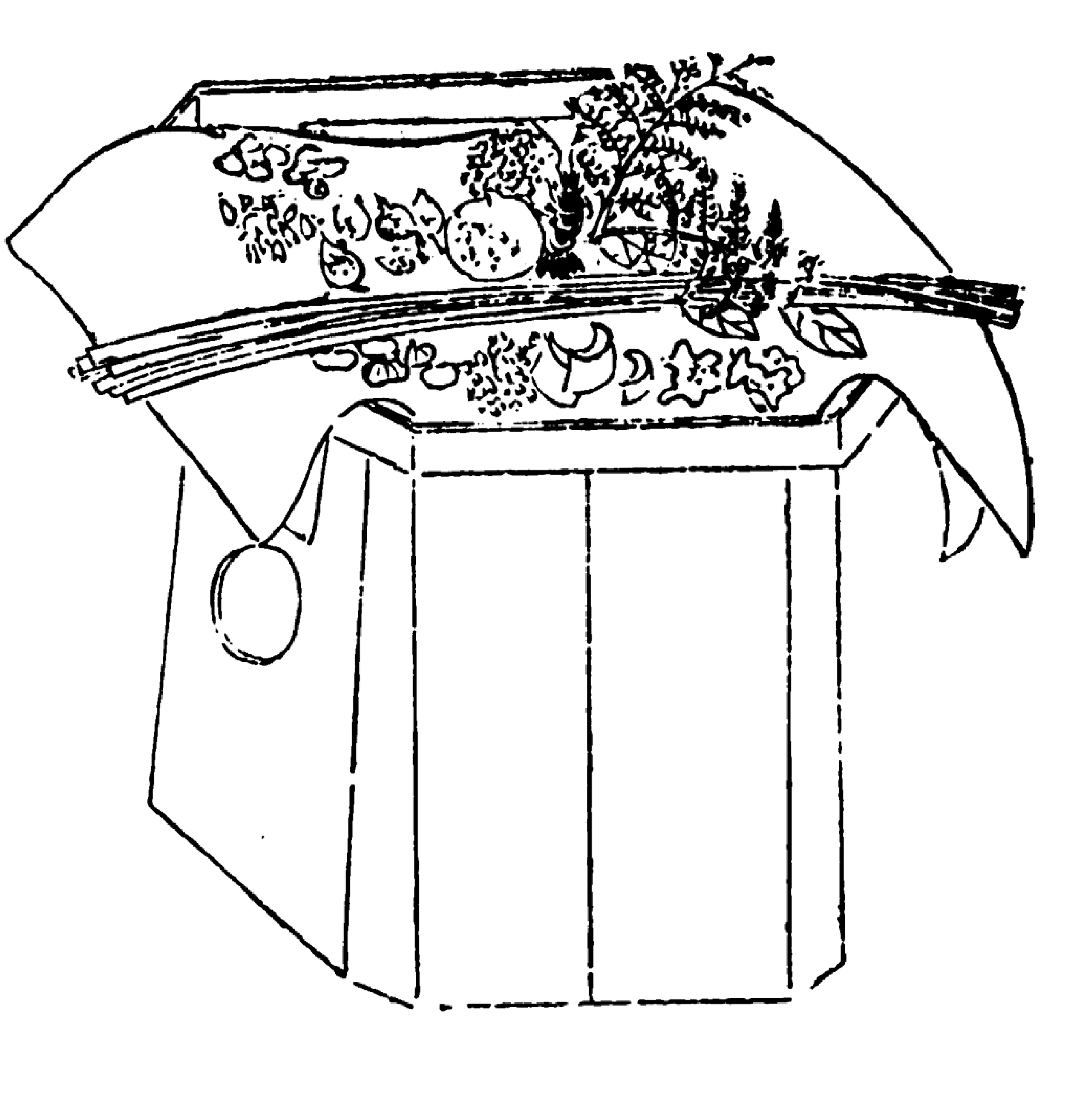
女禮

有住常子

正月の床飾

手掛蓬萊ともいふ　正月元旦、家内打集ひて、之に載せたるものを祝ひ喰ふなり。年改まりて先づ手を掛くるものなれば手掛といふ。

手掛に載するもの
一だい〳〵(橙)
一みかん(蜜柑)
一かうじ(柑子)



橙は冬は色つき、夏は青し、年月を經ても落ちず、生長次第あり、代々替らぬ祝によせて用うるなり。かうじみかんは常世の橘をかたどり用ゆさなむ。其の故は橘萬病を除くの德あるゆゑなり。垂仁天皇の御宇異國より三つ奉りしに折ふし皇后の宮御惱

ありて、之を用ゐ給ふに、御心ようして皇子御誕降ありと大和文に見えたり。此の功能ある故に、聖武帝、葛城の親王に橘の姓を賜ふとなむ。

一ほんだはら（穂俵）

藻草、之を束ねて穂俵と名づく、年首より俵を得るの祝とす。又神馬草といふは、神功皇后三韓御征伐の御時より始るとなり。

一くり（栗）

栗は熟すれば外皮裂けて其形笑を含むに似たり、よりてほき用うとなり。又是を勝栗といひて軍の肴組に用ゆることは、昔濟見原の天皇、大伴の皇子と戰ひ給ふ時、山城の國田原の里へ潜幸あり、里人供御に栗を奉るとなむ、天皇之を地に埋めたまふに夜の間に生出て再祚の瑞をあらはすとなん、大伴遂に亡びて御運ひらかせ給ひて天武天皇と申し奉る。此の例に隨ひことほぎ用うといふ說あり。

一ゑび（海老）

夫婦同穴の契永からんことを祝ふなり。

一かや（榧實）

かやのみは心氣を壯にし目を明にす、久しく用ゐて病を發せずなどいへり。

長壽を望む心より用うるが如し

一かき（柿）

俗に實かきとるなどいふ。然ばる心ならんもをかし。又七德ありなどいへり。

一こんぶ（昆布）

海草の內にて其葉太にしてことばの緣美しければ是を用う。又神代の昔魔王退治のをり海邊にて陣屋の屋根を葺かせ給ひ御運ひらかせ給ふ吉例によりて軍の肴組に用うといふ。

一ところ（野老）

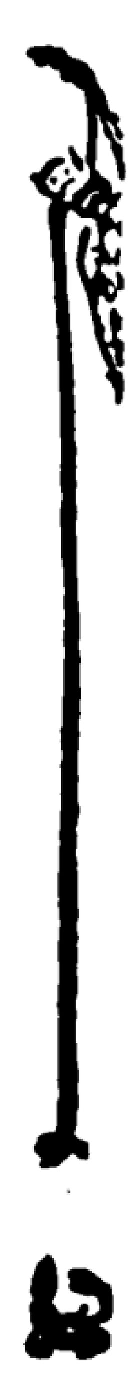
俗に所繁昌なといひて祝ひ用う。根に鬚多ければ野老の字を用ゐ、やがて壽を祝ふこゝろにも用うるならんか。

一のし（熨斗）

のし鮑は神代の人形なり、肩いかりて腰細く、壽は百歲を保つといへり。卜部の古事記曰、天照皇大神伊勢國五十鈴之川上而神代之人形を學せ給ひ熨斗製云々。と（信僞は不知）

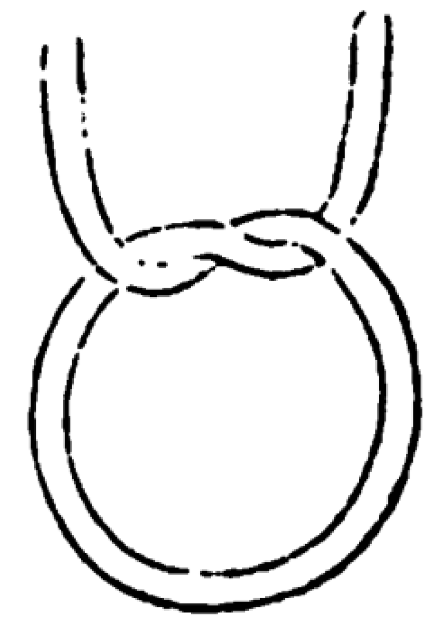
新撰結物百種

百草庵一無

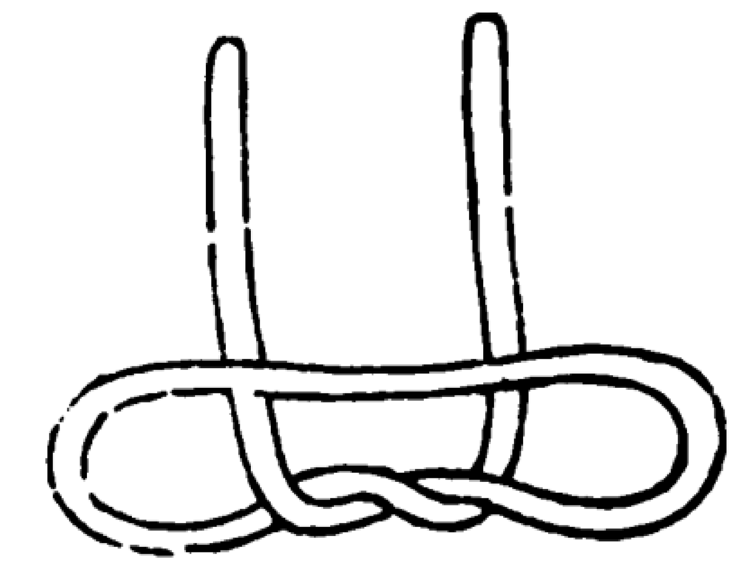


唐結（からむすび）22　貴人の采配に用う。

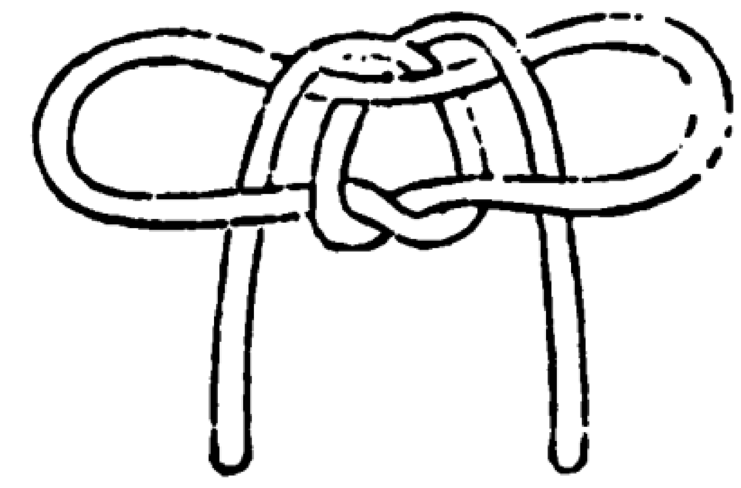
第一圖



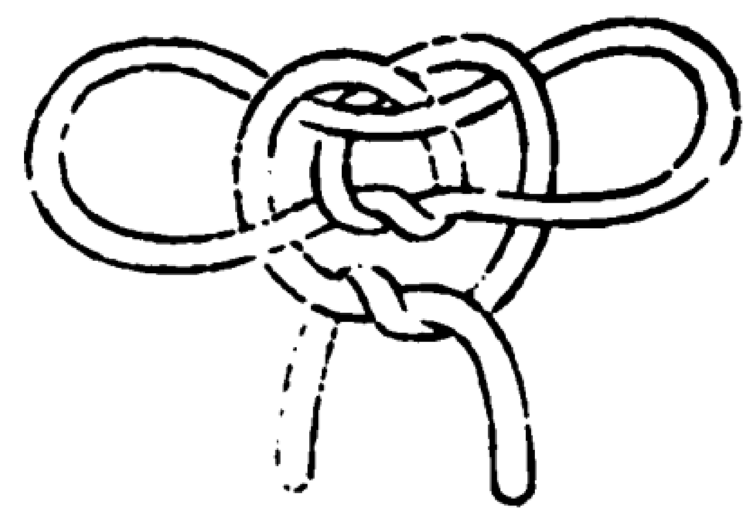
第二圖



第三圖



第四圖

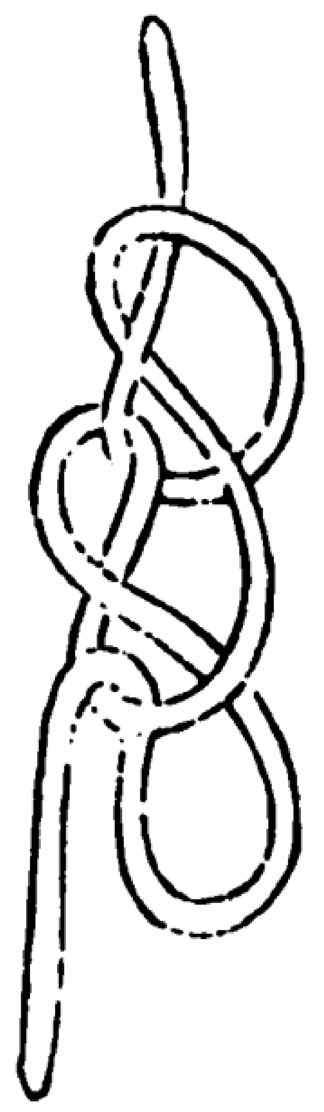


結び上り

になひ結 23

古は泔杯の臺（髮の亂れた梳でつける水を入る臺）御厨子棚などの打敷（布帛製の敷物）を綴ぢつくるに用ゐたり。今は、何にても結び余りの垂れなどを結ぶ。

第一圖



第二圖

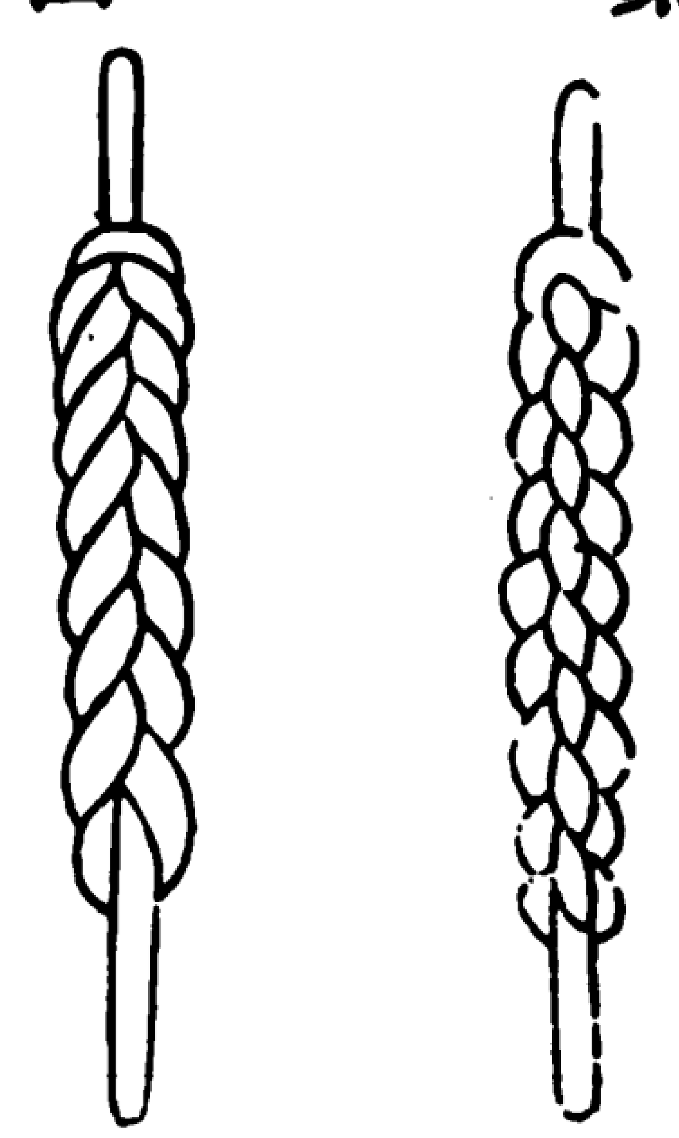


表　裏

たちぬひ

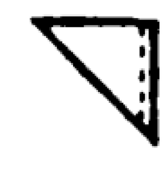
西山たい子

（百一）脊守

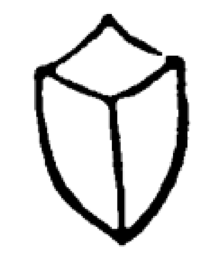
背守りには、柿、猿、まめまり、まめざる、其他寶舟、ふくら雀、よろづ花形等の細工物を用ゆ。猿を背につくるときは、其の子壯健に成長すと云へり。又女子につ

くる時はまめすぎて、れ傳馬になるとむかしの人より聞傳たへぬ。

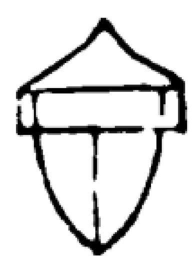
柿は切を四角に切り、それを※



※此の圖の如く三角に二つに折り一方を縫ひ、その縫ひたる所に折り目をつけ、しつけをかけ、綿を入れて引き返し、縫ひ目を眞中、即ち◎

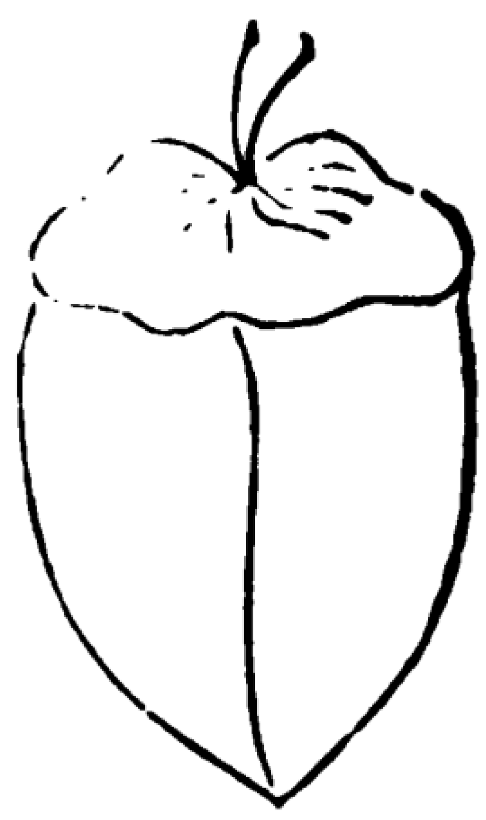


圖のごとく折り其の縫ひ目の方に側切の兩わきを裏に一分ゞかり返し、



◎圖の如くぬひつけ、其の側切の中に糸を二筋にして通しおき、裏がはにてくけ通しおきし糸をしめて結ぶなり。

その仕方上り



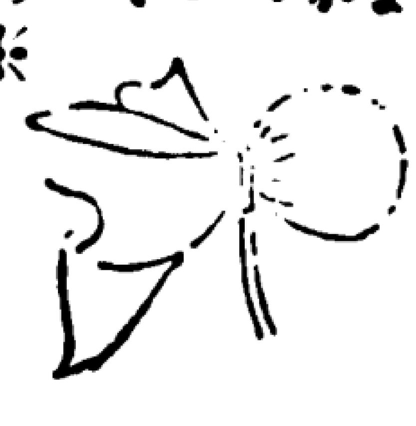
また三つ柿四つ柿、背負ひ柿など云ひて、此の柿を三つ四つ合するあり。それはまづ大なるを側切をつけずに一つ縫ひ置き、それよりは小さき柿を、又柿の形に、二つにても三つにてもぬひ置、皆ながら綿を入れ、引きかへし、大なるものゝ上に小さきを負はせ、側切をつけんとする所の少し中の方へとぢおきて側切をつけ、前の如く糸を入れおき、裏がはにて絎け、糸にてしめ合すべし。

その圖



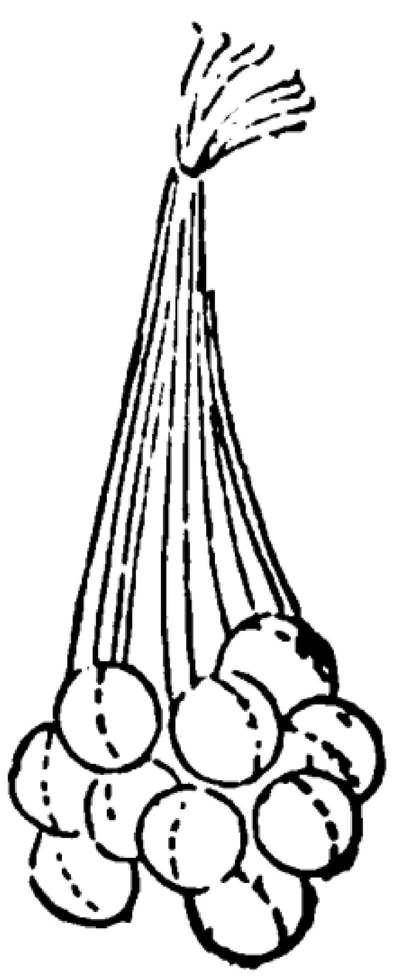


また小球をむ切にて綿を包み※



※圖の如く糸にてくゝりたるものを二つ造り置きそのくゝりたる下より切をきり捨てゝ、其の切りたる所を二つ腹合に合せて回りをぐるりとかゞりてとぢ合せ、其の糸を殘しおきて、背につくるなり。但し一つにてはさびしけれど、さやうのものを七つ八つつくりてつけるべし。其の球をつくるに、一つは赤一つは靑と色をかへ用うるがよろし、すべて柿にても實と側

と色をかへるべし。



まめまり

だいどころ

四季料理の取合

春の部

椀盛

小鴨薄切に、しんじよ、せり○鱚ざつと湯を通し、松露、三つ葉、口柚子○鯛切身に、みる貝、松露、花菜、きの芽○白魚、鴨、たけのこ、小松菜、木の芽○一と鹽鱈、もしは、こんぶ○鶉、しんじよ菜、くわゐわぎり、三つむ、柚子・○薄たひらぎ、竹輪、みの松茸、小松菜、柚子○一としは鯛、竹の子薄切、わらび、木のめ○魚豆腐、松たけ、くき菜、木のめ○鹽鴨、海老、しんじよ、みつむ○丸はんぺん、ふき、松露、木のめ○蒸針魚、松露、小口わらび○鹽鴨、魚豆腐、ふき○寄せいか、つぶ推たけ、松菜○

口とり物

栗きんとん、大かまぼこ、焼鶉○いんげんきんとん、にしき鶏卵、くるま海老○栗きんとん、かすていら、鶏卵、密柑、花くわゐ、きんしこぶ○てらしいか、ぎせい豆腐、みかん、かまぼこ、れんこん○

焼物

鯛の濱焼、新生姜○鯛白焼に木の芽醤油かけ○針魚白焼にして酢醤油かけ○鰆のつけ焼にすりわさび○鰆のてり焼に、鹽焼のふきのとう○鮎並の木の芽醤油付焼に、じねんじようま煮○ひらめの色付焼に、しん生姜○甘鯛てり焼に、きんかん甘煮○甘鯛味噌漬焼にしん生姜○蛤の付焼に酢うど○小鯛鹽焼、酢どり生姜○

膾

平目作り身、わかめせん、酢味噌○小鯛、花かつを、わさび酢○赤貝、うど、青のり、合せ酢○海老をゆでゝはそくさき、酢味噌○いかをはそくきり、ざつとゆでゝ、うどゝ芥子酢味噌○さよりきくらげせん甘酢○すりいも、のりまき、わさび酢○鮭鹽引薄切、うどせん、山葵だい〳〵酢○白魚ざつと湯を通し、蛸ゆでゝ小口ぎり、いり酒○玉珧せん、三つど、二杯酢

●御誌家政欄内にはいつも〳〵有益の事のみ御掲げ下さるが中に十一月十五日發兌(百六十八號)御誌には割烹の事こま〳〵と御示し下され者の身には嬉しく直に調理いたし候處大に御客の喝采を得申候間其の後の御傳授相待居申候就ては勝手がましく候へども何ぞ酒なぞの淡泊なる即席料理を委しく御示し下され度偏に願上候尤田舍の事に候まゝ宜敷材料とては無之候故御推しの上あらゆる野菜などの類も御數へ下され度願上候(云々)　鹿兒島　日高かず子

●酒の肴となるべき淡泊なる即席料理とても數多きことなればこゝにすべてをとりつかれて擧ぐること能はず又季節の取合方もあれば之等は其の折々に臨みていふことあるべしよりてこゝには先づ、六大八小の卓袱料理とて一寸面白き取立あるを思ひ出でたれば、こを掲げて聊か其責をふさがんとす。乞ふ許し給へ。

卓袱料理獻立

●小菜　八皿

一鯛刺身○白髮蘿蔔○岩茸○卸し山葵○合せ酢仕立
一唐菜○烏賊○胡蘿蔔○芥子味噌拌仕立
一車鰕○河茸○慈姑の三種
一輪切牛房青海苔付○蒲鉾○紅薑の四種
一隱元豆○紅砂糖掛
一獨活短冊切○蓮根○木耳○魚肉○新生姜○吹貫蕃椒○生酢仕立
一小鳥燒○串銀杏の二種
一奈良漬○新澤庵○味噌漬茄子の三種

○大菜六種

一方頭魚○小鳥蒲鉾○南京芋○胡蘿蔔○銀杏○木耳○しんじよ蒸○嫁菜こま〳〵を上に掛け(大鉢)
一鮟鱇○蕗の薹味噌汁仕立(銘々椀に盛る)
一鰕蒲鉾○丸剥き蘿蔔○椎茸の三種、淸汁仕立(丼)
一方頭魚のユーワン燒○押慈姑○赤蕪菁菊形の酢漬等の三種(中鉢)
一鷄の骨付切○孟宗筍○獨活○木耳○淸汁仕立○

上に粒胡椒掛け(并)
一砂糖湯○細巻天○生姜の絞り汁掛け(并)
以上
此の献立の料理法は、餘白なければこたびはかゝげず。次號にて詳しくいふべし。



秀歌集(卅六)

鹽井正男

○

神にさへわかすまことをいひかねて
　けふまでものを思ひけるかな

○これは、八田知紀の歌なり。しのぶ草第三篇にあり。初めて、わが思ふ情をうちわけて、人にいひ出でたるこゝろをよめるなり。○神にさへ。神にまでと俗にいふところなり。○わかす。わがかくしたるこゝろを、うちわけていふなり。○まこと。わが眞情なり。人を思ふわがまことの情をいへるなり。神にはわが眞情をうちわけてわが心のならむことを、たのみきこゆるとなり。○いひかねて。思ふ人には、それとうちわけてわが眞情をいひ難くしてといふことなり。○ものを思ふ。心に思ひわづらへるをいふなり。

○一首の意は、神にまでわが情をうちわけてきこえながら、反て、その人にはいひ出でかねて、今日まで心に思ひわづらへるよといふことにて、巧みに面白く、またよく人情の趣きをうがちてあはれなり。

○

燈火も君がひかりにあはぬよは
　照らすちからのよわりがはなる

○これも、おなじ人のおなじ集にあり。思ふ人の來遇はずして、燈下、何となうわが心のうちしめりて力なくればゆれど、もゆる燈火のほかげも、何とな

う人のある時には似ず、光りさびしげにおぼゆるけしきをよめるにて、一首の意は、明なるべし。ともしびもといひたる詞に、わが心のさびしく力なきをふくめたるなり。詞のつかひざまといひ、情景といひ、誠に才吟といふべし。

○

朝たちて竹田の原をわけくれど
　都は霧のおくにぞありける

○これも、おなじ人のしのぶ草にあり。○朝たちては。朝に出立してなり。○竹田の原。地名なり。○一首の意は明なるべし。「都は霧のおくにぞありける」といへる詞のおくに、都の方をしのぶ限りなき情の、何となうこめて、あはれなり。都をしのぶよしをいはずして、たゞ霧のおくにぞありけるとけしきをいひて、しのぶ心をふくめたる、誠に面白し。歌の味ひは、かゝる所にありぬべし。

○

老い人のさらばといひてとりすがり
　なきしおもかげ身をもはなれず

○これも、おなじ人のおなじ集にあり。八田知紀がはじめて都にのぼりける時の旅路にての歌なり。○老い人。年よりたる両親などをいへるにやあらむ。○さらばといひて。さらば最う出立するか。別るゝにかなごりをしやと いひてといふやうなるこゝろなり。○取りすがり。別れゆく知紀の身にとりつきて別ををしみたるなり。○泣きしおもかげ。泣きて別れををしみし老い人のすがたなり。○身をも離れず。老人の別ををしみしすがたが、我が身をはなれず。絶えず目にちらつきて見ゆるをいふなり。○一首の意は、明かなるべし。さらば最う行くか別るゝにか、をしやといひて、別れををしみたる老人のすがたの、絶えず目にうつりて見ゆるといふことにて而して、我がをしき心をもよそにつげたるにて、別にさせる工みも、新しく變りたる趣きもあるにあら

ねど、何となうわはれの身をはなれぬ歌とやいはむ。

〇

ながむらむ君がたもとよいかならむ
　まなくしぐるゝ道のそらかな

〇これも、おなじ集にあり。おなじ時によめるなり。〇ながむらむ。旅に出でたる知紀のおとをこひて、つく〴〵と思ひながむる人の上をいへるなり。君とは前の歌の老い人をさせるならむか。〇いかならむ。どんなにわらうと思ひやりたるなり。〇まなくしぐる　云々。旅路の空の絶えず時雨のふりみふらずみ晴れぬけしきをいへるなり。而して、その中に、別れ來にたるわが心の悲しきをもふくめたるなり。〇一首の意は、つく〴〵と思ひながめたまふ君の袂は、どんなにぬれてやれはすらむ、我が旅路の空はたえず時雨のふりみふらずみ晴れぬワイといへるにて、旅路の空の時雨に、わが別れ來にたる心のなみだをいはせ、而して、故郷に殘りてかなしむ君が涙はさこそならむと思ひやりたることなり。ながむる袂といひ、たえずしぐるゝといひたるなど詞づかひ誠に巧みにおもしろく、また、情景もうかべるあはれの歌なりや。

〇

おのづから年のかざりとなりにけり
　葎のかどの梅の初花

〇これも、おなじ集第三篇にあり。〇年のかざり。年をいはひて飾りたつる新年の飾り物なり。〇葎のかど。葎にうづもれたる門にて、さびしく荒れたるいやしき家のけしきなり。〇一首の意は明なるべし。葎の門の梅の早く咲きたるを自ら新年をいはふ門の飾なりと見たてたるなり。自らといひ年のかざりといひ、葎が門といへる詞づかひ、妙に味ひあるを見るべし。

源氏物語講義（十八）

下田義天類講義
山川　鶉一筆記

桐壺（續）

野わきだちて、俄に膚寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、靭負の命婦といふを遣す。夕月夜のをかしき程に、出し立てさせ給うて、やがて詠めれはします。かうやうのをりは、御遊などせさせ給ひしに、心異なる物のねを掻きならし、はかなく聞ゑいづる言の葉も、人よりはことなりしけはひかたちの、面かげにつとそひてればさるゝも、暗のうつゝには猶劣りけり。

以下は即二條の里亭へ御使者を遣はさるゝ實例を掲げたるなり。

○野わきだちて　野分の風たちてなり。野わきは漢語抄に、暴風をのわきと訓めり。語意は、野原をわけて亂れ吹く由なり。八月頃に吹き荒るゝ嵐をさしていふ。だつは俗にらしいなどいふ意の形容語なり。さかしだつ、景色だつ、などいふは、皆このたぐひのだつなり。

○はださむき夕暮のほど　はだは、舊註に、或は膚の意なりといひ、或は將の意なりといひ、議論區々にして一定せざりき。本居翁は將の意に解れたり、されど、これは舊註に拘泥せぬ新説なり。その大意を申せば、秋の頃は風猶寒からで、躰に快く感ずるものなるに、こゝはあまり涼しくなり過ぎて、將寒くなつたといふ意なり。八月頃、誰もよくかやうなるをりにいであふことあり。時候によく適したるかきざまなり。これと同じ使ひ様なる木丁などに、はたかくれてなどある意の現れつゝ、又少しかくれもしたるさまなるに思ひ合せて悟るべしといはれたり。げにこの説の如きは、古來の衆説に比ぶれど、一歩を進めて論理截然たりと言ふべし。されど、予は肌の意の方を主張するものなり。翁の説の如く

にては、にはかにといふ語不用に歸すべし。翁のいはれたるが如きの意は、みながらにはかにと言ふ一語中に含まれたり。肌の説を慥むる爲の用例には、次のたまかつらの巻にも「秋風谷よりはるかに吹きのぼりていとはた さむきに云々と」あり。萬葉にも「たび衣やつきかさねていぬれども猶はた さむしいもにしあらねば」などある皆肌の意ならざるはなし。用例の斯の如きのみならず、斯く解する方適當せるを覺ゆ。八月の初つ方なれど、思ひかけざるに早野わけらしい風ふき荒びて、突然肌寒く感ずるやうな夕暮のほどの意と見て最明亮なるべし。

○ればし出づること多くて　秋といへどさらぬだに物思はしきものなるに、陛下は忘れかねたまへる更衣のことを思ひつゞけ給ふ折から、此の荒涼なる夕暮に遇ひ給へり。思し食し出させたまふことの御在しますべきは申すまでもあらず。

○ゆげひの命婦　宮中女官の名なり。前に云ひたる親しき女房とありしつらの人なり。

○ゆふ月夜のをかしきほどにいだしたてさせたまうてやがてながめおはします　ゆふ月夜は宵月なり。宵のほど西の山の端にかゝれる月をいふ。即ち三日月の頃より十日頃までの月をいふなり。されどこの時は八月の十日頃のことなるべく思はる。肌に染む風の音は俄にあらだちて村雲の立現はれたるをりしも、眉のごとき月は西の山際近くかゝりたるなどは最人の感情を引くべき風景なるべし。陛下がこの風景に對したまひて、最愛の御息所を追想したまひ、滿腔の御感情の抑へがたくおはしますさま、思ひやり奉るにも餘りありと言ふべし。いだしたてさせ給うては、宮中より二條の里亭へ御勅使靫負の命婦を出したてさせ給ひてなり。やがては其の儘なり其のまゝ其の御座所にてなり。ながめは長目なり。心に思ふことありてジツト物を見詰めて居る姿を言ふ。今これを眺望の意に用うるはたがへり。

この所を、評釋に、御使を出したまふほどにくれ果てゝ夕月夜となりたる樣いとゞめでたし。この一段は殊に詞を整へてみやびに書き出されたりといへり。げにこの所は餘情あふるゝばかりなる所なれど講說などにてはかけても言ひ盡し得べき所にあらず。この言ふべからざる味は、讀者宜しく自身に咀嚼して以て自得せらるべし。されど、唯一言しおきたき所は、次の命婦が使命を果して宮中に歸着したる所と對照して見られむことなり。その折陛下には如何なるさまにてかおはしましけむ。讀者は始終の文意に熟して後に、嫋々たる言外の餘韻に打たれて、必涙にさへあへぬことあるべし。

○かうやうのをりは御あそびなどせさせたまひしに

云々やみうつゝには猶おとりけり　陛下滿腔の御感情抑へがたくて、打ながめおはしまして、ありし昔のことどもを心に思ぼし浮べたまひし時の御心情なり。かうやうのをりは、かくやうのをりはを音便にいへるなり。斯樣の場合に際してはなり。

○御遊などせさせ給ひしに　御あそびとは音樂を奏することなり、御息所の御在世中は、斯樣な秋の夜のめでたき風景に望みては、宮中にては必御宴遊の御催ありて、夥多の女御更衣たちの琴笛の合奏などを遊ばせられ給ひき。其の折にはの意なり。

○心ことなる物のねを掻きならし、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは異なりしけはひかたち云々御息所のことを申すなり。その折々には、御息所は他の女御更衣たちとは一段異つて、立勝つた琴の音などを掻き鳴し、或は一寸したことを申し上ぐる一首の歌も、他の人々よりは別段に趣向の面白かりし其の時の樣子あひ、顏つきなり。

○面かげにつとそひておぼさるゝも　さやうにすぐれたる御息所の樣子面貌の、陛下の御目先にちらつきて見えたまふなり。つとそひてはヅーッと帝の御側に影幻となりて、立つてをるやうに思召さるゝよ

しなり。

○やみのうつゝにはなほおとりけり

例の引歌なり。古歌に「ぬばたまの暗のうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」といへる歌あり、其の意は、闇黑の内なる現實は、聲はきこゆれども姿はみえず。手にはさはれども形は分らぬ故に、それは却りてはつきりとみた夢にはいかほども勝つてをらぬといひて、現實のはかなきを夢幻に比べていへるなり。暗中の現實は夢にいくらも勝らざりけりと古人は詠みしが、陛下の果敢なき御心中の思は、能く思へは猶ヤッパリ其の暗中の現實よりは遙に劣つてをるとなり。古歌を楯としながら、其よりは更に一歩を進めて新案を點出したる所、妙言ふべからず。過ぎし年月のことどもを思ひめぐらしてみれば、御息所のありし昔の面かげが、主上の御目の前にちらついてみゆるなれども、それには言葉をかはしたまふことも出來ねば、手を取りたまふこともできぬ。闇の中の現實は姿はみえずとも、定かにわることなれど、まだしもなり。それに比ぶれば朕が身の境遇は遙に劣つてをるわいと仰せらるゝなり。

以上は一句々々の解にて說き盡したりと覺ゆ。生硬なる詞もて改めて大意を一括せんよりは、讀者自原文に至りて味はゝれなば、かへりて其の妙を知るに近かるべきか。



年の飾

磯野徳文

新年のかざりものにつきては、諸說さまざまあれど、先、一つ二つをとり出でんに、元錄のころに某

が書ける四季禮法といへる書に、

一、門松を立つる事は、松は常磐の木にて、霜雪にもいたまず、歳を經る木なれど、松に比して久しからむ心なり。むかしは人々年首に、野邊に出て、男は七枚、女は二枚、松枝を折り、薬として飲みしも、其のちとせの徳を祝してなり。

千代よろづ花さくまでと契るかな
わが世の春に相生のまつ

一、竹を建つる事　仙郷の竹は千尋ありて、千歳あれど、松と相生のものなり、其の上、内虚にして、いさぎよく、直にして程よう節あり、王政に叶ふものなり。仙家の竹の千歳經る様に久しくあらむとの賀ならむ。

萬代の春をかさぬる九の重に
わきて色そふ庭の呉竹

一、注連縄を張る事　不浄を拂ふて春の神を家内へ勸請の心なり。藁を七五三に下るは、天神七代地神五代三は人皇をかたどるなり。

七五三縄のかせ音きくもおそろしや
障化の神もいまはしりぞく

とあれど、こはいかゞあらん。こと〴〵くは、信けがたし。この第三にいへる注連縄のはじめて見えたるは、古事記上卷、石屋戸のくだりに、

即、布刀玉命以尻久米縄控度其御後方白言従此以内不得還入故天照大御神出坐之時高天原及葦原中國自得照明

と見え、又、之を日本書紀神代卷には、

於是中臣神忌部神則界以端出之縄云々、

と見えたるなり。さて、本居宣長翁、こを釋して、いはく、

藁の尻本也をきらずて、こめたく縄なり。こめは、くめにて、何くるめなどいふ義なり。

といはれ、加茂眞淵翁は、

尻は、御後方、久米は限目の義なり。

といはれたるを、富士谷御杖翁は、
眞淵のは、この繩の主意を釋し、宣長は、この繩のさまを釋せられたり。ともに全からず。これは、この二をかねて、わらの尻をきらで、なふをもて、日の神の御後方をきはむるよしをさとし給へるなり。

といはれたり。こは、序なれど、引き出でたるなり。さて、又、御杖翁、門松のことを論らひていへるは、

新年、家々、しりくめなはをひきわたし、松たてなどするを、今は、何の故ともわきまへず、只迎邪の設なりとのみ心得たり。松をたつるは、石屋戸の件なる根許士に許士たる眞坂樹をまねぶなり。しりくめなはもその件にあり。わが御敎、天照大御神を石座にこもらせ奉るまじき事、人の大事なるが故に、年のはじめに、石屋戸の件のさまをまねばせられたる道式なるなり、松を坂樹也といふ事、今のよには、榊とて、一種の木あれど、人みなその木也と心得たれど、それは、かへりて、後にて、神代卷に、榮樹とかゝれたるが正字にて、何の木にもあれ、榮えたらん木をいふ名なり。されど神書に、榮樹とあるは、何の木なりしか、それは知らず、小松は、野山にいとおほき物なるが故、これをねこじたるなるべし。しかるに、松は年久しき木なれど、歲首のことほぎにたつる也と心え、すでに、桃花禪閤の御說世諺問答といふ物にすら、「松はちとせをちぎり、竹は萬代をちぎるものなれど、年の始の祝事にたてはべるべしとあそばせり。

といはれたり。御杖は、北邊富士谷成章翁が男なり。桃花禪閤とは一條兼良がことなり。

さて、この石屋戸の件といへる事は、古事記、日本書紀をはじめて、古語拾遺等の古書に見えたり。今、一々引き出でんも煩しく、かつ、訓みやすからねど、今は、師久米翁が、こを假字文につゞれる大八洲史の一節をぬきいでんに、

こゝに須佐之男尊、天照大御神に申給はく、吾心、あか

きが故に、男子をうみつ。しかれど、おのづからわれかちぬと申して、勝さびに、大御神の御田の畔を放ち、溝を埋め、又大嘗きこしめす殿に、くそまりちらしなどし給ふを、見なほし、聞なほし給へども、猶そのわしきわざやまざりければ、大御神、天石屋戸をさしたてゝこもり給ひき、卽、天地くらく、常夜ゆきて萬のわざはひこと〳〵くおこりき。こゝに八百萬の神たち、高御産巣日神の御子思兼神におもはしめて、常世の長鳴鳥をつどへなかしめ、石凝姥命をして、日の御形の鏡をつくらしめ、天明玉命をして、八坂瓊五百の御統の玉をつくらしめ、天日鷲命をして、青和幣白和幣をつくらしめ、天香山の五百つの眞賢木を根堀にこじて、上つ枝に、八坂瓊の曲玉をかけ、中つ枝に、八咫鏡をとりかけ、下つ枝に、青和幣白和幣をとりしでゝ、天の太玉の命をして、さゝげもたしめ、天の兒屋根の命をして、太祝詞をねぎ申さしめ天手力男神を戸わきにかくれ立たしめき。こゝに、天の宇受賣命、天の眞拆を縵とし、天の蘿をたすきとし、さゝ葉を手草に結ひて、著鏁の矛をもちて、槽ふせて、ふみとゞろかし、歌ひ舞ふ時に、高天原ゆすりて、八百萬の神わらひたりき。こゝに、大御神あやしとおもほして、天の石屋戸を細めにあけて、見そなはす時に、かくれ立てる手力男神、その御手をとりて、ひき出し奉り、太玉命、しりくめ繩を、御うしろに引わたして、こゝより内にな、入りましぞ。と申しき。故、天照大御神出でませる時に、天地おのづから照りわかりき。こゝに、八百萬の神ともに、議りて、須佐之男命に、千座のおきどをおほせて、ひげ髮をきり、手足の爪をぬかしめて、神やらひにやらひき。

とありて、いとやむごとなき御事なりけり。

屠蘇酒　　同人

元旦に、屠蘇酒を用ゐること、今の御代は、公には、行はれねど、俗には、専することとなり。もとこれ、皇朝の故事にあらず。唐土と交通はじまりて後、彼の國の文物を採り用ゐられしより、この事も、随ひて行はれ、ふるくは、専、公に行はれつるなり。今、諸書よりこの、節々をぬき出で、參考に資せん。

或書に云、

本朝にて、屠蘇酒を用ゐしは、今を距ること一千八十餘年のむかし、嵯峨天皇の御宇、弘仁年中、始めて行はれたりといふこと、月令博物筌に歳時記を引きて之を載せ、十二月十九日、藏人諸司を率て、大藏省の野倉に向ひ、藥を出し、晦日、典藥寮御藥を進らす。藥、女官、朱高机四脚の上に置き、之を献ず云々、江次第に記せり、又、醫師丹波氏の祖康頼丹波國矢田部を領し、丹波宿禰の姓を賜はり、其の苗裔兼康明醫の譽を得て、其の子孫兼康を以て氏とし、代々三十石の祿を屠蘇料として賜はり、毎臘月三十日に、屠蘇並に神明白散、度障散を製し、禁裏院中、及び官家に捧げ來れること、雍州府志に見えたり。抑、屠蘇の起原は、支那の古代に始まり、本草綱目第二十五、造釀類に、華陀が處方なることを載す。李時珍が曰く、蘇は魁鬼の名にして、此の藥能く鬼炁を屠割す、故に名づくと云ふ。又四時纂要に、屠蘇は孫思邈が草庵の名にして、鬼氣を屠絶し、人魂を蘇醒すと見えたり。

造法

赤朮（千金方作白朮）　桂心各七匁五分　防風一兩　菝葜五匁
蜀椒　桔梗　大黄各五匁七分　烏頭二匁五分
赤小豆十四枚

右九味三角の絳嚢に盛り、除夜井底に懸け、元日取出し酒中に置き、煎ること數沸、家を擧て東に向て之を

飲む。少より長に至る、次第に從て飲む。藥滓は還て井中に投ず、歳毎に此の水を飲む時は、一世病なし云々。

(白　散)雖康家の方　白朮　桔梗　細辛各一兩

(度障散)雖康家の方　麻黄一兩　山椒　細辛　防風

桔梗　乾薑　白朮　肉桂各五分

屠蘇酒詩

紫府仙人授寶方。新正光許少年嘗。八神奉命調金鼎。一氣回春滿絳囊。靈液夜流千尺井。春風曉入九霞觴。便將鳳曆從頭數。日々持杯訪醉鄉。

など見ゑ、又、

延喜式典藥に云、

白散一劑元日御藥歳旦以温湯服五分一家有藥則一里無病帶是散病氣皆消

屠蘇一劑治惡氣溫疫辟邪氣毒氣

と見ゑ、

又、江次第卷一供御藥の條に、

同日十二月卅日以屠蘇漬御井以緋絹袋盛件御井在豐樂院西典藥寮巽以日中可懸沈井中勿令至泥云々、元日早旦云々、宮内典藥寮官人侍醫等誥申御藥或用銀鎗煖酒云々中略

次供一獻屠蘇散也八枚細切云々先煖御酒以御藥入於酒名之屠蘇盛別器宮内輔典藥頭侍醫等三人一々進膝突嘗之依位階皆用別杯

と見ゑたり。延喜式には、温湯をもて服すとあれど、後には酒を用ゐしこと、この江次第にも見ゑ、又、土佐日記などにも、承平四年十二月廿九日の條に、

屠蘇白散酒くはへてもてきたり。

とあるにても知るべし。さて、この屠蘇は、もと藥品なること著し。今、俗に「屠蘇を祝ふ」などいふは、古きならはしなるべけれども、思ふにこは、訛れるなるべし。さるは、初温湯をもて服すと見ゑたるにても知るべし。かくて、「元日」には、歯固よりはじめて、諸種の祝われど、これと、混じ

たるならん。酒は、皇朝神代よりありて、祝宴其の他にも、専ら用ゐしことは、古書にも、數多見ゑたり。元旦にも、之を用ゐて、祝賀しけるに、遂には、この屠蘇をも、濆し用ゐしより、祝ふ心とは、なれるなるべし。

主從心得草（後編上續）（女鑑第百四十三號の後）

諏訪　忠元寄贈

又右の修行奉公は殊の外つとめがたし。右にいふ、ういつらいめ、腹の立事杯ある時は、扨も〳〵内に居るならむ、檀那様にて居るべきに、かやうなるういつらいめにあふ事かと、いとゞなげきの増長する者なり。夫をこらへるから玄て、大きにつとめがたし。又れでりの心出た時は、まゝのかわよ引負玄ても親元より償ふ分の事と、なまけ安き所をこらゑるだけ、大きにつとめにくし。是同じ奉公にて、辛抱の厚薄はある事也。右貧乏にて奉公する人は、朝夕親元の貧苦を忘れぬやうにすべし。是専要の事なり。是さへ忘れざれむ、辛抱も堪忍も出來て、出世する事疑ひなし。又修行奉公の人は、親元の有福を決玄て思ふべからず。ふつ〳〵忘れてつとむべし。是大切の事なり。今ういつらいめの修行は、人の爲にあらず、皆我身の爲なり。此事をよく玄つて上を敬ひ、下の難儀を玄りて是を忘れず、旦那となりし時我身のれでりをやめて、下の難儀をすくわんといふ慈悲心を起すべし、親元の有福に心をかけ、鼻に杯かけて奉公をいたすべからず。貧乏の子供と同じやうに勤めはたらくべし。又武家の奉公は樂みのやうに見ゆれ共、萬事油斷ならず少しの言葉の間違ひ、聞違ひしても、不意不調法となつて、遠慮閉門、甚敷はいとまの出るもあり。又大小の手前に對し、引くに引れぬ事にて、是非なく命にかゝる事杯も出來る者なり。又算筆は勿論夫〳〵の藝道も身分相應に心がけなければ、武士は耻といふ者あり、是等を覺悟し、彼是の心遣ひ中々申すも愚かや。商家の奉公は外に何も心遣ひ

なし、少しの間違ひ間違ひ等、町家のかたじけなさは、是は不調法と申した切にて濟事なり。あまり耻にも越度にもならぬ者なり。又算用等も、商家の事なれど、あまり習わず共出來る者なり。其外他所商ひの入組たる算用事抔は、しりたるほどの事はなけれ共、あまりしらず共、隨分と間に合者なり。手跡抔は、日記賣上書出しさへ出來れば不自由もなく事足者なり。商家の手代抔、能書にて萬事に立入たる人は十人か九人迄はこしやくにて、肝心の奉公を疎略にする者なり。心ある人はあまりほめぬ者にて候。予も世間をひろく見るに、商家の主抔は、萬事に達し手跡抔よくかき、からよう抔かく人は、大方は身上全く持とげぬ者にて、親よりゆづりの家屋敷抔も家質に入て立派に借用證文抔かく人を多く見たり。其果は町家のかき役、又は名主の手代、宿屋の下代等になる者多し。又世間の金持を見るに、大方は惡筆にて、手紙抔も宛字まじりの不文有も、結句奥床敷見ゆる者なり。是等は惡筆不文言の耻辱は、白かべの光澤よく、年々土藏の數のふへるにて雪ぐべし。爰を以て考へ見るに、萬藝に達し、能書能文の人よりも、はるかに其心高し、依て奥床しきと申す事なり。兎角ほしき者は金なり。人の命を助るも金、人の命を捨るも金、人をなつけなびかすも金、人と不通不和となるも金、此故に用ひやういたつて大事なり。極上々の寶なれ共、惡敷用ふる時は、甚だ災ひをなすものなり。金持たる人は善人にても卑しきたなしと誹られる者なり。心得あるべし。人にも誹られず、金をも萬とためんと、兩方よきやうにはゆかぬ者也。可愛がられて貧するよりも、憎まれてもそしられても、金持たる方が勝なり。され共、智惠才覺にては金はたまらぬ者なり。金ためるには口傳あり。信の一字也。此一字さへはなさず守りにかけて居る時は、金銀は自然とたまりて、惡事災難を除き、人によく用ひられ、何にても望み事叶わずといふ事なし。人間一生此信の字さへ持て居れは、望まずして忠孝をなし、威なくして

諸人敬ふ。人間一生は勿論、天地の間に信の一字なくしては、萬物調ひがたし。仁義禮智信の五常も、信の一字なき時は、仁も見へどうとなり、義もしやちこどるに似て、禮もけいはくとなり、智も貪欲うぬばれとなる。

木	火	金	水	地
仁	義	禮	智	信
春	夏	秋	冬	土川

ある人のいわく●、仁過れど勇を失ひ、義過れど貧をする、禮過れどへつらひとなる、智過れどうそをつく、信過れど馬鹿となる。といへり。過たるは猶及ざるがごとし。何でも中道が誠のよい所なり。（以下次號）

漏屋の翁（二）

白松園主人

あはれ馬かな、可惜漏屋の厩にありては、所謂櫪櫪に伏すなんめりと、心のうちにおもひつゝ、かたへの芝草をとりて、食せながら、鬣うちなでゝ。いと羨ましげにながめたりしが、忽地何か思ひ出でぬる如く、頻りに含笑みて、頷き／＼厩を退き、翁に向ひて、この氣色にては、今夜を過さんこと、極めておぼつかなし、夕飯はてなど、やがておのれの許に來て、宿り給ひねといへど、翁は喜びて、うれしくこそ、御情けにあづからどやといふ。然らどおのれは先づ皈りて、まちまゐらせんとて、出で行きぬ。

降りみ降らずみ定めなき、浮世の秋のむらしぐれ、晴れぬとすれどまた曇り、向つ峯にかゝりし一朶の雲の、稍や大きく廣ごると見るまに、雨の足はやひとつふたつおちきぬ。いさゝ群竹うちそよぎ、松の梢の動きそめぬると共に、一陣の風さとおとし來て、彼方の黒雲を、飛ぶが如くに吹きおくりぬれど、雨はさながら、こぼすが如くに降りきぬ。軒の玉水すさまじく、廣くもあらぬ山六が家の庭は、忽ち湖となりて、海人の小舟も寄るべうなりぬ。日は暮れぬれど、雨は猶止まん

ともせず、月の出づべきよしもなければ、世の中すべて常闇なり。

曲六はかねて、漏屋の翁と契りおきたれど、饗せんとまでにはあらずとも茶煮てだに待つらんとは、大方のおもひなるに、さはせて、曲六は簑笠うち被て、草鞋穿きかためて、さしもふるをも物ともせで、外に出でぬ。翁迎ひにかと思ふに、翁の宿へは、山路ながらも一筋の正しき道のあなるにそなたへ行かぬは、あらぬなり。さてはいづくへか行くらん。

暗さは暗し、物も見えず、道なき道をふみ分くるに、木の根につまづき、荊棘にとられ、苔滑にして、まろぶこと數を知らねど、更にひるまん氣色もなし。これやこの、闇部の山を夜る行くなれど、さすがに、慣れたる山路なれども、踏みや迷ひけん、さす方にはいでやらじとおぼしくて、只管に焦急つゝ、いとおそろしげなる岨路に出でたるを、暗けれどさりとも知らで、辛うじて、岩角にすがりつきて、行きすぎんとするほどに、忽ち足を踏み外して、遙かの谷へまろびおちぬ。あなやといふ程もあらでこそ、夢に夢見る心地して、身は千仭の谷底へ、紛碎しぬと思ひしに、但ある岩のはざまに、生ひ出でたる曲松の幹に、礑とうちあてゝ、落ちんとしつゝ、松が枝に帶をひきとめられて、危うくもかゝりたり。

曲六は、松の幹に小腹をうたして、息や絶えけん、暫らくは物も覺えざりしに、雨の雫の咽に入りたるに、ふと心づきて見るに夜も更けたりとおぼしくて、雨は止みて、在明の月かげ細やかに、雲間にさしのぞきぬ。嗚呼危いかな、身は僅に松が枝にひきかゝり、下の方は絶壁削れるが如くにて、岩に激する溪水のおと、幽かに聞ゆ、飽まで猛き曲六は、舌打してさるにても我運のめでたさよと、獨語つゝ、徐々と身を起し、蔦葛に取りつきて、もとの處へ、這ひ上り、月をしるべに、漸う尋ね着きぬるは、そも何處ぞ、これなん漏屋の翁が門なりける。

時雨集

白松園主人
(亡兄作)

○我がすめろぎ

我が日の本の國人が
神は何處に坐すらん
霞みて見えぬ大空に
世に比ひなき親よりも
外國人があさゆふに
千代田の宮に高御座
知し食すなる天皇は
御末にませる高光る
稱へ奉りて八百萬
遠つ祖より我らさへ
正しき神に仕へなん
君にましけり天皇は
動かぬがごと伊勢の海の
仕へ奉らん天皇に

仕へ奉らふ神といふ
呼べど答へず目に見れど
世に二つなき君よりも
尊く坐す神といふ
仕へ奉らふ神ならず」
ゆたに即かして天の下
遠つ御祖の日の神の
日の大御子と昔より
千萬の代もかはりなく
子さへ孫さへ現世の
あな嬉しやもすめろぎは
神にましけり富士の嶺の
あせざるがごと萬代に
仕へ奉らん天皇に」

い向ふ奴ありもせむ
大和刀を打振りて
荒き波間もけひらきて
大和御民の建良雄が
神の御稜威を四方の國
殘る隈なく輝かし

鍜へかためし敷島の
固き岩根も踏さくみ
影も止めずやらひつゝ
を健びをして天皇の
洲の八十洲打こめて
仕へ奉らん萬代に」

菓子の話

甘泉野人

菓子を嗜喰することの有害なるわけを、矢釜しく說かれた博士もありましたが、菓子は果して、かやうに有害なものでありませうか、何物でも、過食すれど、腸胃を害するは、當然のことで、たゞ、菓子のみに限りません。又、粗惡なるもの丶有害なるも、其通りです。甘いものが、歯を害するといふ俚諺も、實は間違なのです。ヘンリー、ピコーホルト公爵などいふ人は、四十年間、毎日砂糖を食ふ量は一磅に及ぶといはれまし

たが、生前、曾て齒を痛めたること無く、殊に咳嗽の患を知らず、七十歳の高齢に達して後、死にました又マロレリ氏も、深く砂糖を嗜み、甘物喰ひでありましたが、これも八十歳に至るまで、齒牙健全で、百歳の長壽を保つたと聞きました。菓子黨の方の人に、長壽者が多いことは、ドクトル、スレア氏の記録に載せてあります。砂糖産地の交趾などは、人民の砂糖を食用に供することの多きわけでありまするし、毎朝、砂糖漬の果實を嗜食するともいひますが、齒牙は健全です。又抜き取りたる人の齒牙を砂糖に浸して、三四百日を經過しても、決して侵蝕を受くる様な徴候を發見されなかつたと、其道の博士が申して居ります。併し、菓子の齒牙に、實際有害なるもの無きに非ずで、それは既に酸化いたした糕料や粗製の糖類や、又は過度に砂糖を食し、口内の臭氣を醸し、不潔を來す様なことは、いけないものです。又飴や、金米糖類の如き、齒牙に粘着し易ひものは、酸化しますから、自然害となります。又硬いものは、總て齒冠を毀傷する憂がござります。又齒根膜に皷動を起し、骨膜炎症を誘發するものです。併し菓子は、今日決して十分に發達して居ないばかりでなく、或ものは、却りて退歩して居ります、故に十分改良いたさねば、無害にして、且風味よきものとなりません。今本邦現在の菓子につき、其道の人の詳しき調査により、左に一々御話いたします。家政上の心得となるばかりで無く、又博識を助くる一つです。今日本邦に行はるゝ菓子を、ザット分類いたしますれば、先左の如きものでありませう。

第一　乾菓子
第二　中乾
第三　蒸菓子
第四　燒物
第五　棹物
第六　掛物
第七　細工菓子及飾菓子

第八　西洋菓子

（以下次號）

年の始はいともしろくをかしく、くらすが我日本の神代のあと〻しられたり。につかぬことながら例の三江茶話の問答ふたつみつよつ拔出るになん。

花の友どち

金津常十郎

客、問て曰く、人、皆。花を愛するに、心二つあり。今を盛と咲きたる花に見とれ居て、長き日の暮る〻をもしらざるあり。又、花の枝を折取て、いへづとにするもあり。予ひそかに思ふに、花を折るも、愛する心の切なる所よりいづるものなるべけれども、予に於ては、忍びざる所あり。尤、草木は非情といへど、愛する人の心をたとへていはゞ、名畫の山水を見て、愛する餘りに、其の畫の片はしを引さきて取かへると同じき事にて、其のものをそこなふなり。春和の氣に應じて、花のいと面白く咲きたるにめで〻、日の暮る〻をも忘る〻は、是、眞に花を愛する情なり。みだりに枝を折取るは、愛するに似て、實に愛するにあらず。尤、俗情に近し。公がたもひ給ふ所いかゞ、

主曰く、善哉、足下が愛する情や。其のものを愛して、其のものをそこなふは、皆、是、俗人の心なり。故に心ある人は、その愛情切なりといへども、其のものをそこなふ事なし。みだりに花を折るなどの事は、多くは、俗客の酒に狂して、此の狼藉をなすなり。これにつきて、眞に、花を愛せし人の事を話申すべし。江戸の人に、内成と云狂歌の上手あり。あるやんごとなき君、此の内成をめしつれさせ給ひて、朝より下屋形へいたり給ふに、道の邊に、いく年をか經にけん、大なる櫻の今を盛と咲つらなりし花のまに〳〵朝露を帶びたるを見給ひて、此の花いとめづらかなれど、ふりよき一枝を折れよと、左右を見かへり給へど、近從の人々かしこまりて、櫻の枝にすがりつき、手折んとすれども、さぞかりの肥ねたる大枝なれど、たやすくは、を

れもやらず、其ひまに殿は、內成をめされ、此の朝櫻に、一首をと仰せられければ、內成しばし案じて、かくぞよみける。

手折られしゆめや見つらん梢にも
　ひやあせながすはなのあさつゆ

此の歌を聞き給ひて、しばし默然として、おはしけるが、やがて、にはかに、花折る者を、呼びとゞめ給ひ、いざ歸るべしといひすてゝ、いそがせ給へば、つぎつぎの人々、大に驚き內成は、いかなる歌をかよみて、君の御心にやさかひけんと、皆々、あしばやに御供してぞかへりける。內成も、甚うれひて、われはよしと思ひても、君には何とかおもひ給ひしやらんと、心の內、ふかく憂ふれとも、せん方なく御跡をしたひつゝ、いそぎけるが、殿は御館にかへらせ給ひて、いそかはしく內成をめされけるに、おそる〳〵御前に、はひ出れば、思ふにたがひて、御かはばせうるはしく、そこものよみし歌、誠に感ずるにあまりあり。先の程は、歌の心に恥入て、人心地はなかりしなり。はからずも、彼花ををらんとせしあさましさよ。汝もしかたはらになかりせば、まさなくも、折取て、心ある人にかなしまれん。其方が一首によりて、我も名をけがさず、花にも疵をつけざりしぞと、あまたゝび感賞したまひければ、內成は、かうべをたゝみにすりつけて、こはありがたき仰せをかうむるものかな。やつがれ、常に、花を折ることを厭ひ侍るゆゑ、君へのおそれもかへりみず、ふとうかみたる儘を申し奉りしに、かくまで御心にかなひしは、いみじき己が幸ひにて侍りと、御請を申上ぐれば、いよ〳〵御感ありて、御手づから盃を賜はりけるとなり。其の花を愛する實情見つべし。又江戸深川といふ所に和多守と云狂歌人あり。一とせ春のなかば、友どちにさそはれて、御殿山の花見に行きけり。其の日は、風もなくて、花は盛に咲きみたれて、雲をなせば、見る人は、又、山をなせり。和多守は、花のけしきに心をうつして居たりし所に、向ふより酒に

ゑひつる男、いづこにてか手折りけん、大なる花の枝を折かつぎて、よろぼひ來りけれど、人々ゆびさして是に歌よめこいふうち、彼のゑひ人、いかゞしけん、仰向にころびけれど、和多守笑ひて、

をられつる木やうしろ髮ひくやらん
　　はなをかつぎてころぶゑひ人

といへる歌を興に乘して、高く二三べん吟じけれど、彼の醉人も、此の歌や耳に落ちけん其の儘、花をかたへに捨て、ゆきかふ人の中にまぎれいり、いづこともしらず、かくれゆきぬ。和多守、其の日はかなたこなたと、花をながめくらして、家に歸りけり。夫より、一月あまりも過ぎて、一人の小者、和多守が家に來りて、一つのとぢぶみをいだし、是は、我が主人のよみ給へる歌なり。願はくは、是に添削して賜はれといふ。和多守、聞きて、某うたの道はよくもしり得ざれど、人々のよみ給へるに、よしあしつけん事、思ひもよらずと、うけひかざれど、小者はしきりにこひてしりぞかざる故、今はせん方なく、其のうたどものよしあししるしつけてかへしぬ。其のちもかくする事、數をしらず。其の小者に家をとへども答へず。名をとへどもいはず。只折々おくりものなど多くおこせて、よろこびをいふのみなり。和多守を初めて、家の內、皆々ふしぎに思ひけり、かくする事、二とせあまりも過ぎて、又、ある時、彼の小者とぢぶみをもて來りける故、彼是ねらみわけて、其の卷の奥を見れど、

花をかつぎてまろびし時の酒のゑひ、この頃やうやうさめはてゝ、風流の味ひをればねしは、うしの御めぐみなれど、このよろこびをのべん爲、けふなんかくはあかしまゐらするなり。

とあり。是にて、考へ合すれど、いにしとし、御殿山にてあひし生醉人にてありけり。されども、何處の人なるかしれざりしとなり。是らにて、花を折るは、眞に愛する風流の心にあらざる事をしるべし。しかしながら、次の條に云へる郡山の正式が花を折り歸りて君

に奉りしは、君を愛する風流の意味深き故、爰にいふ處の譯とは異にして、君も君たり、臣も臣たり。(未完)

兩縣令競義婚孤女(七)

湘玉女史　譯

鍾離公はこの書を得て大に喜びて道ふ、此の如く處分してこそ雙方の美事と謂ふべし。高公の義氣眞に古の賢人に愧ぢず。吾も當に其下風を拜すべしとて、媒夫人を呼て其譯を子細に説知らせ、一副の粧奩を剖て兩分となし、衣服首飾は別に少しッヽ増添て、二女とも一般に、厚薄なく准備へたり。さて十月朔の日の前兩日に到りけれど、高公は先ッ兩乘の花々細轎を安排て、笙簫杯の樂器を吹き鼓らし、兩位の新人を迎へ接らへしむ。鍾離公は先つ嫁粧を發了て後、瑞桃月香兩個の女兒を喚出し、夫人をして他等に婦の道を吩附させ、二女は拜別して行かんとす、殊に月香は鍾離夫婦の恩德に感じ、十分捨て去りがたき思ひわれども去りとて留まること能はざれど、一路事なく趲行さけり。道中の事は詳く說かず、早く縣中に到りたるに、恰好吉日良時に湊著て、兩對の小夫妻は、花の如く錦の如く、堂に上り、舅姑を拜し、合卺の式を終りけれど、高公夫婦の歡喜限なし。正是、

百年好事從今定　一對姻緣天下來

再說鍾離公は女を嫁て三日ののち、夜間一夢を得たり。夢中に一位の官人幞頭を冠り、象簡を持ち面前に立ちて說き道ふ、吾は乃ち月香の父石壁なり。生前この縣の大尹たりしが失火の爲に倉の糧を燒き、其價を賠償の術なき爲め、鬱々として遂に病て亡たり。上帝わが淸廉を察し、無罪を憫み、勅封してわれを本縣縣隍の神と爲されたり。月香はわが愛女、君の高誼を蒙り泥中より拔て美眷となしたまふ、實に陰德の事なり。吾己に上帝に奏聞したり。君の命中には本の嗣なし、然るを、上帝公の善き事を行ふを以て一子を賜ふて君の門を昌大せしめ、君は當に身を高位に致し、

安く遐齢の幸を享くべし。又隣縣の高公も君と心を同うして孤女を娶りたれど、上帝嘉みし悦びたまひて、是も亦其二子に高位厚祿を賜ひ其徳に酬はるゝなり、君はまさに此事を世人に傳へて行を廣むるの方便とすべし、呉々も孤寡を凌ぎ侮り、己を利し人を損ふことを爲すべからず、天道は昭々として纖毫の事も洞察せざるなしと說き罷りて再拜せり。鍾離公は禮を囘して身を起さんとするとき、忽然衣服の前幅を踏み跌き一交て猛然驚き醒むれは。乃ちこれ夢なりけり。鍾離公は即時其夢を夫人に說き知らせたるに、夫人亦嗟呀と怪みて已ます、鍾離公は天明を等ちかねて轎に上り、城隍の廟中に到り、香を焚き禮を作し、夫より俸給の餘分を損て、道士に命し重て新に廟宇を修繕し、この夢の事を碑に勒し、廣く衆人に諭し、又この夢の事を備に寫して高公に報せ遣りけれは、高公は書を把て兩個の兒子に與へて看せしめたるに、各々この奇異に驚きけり、其後鍾離公の夫人は年四十を過て、忽然妊娠し、子を擧けたれど、名つけて天賜と云ふ、後來鍾離義は宋に歸し、仕へて龍圖閣文學士に至り、九旬の長壽を享け其子天賜は太宗の狀元と爲り、高發高升も俱に宋朝に仕へて郷宰となる。是皆後の話なり。且說、かの賈昌は客中に在り、久しからずして囘り來りたるに、石小姐と養娘の姿見えず、段々訊て其故を知り、婆娘と幾場の大鬧を爲したるが、後來鍾離公月香を以て女となし、已が女と同く高門に嫁與せしときゝて、賈昌は今更石家に對し己の情を用ゆる處なく、銀二十兩を把て養娘を贖ひ、石小姐に送り還さんとせしも、那の趙二夫妻は至て睦く、分折に忍びず、一對にて高家へ投靠んことを願ひたり、張婆も也このことは禁めること能はざりき。よりて賈昌は趙二夫婦を領て德安縣に到り、大尹高公に稟知たり、高公は備に事情を問ひ、衙の内に入れ、又媳婦の意見をも問ひたるに、月香の言ふ所も趙二夫妻の情願と同じけれど、遂に改て趙二夫妻を收留き、金帛を以て厚く賈昌に酬いけりと。賈

昌は之を受けずして歸りたり。これより賈昌は老婆の義なきを惱恨て、誓を立て、遂に彼と同居せず、別に一婢を招きて兩男を生めり。此亦善を作したる報と謂ふべし。後人有詩歎して云ふ。

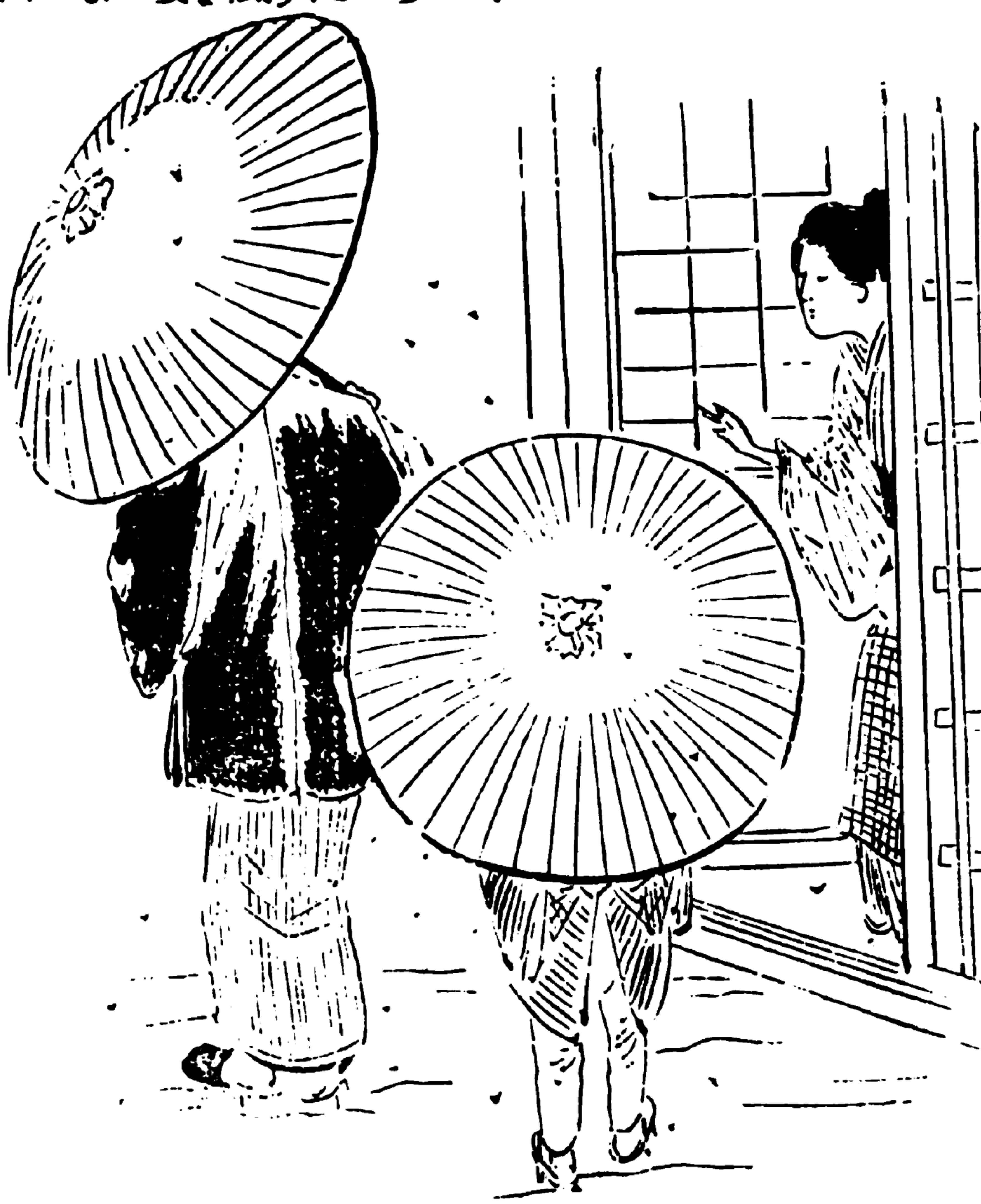
人家嫁娶擇高門　誰肯周全孤女婚
試看兩公陰德報　皇天不負好心人

（完）

才くらべ

蓬生屋女史

「歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまるものかは」げに天地動き出してはたまらねど、人を感動さしむるばかりのさねは持ちたきものなり。むかしある酒屋なりけり。夫も風雅にて、誹諧を好み、又好みて碁を圍めど、妻も誹諧をよくしてなさけあり、ある夕の夜寒なり、ちら／＼初雪さへふりて、まだ時候なれぬ寒さ、一人身にしみ／＼覺ゑけるに、夫は風雅心雪の降る路通ふもおもしろしとてにや寒さをも省ず、一人の小僧を伴に人の許に行かんとす、狗の子ならぬ小僧はぶる／＼とわなゝきながら、旦那の仰せかしこみて後



べに従ひ出でんとす。妻店まで出でけるが、ふと小僧のさまを見て、

初雪やわれも人の子樽ひろひ

と詠みたりしに、夫いたく感じ、げにさなり、晝間は樽拾ひ、夜はまた我が伴にふかすあはれさ心づかざりきとて、其のまゝ子僧をとゞめて、ひとり人の許へ出で行きしとなり。さるにても歌ばかり人の心を動かすものはあらじかし。

禽獸の言行

田端の隱居

恥も慮外も思はず、たゞ低頭平身ぬかつぎ虫のごとく頭をたゝきて世を渡り、命を延べんとするあり。又面を四角によそほひて、内無禮なる者あるは、屁ひり虫の、上下を着しながら、人にくさき屁をひりかくるが如し、また世に金魚の子と字名さるゝがあり。之は親なる人、いたく禮儀ぶり、親のなくなりし時、親の喪は、三年あらためずとて冠りてと〱しうふち衣に身をやつしながら、其の喪中子をまうけたれど人呼びて金魚の子とすとぞ。己がおろかなるは棚に上げおきて、彼の人は愚この人は知慧なし、何は馬よ、あれは鹿よと、人をあなどり、そしるあり。之れ鳥が、いつ、何處へ行くか、行く先もわかぬ雲をしるしに、つかみたる物を埋むるばかりのあはうにありながらあはう〱と人を呼ぶが如し。狐は狡猾なり、烏の樹のうへに好きものを喰へをるを見て、汝が聲はいみじう美はし、一聲なき見よとほめたゞゆるに、がはうがはうと呼ぶまゝにくはへたる物を地におとす、狐、そをさらひ、おろかなと云はんばかりに振り返り〱ゆく、物をたばかり取るは狐の尤も得たる所、人にもまた多く見る所なり。又狸は能く腹つゞみを叩く、世には函屋のことを狸と云へど、こは屋のみならず、人の氣を取り、心を取り、心の太鼓を叩きて人を褒めそやし腹のつゞみをうちて、人を取り持ち興ぜさす、みな

同じ動物なり、親、舅姑、教の師、兄姉長者ならずとも、人、何をかいましめ、何をか叱れど、忽ち怒り、頰をふくらせ、不興の色をあらはす、これ「ふぐ」と云ふ魚が人に叩かれ。忽ち怒りて腹をふくらすに似たり さやうの者は一生不具にて終るべし。（未完）

家庭の花（後篇）

小倉山人

日は全く暮れて、又もや蕭々降り出でし秋雨の音に、清川あわてゝ席を辷り、飛んだ長座を致しまして、いづれ又その内にと手をつけど、マア宜いじやないか、と先生は脊後の柱にかゝりたる時計に躰を捻向けられ、まだ六時を報つたばかりじや、爾う急かれては話が出來ぬ、話はかく、いづれ近日中に話く。何うも誠にと清川は恐悅がつて禿頭を撫でる。先生すかさずそれでのう、今夜はわしの爲じやと思うて、マア最う少しとあるに、一旦尻を浮したる清川も、イヤそれでもとは言はれず、此方へ參りましては、何時も長座を致しまして併し又その中に伺ひましやう、今日も圖らず時を移しまして、最う大方れ臺所の方では、箒が手拭被つて居りましやう。イヱ今晩は未だですオホヽ、オホヽヽ、マアこんな上品な物でも、と奥さまれ蕎麥を運ばせ給へど、清川はいよ／＼尻に重味着きて、起つに起たれず、口の中にて何やら沸々言ひながら、先生夫婦に强ひられて、かさねて元の座に直る。先生は進まぬながらも箸を執られ、珍しくも無いものじやがのう、何うも下戸にはこれより外爲様がない。サア何うかまあ一ッ食つて下されい、これは恐れ入りますな、併し折角の御親切、一ッ頂戴致しませう、と清川も箸執つて、暫くはつる／＼ずるりの合戰長くサア最う一ッ如何です、イヤ最う十分頂戴致しました、と清川箸措いて、唇ふくを待受けて先生「時にじやがのう、何處ぞへ一人あるまいか、差當つて欲しいのじやがの

う。イヤ最う幾何でもあるもゝでサアと云ふ日に成ると、何うも長し短しでな、注文通に行かぬのは嫁と貸家でござりまする。偶ま客姿の美いのがあれば、心が邪慳で始末にならず。これは心が素直と思へば、顔が生憎二の町で『下女の顔よく〳〵視れば鼻もあり』といふ方でしてな、ハヽヽヽ、イエ冗談はおきまして、眉目美き女は心が邪慳で諸藝が出來ず、藝もあり心も素直なる女は大低顔が二の町で、双方無難に揃ひしは、近頃頓と見當りませぬ。特に頭髪を束髪とやらにして、簪の代用に鉛筆とかいふものを挿して居られる姉さん達は、生嚙の學問を振廻し、權利だの義務だのと、目の色變へて説立てゝ親を親として立てず、夫を夫として尊はず、下女に一口小言いふにも、それでは恐らくお前の責任が濟むまいなどゝ、理屈ばつた事云はれるので、家庭は何時も二百十日でござりまする。これは甚だ潜越なる申分なれば、先刻から段々とお話の筋うけたまはれば、貧に堪へて未たその上に、至極お心六かしきお老母さまの御機嫌さへ取らねばならぬとあるからは、これは文學の教育ある束髪あがりの姉さんよりは、精神の上に教育ある町家氣質の娘の方がお適當かと存じまする。これ丈言つて清川はお蕎麥のお禮を濟した積り、早々話頭を他に轉じて、時に先生私は、今日谷中の方角に廻りましてな、霞村様のお宅に一寸伺ひましてござりまする。ムヽ霞村の家へ、それは善うこそ。私も行つたが、お前は何時頃。エヽ此方さまへ伺ひまする一寸前にムヽそれは。善うこそ訪ねてやつて下されたのう。奥さまは嫣然あそばし、湯沸執らせてお次室へちよこ〳〵。委細を存せぬ清川は、こゝが縁談の逃所、しつかり演らんと膝を乘出し、エヘンと一ツ咳嗽を切つて、これは拙者が病前のことなり、一日谷中は霞村様のお宅にお寄り申しゝところ、折からヂッと机に靠れ、何やら切りに御思案最中、先生御圖案中にござりまするか、將又何處ぞの御加減でもと伺へば、左様では無いが何分世の中お
も

しろからず、毎日斯うして欝して居るとの仰せ。紙、繪絹、色々持つて參じましたが、何か御用はござりますまいかとお聞き申せば、紙も繪絹も至極欲しいが、何を言つてもお金が無いので、この四五日は休んで居るとの元氣無きお言葉。それでは、幾何もお使ひあそばせ、ナニ貴方その様な御心配には及びませぬと申せば、それではその繪絹を何うか一枚貸して下され。實はこの頃圖案が出來て、毎夜夢で畫ひて居る。貧乏も此處まで來てはと頭を掻く。折から蜂が飛んで來る。アレ彼奴じやと霞村様それでは是れをと差出す繪絹、一枚ひろげて筆執つて、眉を寄せ、口を噤み、岩の様に身構へして、その間ホッとの息も吐かず、筆の運び如何にも自在に、さら〱さつと畫揚げられしは、虚空に飛んで居る蜂を下からヂッと小猿めが座ながら睨んで居る所。美術に疎き我々すらも視れば視るほど眞に迫つて、無心に飛んだる蜂の翅根、有心に睨んだ猿めが目元、イヤ最う何んとも云はれぬ出來榮、その畫の工合といふものは、と清川膝に疊を叩けば、先生お顏の構へを崩され、煙草の烟を喉にかけてか、コホリ〱と咳嗽の絶間に、ムヽムヽ猿は彼奴の得意じや。サアそれからでござりまする、と清川は喉の奥から聲を出しイヤこれはお見事、この畫は素的と手を拍てば、霞村様は慾が無い。それでは清川お前に與らうか。エヽ辱ない、とお禮に繪絹少々差進げ、宅を差しての歸途、日も呉竹の根岸の里は去る財産家が隱宅に立寄り、御隱居様貴方はお目利、この畫は如何でございましやうと、自慢の鼻を動かしつゝ例の畫取出し御目にかくれば、一見わりて眼鏡をはづされ、イヤこれは近頃稀有なる神畫、畫工は誰れぞ、代價は幾何、お前は何うして手には入れたぞ、所望〱是は愚老に讓つて下され代價は言ふほど遣から宜いわ。イエ〱是は賣物ではござりませぬ、何か此方へお返し下されれ。マア〱左様言ずとも宜がな、と隱居は切りに手を振つて、その畫を持て立つかと見れば、コリや好いものが手に

入つた、とのこ〳〵向ふへ歩き出し、早速表具師の手にかけて、末長く樂みましやう。愚老は中年猿の畫が好き、祖仙も四五幅こゝにあるが、これ程出來の好いの持たぬ。ア、有がたい、と簞笥の抽斗、ズッと引出し中に入れ、これが愚老の道樂さ、と金貳拾圓取出して、兎にも角にも今日はこれ丈進げておく、不足は次回にして下され。それとも急ぐやうならば、今夜こかれら歸途、枠の店に寄つて下され。眞個に彼の畫は出來じやのうと、後は澁茶に茶々無茶苦、到頭取られて了ひましたが、その後程なく病氣に罹り、霞村樣へも御不沙汰つゞき、今日やつとお宅へ參り、この譯精しくお話し申し、お金を進呈致しゝところ、何處〳〵までも御承知なく、そりやその隱居の鑑定違ひ、翌日視られて嘸や後悔爲られしならん、お前が取るのがいやならば、この金隱居に戻して下され。と斯う仰しやれど、その隱居の方からは、彼の畫なか〳〵氣に入りたり、殘金は、何程進ければ可いぞ。はや表裝も出來ました。二ツを揃て是非とも一度、お出で下され、待つて居るとの手紙まで〳〵。先生この儀は何うしたものでござりましやうかと謂へど、成程〳〵、彼れが氣象ではそれは受けまい。それでは私が中間で迷惑致しまするがと淸川は禿頭を撫でる。宜いわ、儲けて置きなされ。イエそれでは何うも私が。ナアニそれ程案ずるには當らぬ話じや。結局はお前と霞村が正直からの衝突でその爭ひや君子たりじや。ハヽハヽヽヽ。併し今の世には有がたい話じや。人は相互に皆爾こそありたいものじや。時に話頭本文に戻つて、又嫁の事じやがのう何處ぞへ一人あるまいかのう、實はその、先刻から嫁〳〵と云ふて居るのは、實はその、彼の霞村に一人嫁を娶うてやりたいので、實はその、お前さんにも先刻から屢々お賴みを仕た譯なんじや。へーエと淸川は今更おどろき、それじや何んでございまするか、嫁々と先刻からのお話は、彼の霞村先生の、へエーそれは、彼の霞村先生に、霞村さん、霞村先生、霞村さんのお嫁

さんイヤ、霞村先生の奥さま、と段々露穎頭の頂上を先生のれん目にかけつゝ、果はがつくり首を折つて、こゝ暫くは沈吟斷腸。先生これに退屈あそばし、よき程に發言あり、何うじやの、太う考へ込まれたやうじやが、心あたりがあつたかの。イヤ未だ一向心あたりはござりませぬが、霞村さまと承はつては、草を分けても是れは一番探して見ましやう。時に何時ぞや小石川よりお迎へなされし奥さまは。ムヽ彼れか。彼の方は御容色もお氣前も、至極およろしさうにお見受け申して居りましたが。ムヽ彼れはの離縁した、といふ譯でも無く、正直な所をいへば、見ゆる通りの貧乏な所に、姑の口が喧しいので、到頭辛抱したゝまらず、向ふから逃げて歸つたやうな次第じや。オヤ〳〵それはお氣の毒さま。寔に不憫で成らぬてのう。御道理〳〵。何處ぞに一人あるまいかのう。左樣でございますな、今も話したやうな次第で、何んにしろ、彼の通り貧乏なところに、彼のやうな邪慳な姑は附いて居るし、尋常一樣な女では、到底も辛抱は出來ぬに依つて、容姿、教育、それもあればあるに如くことは無はが、それは何うでも關はぬのじや。此方で望むところは唯、心の優しいのが欲しいじや。清川深く嘆息して世の事は心に任せぬものでござる、とおもはず口を辷べらすれば、それは何ういふものじやの、と先生お顔を上げられる。段々と御事情を承はつて見ますれば、丁度好いのがござりますれば、何うも灯燈に釣鐘で、根つからお話しに成りませぬ。それじや何處ぞへ心當が。はい、あるには一人ありまするが、疵物と云ひ且は又、身分が釣合ひませぬので。お話し申すまでもござりませぬ。ムヽそれは何處に、何處にそれが。外でもござりませぬ、私どもの宅に。ムヽそれは何ういふ代物かの、これまで娘御のあるといふ樣な話も聞かぬやうに思ふが。實は手前の姪でござる。姪、ムヽ、それは。で、近頃國元から便つて來られたとでもいふのかの。イヱ最う子供の時から此地へ。はてな、一度も

見かけた事が無いやうじやが。或ひは左様かも存じませぬ。で、その疵物といふ譯は。外でもござりませぬが、既に二度ばかり嫁に遣はしましたといふ丈のことで。唯それ丈のことで、他に仔細さへ無くば、此方も今度が初婚では無し、それを何うか霞村の嫁には貰はれまいかのう。イヤそれは到底もでござりまするが、姪の身の上を一通れ話を致しますれば、これは全體私の弟の一人娘でござります。ム、〳〵〳〵。弟は誠に不仕合にて、世の事萬事おもはく通りに行かす、その上壽命も中年にて没し、跡には若寡婦兎も角もして、娘を育て丶行く中に是れも亦、夫の跡を追ひましたに因つて、その時やつと六歳の娘を私手許に引取り、先の家内と夫婦して、わが生の子も同様に丹精し、島田に結ふまで育てしところ、早速良緣ありしに依つて、それ幸ひに嫁入させ、先づは安心、これで亡弟夫婦のものにも兄として顔が立つを悦んで居る間も無く、夫早世せし爲に二十歳で宅へ戻つて參り、二月三月家事の手助して居る中、又他所からの所望に依り、何うせ嫁る可べきものなれば、これ復早速嫁入爲せしところ、夫頗る放蕩者にて、親譲の身代時の間に浪費果し、その上無理な借金に借金を重ねては首の廻らぬやうに成り、自然土地にも居辛く成つて、女房を振棄て高飛の不始末。姪は再び泣いて戻り、わたくしのやうな不幸なものは、幾度嫁入しましたところで何時も〳〵この通りの次第、叔父様叔母さんわたしは最う〳〵嫁に行くのはいやでござんす懲りました。この上は何うか一生この家において下女同様に遣うて下されと我身を歎く不愍さに、その後屢々良緣ありしも皆體善く斷つて本人の望みに任せ、今日未だ猶宅に置いてはござりますれば、彼の儘一生おくらせるのも不憫な者、何したならば好からうかと、心を痛めて居りますると言ば、それは寔に氣の毒千萬、その娘を何うか霞村の嫁に貰はれまいか、わしは無類の良緣と思ふがのう。此緣談調ひますれば、至極結搆でござりますれば、

何を申しても相方の身分の程が匹敵ませねば、是ぞ謂ゆる灯燈に釣鐘で釣合はぬが不緣の本。何んの〳〵と先生は、枯木のやうな膝頭を火鉢にコツ〳〵突着け〳〵、お前樣とて今こそ紙屋を仕てござれ、徃時は我々同樣に腰に兩刀の重さを知つて居られるお仁、夫は先づそれとして、肝腎な姪御のとこじやが、年は幾歳で容色は何うか、氣風もざつと聞いて置きたし。わが身方の事なれば、其邊精しくは申し難し。それ程おぼしめしあらば、おそれながら私どもまで一度御入り下さるべし。併しながら今こゝで大略申も差支はござりませぬ。何うか聞せて貰ひたい。然らば聊か前口上に及まするが。容色は先づ〳〵下女の顔、よく〳〵視れば鼻もありの方角なりと思し召さば蓋し大差は無かるべし。イヤ容色は最うよく〳〵視ればの方でも可いが、それなら年齡と第一心は。年齡は今年二十三。ム、〳〵それは誂へ通り。それから心は、是れが何より肝要じやがのう。それに保險が附けられますればこそ爰まで申し上げましたれ。そも〳〵私今度の後妻は實に邪慳の一天張、現在連れ添ふこの露雞頭でさへ、日に少くとも三遍は屹度愛想が盡きまするに、叔母樣叔母さんと我身を捨てゝ機嫌を取り、いと言はるればろといふ事まで仕て了ひ、つひ一度の世話も燒かせず、おのが赤心を投り出して、寢ても叔母樣起きても叔母樣、御飯も一緒にお湯にもお供を、流して上げましよ、拭いて進げましよ、お髮を一寸搔附けましやう、お帶これへお足袋はそれへ、濡れた手拭わたしが持ちます、お履物はこれ此處へ置きまする、お手を引きましよ、お轉びなすつては又お寸白が起りまする、と玻璃の球ほど大事にして、此處から其處の湯に一度連れて行くにも姪が手加減先づ斯の如し。ム、〳〵〳〵と先生は浮世を忘れて聽き給ふ。前述の次第に因つて、觸らばちつくり刺してくれやうの了簡、胸一杯に充ち滿てるお針といふ叔母即ち拙者の嚊アめも、これには殆ど邪慳の針をぱツさと折つて梅干額にベツたり張つて眼尻を釣揚げ、オ

ン〱呻吟いて居る時でも、姪の姿をチラリと瞥れど、忽地頭痛の治るといふ始末、これ決して虚言僞にあらず、尚精しきは近傍の人よりお聞き下さる可しと言へど、御意に適つてか先生は、見物の看板に置かれたる活人形の首のやうに、がツくり〱と點頭かれつゝ、いとしやお齢が斯うして了ふた皺手をポン〱鳴させ給へど、襖靜に引開けて、また奧さまの現れ給ふ。

（後篇未完）

梅の下風（十六）

白魚女史

曾參人を殺ろす、三人之を報ずれど、流石曾子の母も疑ひて機を下る。まして愚昧愚陋の野人、傳吉みづから白狀せりと聞きては、誰も誰もおどろき、驚きて信せぬはなし、馮司は此の時ぞと、なき金さんだんして、上にはさん〲諂らひ、知れる村人には酒を振舞ひ、肴とらせなどして傳吉がなき事をさん〲に僞り謗れど、お早も、傍らに、こぼれぬ涙つゝみぬぐふさまするに、一人之をなき傳ふれど、はては萬人實を傳へ、村中かまびすし。されどなほ傳吉をにくむ者少なく、あれほど堪忍つよき傳吉どんが、人を殺ろすはよく〱、あのいぢわろき昌次郎、如何なることをせしにや、おかみさんも、傳吉どんが人を殺ろせしを知らぬはなれど、傳吉どんが、前々より意恨をふくみてせしにはなく、おの折り昌次郎こそ、傳吉を殺ろさんとして、反つて殺ろされしならめ。うん、おらも左樣思ふ。おらも左樣に思ふ。どちらにせよ、身から出た銹、昌次郎が殺ろされしは是非もなきこと、氣の毒なは傳吉どん、最早人を殺ろせしと分つては、いづれ斬罪のがれまじ、さりては氣の毒な、いとをしと、村人よりての談合、どうしても彼の人は殺ろされぬ。救はにやならぬ。おらには恩もあり、あの不孝息子、はやくごねてしまへと云へがしにした息子を、あのやうに孝行者にして呉れ



た庄屋どん、殺ろしては〳〵、おれがすまぬ。おりや――、どうかして、彼の人を助けたい、太平どん、おまへ腕を振つて庄屋どんを助けさつしやれ、おら孝行息子を儲けたるかはりにや――、一年や二年の命はさし出してもよいと、泣く〳〵云へど、田舍ものゝ中にも村頭少しく男氣もある太平、叶はぬまでも皆々して、上に歎願して見んと、一同之に同じて、やがて人々連判して、傳吉が謝免を乞ひたりしかど、小判、大判ならばよろこびてうけもせん、人が謝罪狀など如何で受くべき。金佛樣ほどの音も答へもなく、はては遂に斬罪の處刑に定まり、お專も所をはらはれて、是非なく里方へと戻りぬ。

與惣次この頃はいたく老い、病ひがちなり、お專は恩ある人、かゝる時にこそ介抱もすべく、せまほしき折なら、夫がぬれぎぬ聞かせて、老人に苦勞さするも悲しと思ひ、日來はすぐしたれど、夫が生死、殊に門前拂ひ、たよるべき方も、語るべき方もなく、是非なく、里方へ歸り、はじめて事のよしを語れど與惣次もおどろくばかり又せんすべもなし。

とやせましとやせましと、お專は我身もわが身ならず晝夜思ひ煩らひ、もとより咽に通らぬ食事そのまゝ斷ちて、神に祈り、佛を念じ、糸の身になほ幾里を冒し、水さへあびて、一身不亂、千はやふる神を祈れど、靈驗更に見えず、傳吉、はや斬らるべき日さへ定まりたり。あはれ如何にもして濡れ衣のかはくよしもと唯願ひたる一すぢの賴みも絶えて、お專が玉の緒も空しくならんとす、與惣次も心くるしく、額の浪によりてあはれなり。當座こそ再三歎願したれど聞えぬ馬の耳に、人々も泣きね入り、そのまゝ春秋のいとなみ繁く、人のため身をつくさんず村人も絶えて無く、この傳吉、罪ならぬ罪に處せらるゝも天命、何事も遺恨をうくる未熟の身、親にうけたる髮膚五刑に處せらるゝも、因果因緣、到底云ひしとて聞きしとて、もはや立つべき身ならねばと、水責め、火責めの拷問に罪ならぬ罪を被

ぶりつながる丶牢屋、こ丶ら風も邪見に傳吉が破れし肉をうちていとあらし。

お事、夫よりは先きに玉の緒絶えんとせしが、元來勝氣のお事、自ら又心をはげまし、一心に岩はをも貫くと聞く、桑の弓、如何にかつがへて、我も夫を救ひ出さまし、一府領主へ直訴せんかなどおもひを凝らす一間に與惣次入り來り。明日酒井雅樂頭樣此の地に御成り、郡役共がよこしまを糺さんため、諸人の願ひを御受けあるとの御ことと、半ばを聞きてお事はうちよろこび、與惣次が心遣のほどを謝し、之と云ふも日來念ずる神樣、佛さまのおんしるし、何卒この上、夫が命救はせ給へと俄かに身を清め、なほ念んじつ丶、夫より自ら願書を認めつ丶夜の明くるをまつほどなく、あけ鳥の聲うれしく又や身を清め、こりをとり、一心に神佛を祈り、やがて與惣次として、御路筋に立ち出づる糸の身のよわりもまさりてあはれにも心細し。

文林

溪梅　東久世通禧

うぐひすも古巣はなれぬ聲すなり
谷ふところのうめのさかりは

道臣命　久我建通

うはら生る道のみならてあつさ弓
倭のくにもひらきそめけり

酒　前田利嗣

月花のそのをり〳〵のたのしさを
さらにそふるは酒にぞありける

朝　松浦詮

寢みだれの髮かきわけて朝日かげ
くもらぬそらを仰ぐうれしさ

大原女　宮地嚴夫

いたゞきし妻木はうりて歸るさの
　足もとかろくみゆる大はら女

餘寒風　阪正臣

たこあげて遊ぶ子等もみえぬまで
　さえかへりたるはるの風かな

新年待鶯　荻原嚴雄

年たてば待ものの多きなかにしも
　まづうぐひすをかぞへつる哉

元始祭　石丸忠胤

天つちの神をまつりのまつりごと
　けふぞことしの始めなりける

窓前梅　千葉胤明

朝かせの寒さもしらずがらすまど
　さしたるまゝに梅をみるかな

新年雪　遠山英一

門松のふりれしもろくゆきつみて
　たてしものとも見えぬけさ哉

竹間鶯　内藤存守

鶯のねぐらはなるゝこゑすなり
　またほのぐらき竹のはやしに

元旦　藤井行麿

けふといへば宮も藁屋もほぎかはし
　朝いはひせぬくにひとはなし

坂田常右衛門の妻　佐々醒水

天の下まれなるまつのみさをこそ
　坂田のいへにあらはれにけれ

寄河祝　足立正枝

五十鈴川きよきながれの水にこそ
　君がちとせのかげはみえけれ

引田部赤猪子　蜂須賀随子

年なみはたち隔つともみわかはの
　むかしの影のとまらましかは

夜話　前田朗子

しめやかにかたるとすれど聲高く

聞ゆるまでに夜はふにけにけり

和布刈神事　柳原愛子

宮人かわかめかりにと入るみれは
ちひろの海もそこはありけり

國旗　西四辻茂子

君か世は野山の末も日のかけの
みはたなひかぬ家なりけり

德川光圀卿　南郷柳子

君か名のひかりは國にのこりけり
あらはしましゝふみの上にも

烟草　佐藤艶子

玉はこのみちゆくほどもとり出て
すはまほしきはたばこなり鳬

張良　小池道子

ぬかづきて捧げしくつやれは君の
道しるべするはしめなりけり

藤原百川公　北島以登子

大庭に日かすかさねてたちさらぬ
こゝろのまことあはれに鳬

和氣清麿公　常磐井文子

天津日嗣かはらぬ國をとつくにに
ほこるも君がいさをなりけり

鶴　河村重子

朝日かげたゞさす空にうちむれて
ともよふたつの聲そのどけき



雜報

●年の始のほぎこと　あら玉の年たちかへれど、千早振神代より、かげかはらぬ高ひかる天つ日すら、初日かげと仰ぐからに、光、新たしく、とことはに、かはらぬこの國土さへ、見るものとして、新しからぬぞなき。貴きも、ひきゝも、おしなべて、門毎に旭の御

旗うちなびかし、門松たてわたし、しめひきはへて、おまさかる鄙は更なり。玉しきの都大路も、さながら松の林なりけり。天つみ空も、昨日にことにして、いとのどかなるは、人の心も、かよふにやあるらん。さても、この高くかゝげたる日の御旗にことよせては、かけまくは畏こけれど、日の御子、わが　皇孫命は、天つ日かげのくもりなきがごと、とこしへに、天つ日嗣の高御位にまして、天の下しろしめしませといはひ奉り、又、千歳の松をたてゝは、わが身の歳ふるまで、松のみどりのかはることなく、ながらへて、大御惠の露にうるほはんことを願ひ、千世をこめたる呉竹をとりそへては、わがうみの子の彌つぎ〱、家門、たかく廣く、たちさかへて、大君の八千代にあひ奉らんことを祈る。何れ、皆、大御代の御榮をいのり奉るにあらざるはなし。あはれ、天つ神も、見はるかしませ、國つ神も、見そなはしませ。あはれ。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いははとなりてこけのむすまで

さて、なほ思へど、大君の御代ふるさじと、新しき年は、立ちかへるにこそあれ。かくて、年の毎に、御代の榮ゆくもいとうれし。ことに今年は、外國人も、玉がきの内つ國に、參りてひとしく、大御惠のかげに立ちかくれぬべし。實にかぎりなく、榮ゆく御代こそたふとけれ。

●新年式　大宮内にては、左の御定にて、新年御式を行はせ給へり。そも〱、皇祖天神この國土をはじめさせ給ひて、皇孫に授け給ひしより皇統一系連綿として、かはらせ給はず、御代〱の皇上、皇祖の御遺訓に則らせ給ひて、天下に君臨まし〱、報本反始の大道を、むねとせさせ給へり。されど、今も、年の始に、親、皇祖皇宗を祭らせ給ひ、政の御始にも、先、神宮の御事を奏せしめ給ふ。これ、まことに神國の神國たる所以にこそ。かくて、大君は、仁慈をもて萬民にのぞませ給ひ、臣民は、忠孝をむねとして、一

へに事へ奉る。かゝるよき國は、世界何れの地にかまたとあらん。實にありがたき國體にこそ。

一日　四方拜。晴御膳。各親王、王、同妃殿下を始め奉り、各親任官、勅任官、奏任官

一等官以下五等官以上、四位以上、

有爵者、同夫人、等の拜賀。

二日　晴御膳。六等官以下九等官以上等の拜賀。

三日　晴御膳。元始祭、賢所、皇靈、神殿の御親祭。

四日　政始。先奏　神宮の事、

五日　新年宴會。

●御歌會御題　やまと歌も、もと神の御代よりはじまりて、上は、やむことなきわたりにても、せさせ給ひ、下はたきゞこる山賤しはやく翁までも、よみ出でしなり。さて、新年詠進御題をぞ「田家烟」と定めさせ給へることは、さきに記しつ。こたび、又年中月なみの御題を左の如く、定め給へりとぞ。

一月　雪中鳥　二月　借忍向

紀元節　氷消田地　三月　隣家柳

四月　觀櫻會　五月　新竹滿軒

六月　雨後野水　七月　森日局

八月　初秋夜　九月　つくよに琴をきく

十月　旅擣衣　天長節　泉石有佳趣

十一月　幻燈　十二月　海路迭年

●造花献上　兒玉臺灣總督は、そこの土人が作れる造花を、皇后宮陛下に献らむとて、彼の土よりたくりこせ、香川皇后宮太夫によりて、大御もとに献れりといふ。

●華頂宮妃殿下御意匠の指輪　こは、さいつころ、殿下御誕辰御祝の紀念にとて、みづから意匠をたて給ひ、玉寶堂にはせて、つくらしめ、博恭王殿下に献られたるなり。こは金銀をもて、つくり、双龍玉を爭ふかたにて、玉と、龍の眼、爪などは、種々の寶石もて、ちりばめ、其のさま、いと高尚にして、優美なりといふ。

●神武天皇御降誕大祭會　といふを、こたび發起して、公爵二條基弘氏は、總理となり、伯爵島津忠亮氏は會長たりといふ。さて、この豫算は、四十七萬五千圓にして、一人一錢以上の寄附金をもて、之に充つべしといふ、實によき企なり。記者、夙に、深く、闡明し奉らんと思ふ志あり。神武天皇のみにかぎらず天孫瓊々杵尊よりこなた、即、この天皇に至るまでの靈蹟、は更なり、御陵等をも、必、世に、あらはし奉らむやと思ふこと、こゝに年あり。されども、未、志をとげず、今このことを聞きて、やがて、事の成りなんがうれしくて、喜限なし。

神武天皇御降誕大祭會趣旨

日向國は我　皇祖の始めて起り玉ひし地なることは世人皆之を知るされど宮崎郡大宮村大字下北方に鎮りませる官幣大社宮崎宮は御東征以前の皇居の遺跡にして西諸縣郡高原村に祝ひまつれる縣社狹野御社は

皇祖御降誕の靈境なるに遺は古事記にこそ考證は歷然たれ明治の今日にも猶未洽く同胞に知れ渡らざるは遺憾の極にあらずや大和畝傍の山陵は之を修め以て永く

皇祖の御靈を祀らせ玉ふの所と定めたれば四方の臣民此處に參拜して報本反始の義を盡し併せて鴻基創業の跡をも窺ひ得るに至りぬ亦昭代の盛事といひつべし然るに御東征以前の皇跡は西南の僻地に在るが故に從つて世人の記臆遠ざかり

皇祖御降誕の靈境とへ世に知られざるは臣民たるもの闡幽顯微の計を怠るの責なきにあらずや尋常の名所の舊跡すら世人之が保存を圖らぬなし事唯臣下に係はるも偉功大勳ありし人の爲には其舊墳を修め其潰蹤を旌し或は盛に紀念の典祭を擧ぐ况んや大八洲一統の鴻業を肇めさせ萬世一系の

皇基を開かせ玉ひし靈跡をや單に古跡保存の事とするも現狀のまゝに委すべきにあらず報本反始の義を以て云へば廣く同胞一般の協力に俟つは當然の道にあらずや今に於て

皇祖御東征以前の潰蹤を修理し併せて史料を蒐め考古に資するは又國光を保つの一助たらんか明治三十二年は

皇祖御降誕二千六百二十年に當るを以て之が紀念大祭を執行せんが爲め爰に大祭會を起し之を機として狹野神社を改造し及宮崎宮の神苑を恢弘し又徵古館を新設せんと欲す其設計豫算等は別冊に在りあはれ四方の同胞諸君本會の目的を贊し此微衷の貫徹を助けんことを望む

●共立女子職業學校（在東京神田一ツ橋）へは、年毎に、天皇陛下より、侍從を遣はさせ給ひて、其のありさまを見しめ給ひ、且、生徒の手になれる製品を奉らしめ給ふなるが、去歲も、又、十二月のころ、例の北條侍從を遣はし給ひきとぞ。

●恪勤　岐阜縣の人、河合ちよといへど、明治の二

年のころ、小澤某が許に、乳母にやとはれしが、後、いくばくもなくて、其が女兒の父母は、病みて、みうせにけれど、ちよ女、親にかはりて、其の兒をはぐゝみ、いたはしたてき。さて、後よきほどに人となりしかば、夫を迎へとりてあはせつるに、子一人をうみて、あへなくなりにけり。ちよ女、又、慈母に代りて、幼兒を撫育することおろそかならず、忠直恪勤、三十年一日の如くなりければ、事、知事に聞えて、さいつころ、褒賞を賜りき。あはれ、世には肉親のものすら、捨てゝかへり見ぬものもあるが中に、かく、乳母ながら親子二人までを、身にひきうけて、おふし立てしはいとも〳〵感ずべきことなりかし。

●奇特　東京、麻布區、我善坊町五十番地に住める細井とらといへるは、そこの古賀牛乳搾取所の管理人なるが、廣く世の貧しくてよるべなき、人を救はんとて、病みて、貧に乏しきもの、又は、産みて乳に乏しきものなどには、牛乳煉乳ともに、半價にて、うり與ふべしとぞ、感ずべきわざなり。

●不撓の志ほむるに堪へたり、靜岡縣、師範學校附屬小學校一年生に某といへるあり。さいつころ學業の試驗ありしをり、いたく蟲齒をわずらひしが、父母みかねて止むれども、しひて出席せり、さるを教師、また、あはれみて、休業せよとすゝめしに、なほきかで、兩眼に涙をたゞへながら「是非、試驗をうけて、かへります」とて、遂に、事を終へて歸りきとぞいはけなき小兒にして、不撓不屈の精神たしかなること、實に感ずべく、末たのもしき生徒なり。

●附錄　本誌本號、卷首には、權掌侍從五位稅所敦子刀自が殊に、ものせられたる新年松の和歌色紙摺をさしはさみ卷尾には、夜の鶴一卷を添へたり。この首にはさめるは、作者阿佛尼が肖像なり。こは、故栗原信充が知人をはじめて、常に、欽慕しける古き人々のかたを、自うつしおきて、其の功績をしのばれし肖像集といへるもの十卷ありしが中よりとれるなり。



教の庭

一月五日兼題　新年の松

天

ねたきまでとしの始ののどけさを
ひとりしめたるまつのいろ哉　東京京橋區山下町一番地　新井登代子

地

君と親の千とせをこめてあらたまの
としをぞいはふ庭の小まつに　横濱日出町太田二千二百三番地　笹子茂子

人

見馴れたる老木の松もあらたまの
とし立つ今朝はめづらしき哉　尾張國丹羽郡古知野町　横山ちよ子

秀逸（二十五首）

あらたまのとしたつけさは山松の
みどりも更にあらたまりみゆ　丹波　羽室象子

あらたまる年のはしめは常磐なる
まつも色そふこゝちこそすれ　東京　羽田三緒子

あら玉のとしのはしめはにはは松の
いろさへきよき心地こそすれ　東京　住山幾子

としたては見なれしにはの老松も
わかかへりたる心地こそすれ　下総　足立ます子

ことさらに新たまりてもみゆる哉
はつひさしそふ門のわかまつ　東京　中桐杏子

若みとりことしの色のそひぬれは
なれつる松もめつらしきなか　東京　諸井久良子

天の戸をいづる初日のかげさして
千代の色そふかどのたかまつ　肥後　徳永萬壽子

花やかにはふ初日のかけにこそ
松のみどりもいろまさりけれ　岡山　降田槙子

とことはにかはらぬ色の松か枝も
としたつ今朝はめつらしき哉　甲府　名取正代子

とこしへに目なれし松の色なから
年のはしめに見るそゆたけき　横濱　綿野りき子

初日かけのとかに匂ふかどまつに
さかゆくみよの色もみえけり　富山　鶴見擧子

年たてはれもひなしにや松の葉の
色あたらしくけさはみゆらん　近江　榊原八千代子

目なれつるそのふの松も年立ちて
いろ新しく見ゆるけさかな　東京　飯塚みづほ子

新らしき年をむかへしうれしさに　肥後　田代綾子

まつも千歳のいろをましけり

あらたまのとしの光やそひぬらむ　京都 川部孝子
松のみどりもいろまさりけり

あら玉の年たつ今朝はときはなる　肥後 仁保しま子
松もいろますこゝちこそすれ

千代經ともかはらぬ松の色なから　伊豫 西 淺子
としたつけさのめつらしき哉

長閑にも年あらたまる御代なれは　東京 塙いさむ子
松もうれしきいろの見ゆらむ

あらたまの年のはしめは常磐なる　出雲 山根久子
松のみどりもいろまさりけり

吹くかせに千代の調をつたふなり　廣島 香川ちゑ子
はつひのどけき庭のたいまつ

はつ日影さすがにけさはれい松の　三河 永井さい子
色もわかやくこゝちこそすれ

新らしき年のはしめはときはなる　大坂 山崎つき子
松もいろそふこゝちこそすれ

門松のゆきをはらひてまつや見む　三河 村田たつ子
年たつけふの千世のみどりを

ふり積るこそのみ雪もきえはてゝ　上總 高石登代子
はつ日にゝほふまつのいろ哉

大君にさゝくるちよのいろならし　東京 横山柳子
としたちかへるけさのかど松

（以下原稿到着順）

立かへるとしのはつそらのどかなる　いろをあらそふかどのまつがえ　佐々小琴子

山さともみやこにおなじとしなみの　たちかへるそらのまつの木たかさ　佐々有郁子

大御代のとしのはじめはおしなべて　まつのときはにいろぞみえける　坂本瀨多歌子

見なれこしときはの松もおもしろし　としとともにやあらたまるらん　森やす子

あまの戸のあけわたりたる大空に　みどりをきそふにはのおい松　岸なみ子

しづかにも千代をしらべて初日子を　たかねにむかふまつの氣だかさ　根岸豊子

たちかへるとしのはじめの姫小まつ　いく千代はろにさかえあふらむ　久米貞子

あら玉のとしたちかへるあしたより　ます〳〵しけれにはのまつがえ　安田たづ子

かど松のみどりをふかみ今日よりは　わがひのもとはいやさかえてむ　山本淳子

新らしきとしのはじめのまつかざり　ちとせをしめぬかどなかりけり　玉井隆子

さくら田のみほりのきしのおい松は　としたつごとにいろまさりゆく　本庄志雅子

あさひ影千代田のまつにかゞやきて　きみがちとせをいはふけふかな　山田ふみ子

けさよりは松のあらしもおのつから　ふきあらたまるこゝちこそすれ　渡邊しけ子

新らしきとしのはじめのしるしにや　まつも千とせのいろに見えけり　中村彌枝子

けふははや松もひさしきいろはえて　四條約子

かすみたなびくはるはきにけり

いろかへぬ松の木のはもいさゝしく
みどりましけりさしのはじめは
高橋信子

わがにはのまつは去年にも變られど
さしたつ今朝はにぎはひて見ゆ
近藤はろ子

くりかへし年こさなるかさまつの
いかに見ればかめでたかるらん
四點子

あらたまの年立ちぬればさきはなる
まつも千とせのいろまさりけり
栗生喜久子

あらたまるとしのいはひに軒のまつ
いよゝたかく見ゆる今日かな
坂井つるき子

天の月にいつる初日のかけなうけて
まつのみさりもいろまさりけり
橋本さよ子

はつひかげこずゑにさめて庭のまつの
いろあたらしく見ゆる今朝かな
目黒咲子

はつひかけ匂ふかどへのまつか枝に
まつあらばはる千代のいろかな
足立宗子

年くにたてあらたむるかさまつの
かはらぬいろのめづらしきかな
足立松子

なにさなくあらたまりてそ開ゆなる
さしたつかさのまつかせのこゑ
足立富子

あさ日かけにほひいてたる川のはの
まつのひまよりさしはたつらん
足立國子

あらたまのさしなむかへて松にさへ
こゝろうれしきいろは見えけり
新野さよ子

千歳へむまつのみさをのいろふかく
またあらたまのさしそたちぬる
小曾根しう子

あらたまのさしのはじめのかさ松を
たてゝそきみが御代いはふかな
新海彦子

あらたまのさしのわかまつ袖ふれて
ともに千とせのはるにあはばや
吾妻ちか子

朝日かけかゝやくかさのまつこさに
さしのひかりもみえそめにけり
上杉光子

さきはなる松もいろそふこゝちして
さしあらたまるけふそうれしき
田口しけ子

あらたまのさしなむかへておほ君に
いく世なちかへにはのひめまつ
白石藤子

たちかへる年のはじめになりにけり
かみよのまゝのみゆるかさまつ
白石良尾子

あら玉のさしのはじめのかごまつに
きみかちとせのいろは見えけり
宮崎せん子

あけわたる空のみさりにかゞやきて
ひさしほこくも見ゆるまつかな
清河てる子

よろつ代なうたふしらへの開ゆなり
さしたつ今朝のまつかせのこゑ
大寺源逸子

あら玉のさしのはじめのかさまつは
いく代かはらぬしるしなるらん
池澤天興子

人みなのいはひてたつるかさまつに
かはらぬ御代の色そ見えける
最上しけ子

賤か家もたまのうてなもおしなへて
今日にひさしさいはふかさまつ
乾嘉代子

あらたまのさしのしるしさ松か枝の
みさりもふかくなりにけるかな
乾美代子

あたらしき年のひかりも見ゆるかな
千代なへぬへきまつのこすゑに
宇津木鈍子

あたらしき年のはじめにあひおいの
まつも千とせの色やそふらん
淺井靜子

家ごさにいさなみたてしかさまつの
淺井九三子

いろあたらしく見ゆる今朝かな

さきはなる松のみさりもあらたまの
　さしたつけふはここにしありけり　根本らく子

さきはなる君が御代をば葉にこめて
　日かげのごけきかどのわかまつ　長尾五十子

みなれつる松のみさりもひさしほの
　いろまさりけりさしのはじめは　畠山百合子

あたらしき年のはつひのかげうけて
　まつのみごりもいやまさりけり　畠山智恵子

新たまの年のひかりもさしそひて
　いやまさりけりまつのみごりは　畠山雪子

あらたまのさしの初日を仰きつゝ
　きみが代いはふまつのけだかさ　畠山美子

あたらしき年のしろしのあらはれて
　にはのまつが枝いろまさりけり　畠山かじ子

立ちかへる年もまさはしいへ〳〵の
　かさにかざりしまつをしろへに　畠山清子

あらたまの年のはじめをことほきて
　よろづよいはふみれのまつかせ　畠山千代子

明けて今朝めにたつものはみさりなる
　千代さかはゆくにはのまつが枝　健部喜恵子

かさごさにかざり設けぬくまはなし
　今日たつはるをことほきのまつ　梅屋美子

常盤木のみさりしたゝる朔日かけ
　のさけく光るあらたまのさし　松泉かつ子

朝日かけさすやみさりのいろふかき
　まつのすかたのいさましきかな　諸井時子

あらたまのさしをむかへてうれしきは
　かさまつたてしあしたなりけり　舘脇ます子

あらたまの年をかされてかはらぬは
　千させのまつのみさりなりけり　池谷富子

立かへるさしのあしたになかむれは
　ちよいちしろきまつのいろかな　塚戸てつ子

門ここに立てし小まつもあらたまる
　さしのひかりにいろまさりけり　坂田喜美子

はつ日かけのさかにさして老松も
　わかきにかへるいろそ見ねける　名取よし子

千させへし松のみごりもあたらしき
　ひかりにあひていさゞまされり　田中ひろ子

あら玉のさしのはじめのまつかざり
　かはらぬいろをこゝろさはせん　志茂多廣子

新たまのさしたつ今朝はみやこ路も
　まつのはやしさ見ねわたるなり　笹子歌子

日のはたに松のみさりのかけさして
　いやゆたかなるさしはたちけり　数島花子

さゝやかにかされる松もにひさしを
　いはふこゝろはかはらさりけり　磯野君子

よつのさきかはらぬ松もさしたては
　いろあたらしく見ねわたるなり　新藤雪枝子

あたらしき年のはじめのかご松に
　千代よろづよのいろぞこもれる　徳永廣子

かすみ立つさしのはじめはやままつも
　みさりのいろぞふかくみねける　小森田輝子

立ちかへる年のはじめにいろぞます
　にはのひさ木の千代のわかまつ　澤田春子

はつ日さすみさりの松はわかくにの
　ひさのこゝろのいろにやあるらん　加藤英子

ゆたかなるみよのしるしか小松はら　加藤眞子

ねたをならさてはるかせのふく

あけそむるさしの朝たにながむれは
まつはこさらみさりまされり　加藤壽惠子

うら〳〵さのぼる初日のかけさして
まつのみさりはいやあらたなり　櫛田秀子

幾千代もかはらぬまつのいろなから
さしのはしめはなほまさりけり　古瀬しん子

世をてらす初日をうけてなか〳〵に
なかめかひあるにはのまつかな　曲田つれよ子

新たまのさしのはしめのわかまつは
うごかぬ御代のためしなるらん　小倉小枝子

御代てらす初日をうけてまつか枝は
千とせへぬべきいろぞ見にける　小倉うた子

千代かけてさか行くさまの見ゆる哉
さしのはしめに立てしかさまつ　江本せつ子

さきはなる松のみさりもいろまして
千代いほふらんあらたまのはる　三隅ひさ子

千代こめし松のみさりもあたらしき
さしのはじめのいろぞ見にける　百濟いさ子

さきはなる松も八千代をいほふかな
けふあたらしきさしをむかへて　江本さち子

はつはるを祝ふめでたきかさまつは
いつくのやまの生ひし木ならん　井川澄子

雪にたへあらしにたへしやままつも
さしたつけふはのさけかるらん　馬場みち子

立ちかへる年のひかりににほふなり
あふく千代田のまつのみさりは　馬場さきじ子

さらねたに松のみさりのふかゝるに
さし立つけふはいろまさりけり　千勝よし子

我かやさのおい木の松もあらたまの
さしたつけさはわかゝへりけり　喜多いま子

年立てはみさりもそひてさかゆ行く
まつやみその〻すがたなるらん　高橋ちた子

あら玉のさしをかされてひめまつの
たかきみさをゝいろそたのしき　谷口てち子

新らしきさしにあひてそひめまつは
いさゝさきはの色まさりける　谷口さた子

千年へんまつのみごりに千代かけて
いはふもうれしさしのはじめに　樹崎繼子

やさこさに祝ひたてたるかごまつを
しるべにさしはたちかへりけん　谷口婦佐子

君かよをいはふはかりはおくれしさ
しつもこまつを立てきそふらん　佐々木ひて子

あらたまの年のひかりはかごこさの
まつのうへにも見にけるかな　清水登久子

去年きてし白たへころもぬきすてゝ
ひさしほふかきまつのいろかな　羽田夏子

あらたまの年のはしめはさきはなる
まつのいろこそめでたかりけれ　穴水わか子

さし〳〵にいろそふ松のみさりこそ
さかゆく御代のすがたなりけれ　足羽よれ子

門こさに立てるさきはのまつか枝に
御代ゆたかなるいろぞ見にける　松澤しげ子

あら玉のさしさきもこもたかさごの
尾の上のまつはたちさかゆらむ　牧瀬かう子

新たまの御代のひかりにまつかねも
みさりひさしほめてたかりけり　尾島清子

新たまのさし立つけさはあたらしく　竹村竹里子

見るこゝろせりにはのおいまつ

門ことに立てならへたるまつにこそ
おいせぬ御代のいろは見えけれ
内田映子

はつ日かけ松のみとりにうつろひて
千代をしめたるいろそみえける
林二葉子

あた玉の年のはしめはちとせふる
まつのみとりもあたらしきかな
小林かつ子

あら玉のとしのはしめのめてたさを
かはらぬまつのいろにこそみれ
服部さだ子

いく千歳おのつからなる松のいろも
ひさしほまさるこゝちこそすれ
菅谷さみ子

あたらしき年のひかりにわかまつも
さらにちとせのいろやそふらん
淺谷い久子

あたらしき年のはしめの今日とてや
ときはのまつのいろもそふらん
淺谷恭子

古としにふる葉かへせぬおいまつは
かはらぬ御代のすがたなるらん
春野かすみ子

常盤なるまつのみとりもとしたては
あらだまりてもみゆる今日かな
吉岡すみ子

年たてはこゝろつからやときはなる
まつも千とせのいろをそふらん
吉岡欣子

あらたまのときはの松のみさをは
みにならひても世にはたゝまし
吉村かめ代子

かきりなきみ代のためしはかと松の
ときはのいろにあらはれにけり
中澤千野子

わかまつのみとりとゝもに老か身も
またあたらしきはるにあはなむ
安齋さく子

あらたまのとしはかはれとかと松の
みとりはとはにかはらさりけり
藪内津義子

立てきそふ千とせの松をしろへにて
きみよろつよのとしはきにけり
佐々木その子

おほきみのめしのまに〳〵くろ作の
しへろはかとの松にやあるらん
佐々木みれ子

今日ことに松にちとせをちきりつゝ
かきりなきよのはるにあはまし
佐々木りの子

昔したれ千代のためしにひきそめて
小まつをけふのものとなしけん
佐々木千代子

ことわきて年たつけさはまさりみゆ
きみかちよたのみやのまつか枝
山家靜子

あらたまのとしをむかふる樂しさに
そひてむかひしかとのまつかな
中里惠波子

としのたつあしたのとけき川のはの
まつのみとりそさやけかりける
林蝶子

ゆたかなる年のはしめのよろこひに
まつもちとせのみとりそへけり
東野さく子

あらたまの年のはしめのひめこまつ
ちとせふれとも其の根たえせし
小野久頁子

ちよやちよすかたかはらぬ老まつも
としたつけさはあたらしきかな
佐々とし子

みとりなる松にはつ日のかゝやきて
來山たきとしたかさりぬるかな
東みよし子

あらたまる年のひかりともろともに
まつのみとりもいろまさりけり
長坂たまの子

うら〳〵と初日のかけのかゝやきて
まつのみとりもまはゆかりけり
花村なを子

あらたまのとしたちかへるあさ風に
千代をことほくみれのまつか枝
鈴木金子

立ちかへる年のよことやよはふらん
鈴木蝶子

しらへのさけきまつかせのこゑ

動きなききみかみいつともろともに
かはらぬいろのたかさこのまつ　山木かれ子

めなれたるときはの松もとしたちて
さらに千とせのいろそはる見ゆ　高島蒔子

はつ日影さすやかとへのまつか枝に
千代をことほくいろは見えけり　金原吉子

立つ年のはつひをうけてほの〴〵と
かすむのきはのまつのいろかな　中島まつ子

立つ年をたのしふけさのゝとけきに
ふるきのまつもみとりそへけり　森山惠以子

のほる日のひかりあまねきにひ年に
そのふのまつもいろまさりけり　森山悦子

ときはなる松もはつ日をあふきつつ
みとりいろますこゝちこそすれ　李家貞實子

新たまのとしたつけさはこゝの重の
ときはのまつのみとりふかしも　吹田たけ子

かと松をたてならへたるやちまたに
としのはつ日をあふぐ今朝かな　西村章子

あたらしき年のはつ日のかけたかき
千代まつが枝にかゝるのどけさ　眞島千鶴子

あたらしき年のはつ日にかとまつの
みとりのいろのうるはしきかな　眞島照子

ときはなる松にも千代のいろみえて
としたちかへるけさぞたのしき　河田いし子

松か枝もゆきのしらかをいたゝきて
けさあらたまのとしかさぬらん　渡邊豐子

年立ちて千代よふやとはあらしふく
まつのしらへもたゝならぬかな　渡邊茂登子

としことにさかゆく門のまつかえも
たふときみのめぐみなるらん　平野晴江子

あらたまの年たつけふは千代のはる
まつのみとりもいろやそふらん　日吉あさ子

あら玉のとしたつけさのまつかさり
ちとせをかけていはふもろひと　熊田豔子

たちかへるとしのひかりにかと松の
かはらぬいろもめつらしきかな　林文子

あらたまのとし立つ空のあさかぜに
まづ千代よはふかとのまつかな　東園櫻子

たづならぬ音も舞ふなりうたふなり
としたつそらのかどまつのもと　室町早苗子

立ちかへる年のはしめののどけさに
みなれしまつもいろまさりけり　米津たい子

めなれたる松のすがたもとしたては
けさあたらしくなりにけるかな　吉江いく子

あふきみる高ねのまつの木のまより
ゆたかにのほるはつ日の出かな　御味元以子

初日かげてりそふにはのひめ小まつ
ときはかきはにさかえゆくらん　濱野時子

あたらしき年をむかへてわかにはの
まつもひときはみとりそひけり　大竹治子

たちかへるとしのひかりにには松の
みとりもけさはわかゝへるらん　福本なほ子

はつひさすをかへの松のちよかけて
みとり色そふよにこそありけれ　長塚かし子

ときはなる松のみどりもことさらに
とし立つけさはあらたまりみゆ　碓井信子

あらたまの年のはしめのわかまつは　豐田たま子

いくちよふともみどりのみにて

としたてはおもひなしにやかど松の
けさひとしほのいろをそへたる
田尻保代子

春立ては千代をしらぶるおいまつも
いまひとしほのみさをそへけり
江島美津子

いつ見ても松のみどりはかはらねど
はるたつけふのいろそまされる
西村旗子

家ことにたてならへたるかどまつに
ちとせのいろもいとゝしく見ゆ
海島伊登子

千代の色も葉毎にみねてあたらしき
としたつけさのまつそめてたき
田代艶子

はつひかけ護させそらにあふくらん
千代もかはらぬいせのおいまつ
鵜濃喜代子

むつきたつ年のはしめのかどまつに
千代よばふかぜのこゑぞきこゆ
吉富彦子

門まつのふかきみどりやおほ御代の
ゆたけきとしのしるしなるらん
村上昌子

立かへるとしのみゆれはかどまつに
にほひかはしてあさ日さすなり
井口素子

新たまのとしたつ今　のかどのまつ
千代よろつ代のいろそみねける
平山政子

鳳のおともけさはかはりてやまとつの
こすゑににほふはつ日かけかな
日高やす子

くれ竹のひとよにたてるかどまつの
千代のみどりにさすはつ日かな
日高かず子

はつ日かげかゝやきわたるかど松に
千代のひかりのみゆるとしかな
野口三子

千代よばふ田鶴のすくひし松か枝に
はつ日のどかにかゝるめでたさ
橋本辰世子

かどごとにたてたる松のいろはねて
としのはしめのいちしるきかな
尾立富子

あら玉のとしのはしめのかどまつに
かはらぬみよのためしをそみる
西内爲子

ときはなる松のみどりもあらたまの
としのけさよりかげふかむらん
尾立英子

松のいろをとしのはつひに見れはまつ
千代とこゝろにうかふなりけり
漆原岸子

としいつるはつひのかげに松のいろも
あらたまりぬるこゝちこそすれ
漆原きしゑ子

あらたまの年のはしめのうれしさに
にはの小まつもいろまさりけり
伊藤うめ子

あら玉の年をかさねておいまつの
いとゝさかゆるいろそましける
山中すけ子

のどかなる今朝の初日にかどまつの
千代のいろこそまつまさりけれ
伊勢うた子

あらたまの年たつけふののどけさに
まつもちとせのいろまさりけり
寺館よし子

雪をれのたけにいささくなかむれは
かたへのまつにはるはきにけり
忠見けい子

おほにはの松にはつ日のたちのほり
ひかりまはゆくあふくけさかな
辻本ひさ子

うら〳〵と初日かゝやくおほそらに
みどりをきそふにはのおいまつ
岸なみ子

あたらしきとしをむかふる門まつに
はつ日かゝやくけふそたのしき
高橋照子

あらたまの年のはしめにきみかよを
ちよにやちよといはふかどまつ
中村唱子

あら玉のとしをむかふるいはひして
中村謹子

かどにときはのまつをこそさせ　廣野いはほ子

姫まつのとしのみさをのいちしるく
はえこそまれけさのはつ日に　新桑まゆ子

限もなきけさのはつひにわかまつの
としのみさをはあらはれにけり　千石葉子

かどごとの常盤のまつもあたらしき
としのはしめをいはひかほなる　高砂きよ子

八千代ほぐたつが音そへてあら玉の
としのどかなるまつかせのおと　高砂菊代子

あたらしき年のひかりに葉かへせぬ
まつもひとしほいろまさり見ゆ　磯野こと子

千歳ふるときはのまつもあらたまの
としをことほくいろそみえける　品川英子

深みどりいろそふまつのこずゑより
にほひそめたるはつひかけかな　三幣みさを子

ときはなる松のみどりもいろそひぬ
としたちかへる御代のひかりに　福原董子

あたらしきとしのはしめは門まつの
いろにそ千代のはるはしらるゝ　林久子

新しきとしのはしめはかどごとに
ちよをしらふるまつかせのこゑ　西川順子

新しきとしのはつ日ににほふなり
千代のいろあるにはのわかまつ　白石梅子

新たまのとしたつけさはかどごとに
ちよをあつむるまつかけのやど　曾根ゆう子

新たまのとしたつけさはのどかにも
千代をしらふるそのゝまつかせ　賀屋壽子

としごとの春のはしめにいろまして
いく千代かけてしけるまつか枝

君が代をちとせせとたつるかどまつに
さすやあさひのかけののどけさ　森こと子

としごとにたつるかどまつ年ごとに
いろあたらしく見ゆるけさかな　森ゆき子

としたちて祝ふふたはのひめこまつ
みどりさしそふけさののどけさ　中山富子

あらたまるはつひのかけに松かねの
ちよもかはらぬいろ見えにけり　宇多田楊子

ときわかずかはらぬいろの松か枝も
またあたらしくおもふ今日かな　河村君子

いろかへぬまつのみどりにあら玉の
としのひかりはあらはれにけり　山田瑋子

軒ごとにまつのみどりのいろはえて
あらたまりぬるけさのゆたけさ　泉さい子

長閑なるとしをむかへてまつか枝も
いまひとしほのみどりそひけり　泉なつ子

あらたまの年たつそのにときはなる
まつのみどりぞいやまさりける　青山末子

千代田なる御庭の松のそよぎより
とし立つ風は吹きそめぬらん　持地桃枝子

あまつかぜのものどかにさし立ては
たつかれそへて千代よはふなり　高砂鳳子

幾千代もかはらぬ御代のすがたかな
としたつけさのかどまつのいろ　河原芳子

年もみなあたらしきをばめづるよに
ふりせぬものはまつにさりける　須藤そわ子

鶴のすむまつのみさをもけふばかり
ものあたらしくおもひぬるかな　高山信子

あら玉のとしをむかへてひめこまつ　青木たま子

ひとしほいろのまさりかほなる

あらたまるとしのはじめは御園生の
まつにちとせのいろぞこもれる　六郷薫子

あら玉のとしをむかへていやまさる
みどりいろそふにはのまつが枝　寺尾まさ子

うら〱と初日のかげのさしそへて
みとりいろます千代のまつが枝　寺尾さかゑ子

さかゆく治まる御代のはつ日かげ
八千代をいはふかどのわかまつ　丸木靜江子

立ちかへる年のはじめをことほぎて
しづがふせやもたつるかとまつ　清水幸子

あらたまのとしのはじめのはつ風に
みどりいろそふにはのひめまつ　清水延子

あらたまのとしのひかりは言の葉も
つきせぬまつのいろに見えけり　西茂子

ことの葉にそへてもめてんあら玉の
としのはじめのまつのみとりを　德永八重子

千代を經し松のみとりもあらたまの
としたつけふはいろまさる見ゆ　近藤常子

はつ日影そふそのとけききみか代を
いはひのしまのまつの木すゑに　德永光子

まつかせもけふはきのふにひきかへて
のとけきはるのこゝちなりけり　椎野ぬき子

年ここにたてならへたるかとのまつ
かはらぬ御代のいろそ見えける　田代治子

あつさゆみはるきにけりなひめ小松
みとりのいろもいやまさりつゝ　井上まさ子

としの端にみとりいろそふ松か枝や
きみかちとせのさかゑなるらむ　堀なを子

新たまのとしのはじめにみつ〱と
千代をこめたるまつのいろかな　淡原そめ子

かど每のあさひのみはたもろともに
よろづようたふあらたまのまつ　橋本やす子

年ここにしけるみとりにたくひつゝ
きみか代いはふあらたまのまつ　錦織幸子

初日かけまつの立ち枝にさしそめて
みとりににほふ今朝ののとけさ　小松靜子

うら〱といづるはつひにさす影の
みどりそふかきにはのまつか枝　靜川ちとせ子

あらたまの年のはじめにさすまつは
ちよとかはらぬしるしなるらん　小野まさ子

かとことに松かねさしてあらたまの
としのはじめをいはふもろびと　小野けさし子

立ちかへるとしの初日ののとけきに
ちとせをつくるにはのまつかせ　青木春子

あらたまの年たちかへるあしたより
なほいろまさるまつのひささも　齋藤俊子

さし昇るはつひのかげのめでたさは
のきはの千代のまつは見えけり　菊池一子

としたつといふはかりにや松のいろ
あらたまりてもみゆるけさかな　庄司のぶ子

君か代のかはらぬいろのみゆるかな
としたつけさのかとのまつはに　庄司はぎ子

いつみてもかはることなき松のいろの
としたつけさはめつらしきかな　花本かほる子

君か代をいはふ千代田のまつかねも
ゆたかにみゆるはつ日かげかな　中島さく子

家ここにかざりたてたるかとまつに　山崎しつ子

みよのさかゑのかけはみゑつゝ

さしの　る初日のひかりのさかにて
千代をしらふるみねのまつかぜ
鈴木せゑ子

あたらしく年たつけふはさきはなる
まつのみさりもあらたまりみゆ
鈴木やい子

吾がかさにふだもさたてる姫こまつ
きみさおやさをまついはゝまし
竹腰隆子

初日かけのきはのまつにさすさきは
みさりもふかく見ゑにけるかな
高橋吟子

はゑたては老木のまつもわかゞへり
さきはながらにいろまさりけり
彦坂尊子

軒こさにあさ日の御はたかゞやきて
千代のかげみゆかさのわかまつ
安村歌子

さしこさにみさり色ますかさまつは
さかゆく御代のためしなりけり
服部かつみ子

花さりはまたしきやさもかさまつの
たてるを見れはさしやきぬらむ
賀茂笹子

あら玉のさしたつけふのかさまつは
かはらぬいろもこさにみゑけり
山口千枝子

琴の音にかよふのきはのまつかぜは
さしたつけさそしらへそめたる
服部まむ子

貴ひさのかさにさゝれてやままつも
かひあるさしのはしめなるらむ
加藤加壽子

我か植ゑし松もみさりを添へにけり
さし立ちかへる今朝のいはひに
岡田春子

したゝらんはかりそ松のわかみさり
はつひのかげをゑたにうけつゝ
島田悦子

あしひきの山まつかせもさしたては
のさけきふしに御代いはふなり
小村信子

さし出つる初日のかけにたかさごの
をのへのまつはいろまさるらむ
遠藤眞久子

さこさはにかはらぬ松のみさりさへ
さしたつけさはさきめきにけり
宮本ゆきの子

あら玉のさしのはしめのかさまつに
千代のよはひそ立ちならひける
廣田さめ子

春こさにみさりを添へてきみかよさ
さもにさしへんみそのふのまつ
春永己巳子

いつみてもちよをおほゆる松なれさ
さしたつけさはわきてうれしき
關口光子

君か代をちよさいはひてあらたまの
さしのはしめに小まつをそひく
川田寧子

あら玉のさしのはしめはにはまつも
千させへぬへきいろそみゑける
中島道子

年なみのたちかへるたひいそのまつ
みさりのいろそいやましにける
中島つれ子

けさみれはまつのみさりも色まして
あらたなるよのさしたちにけり
齋藤千子

何さなく人のこゝろのゆたけさも
かさまつか枝に見ゆるころかな
大河内長月子

あらたまの年たちかへるけさみれは
ちさせのまつもいろまさりけり
園部ます子

ほの〳〵さあけゆく空のはつひかけ
みそのゝまつにかゝるゆたけさ
島田らく子

たつさしをいはひて植しわかまつに
はやくも田鶴のまひあそふかな
齋藤よし子

かさ毎の植ゑたるまつのしけけれは
みさりにさしはあけわたりけり
齊藤かつ子

千代へてもかはらぬ松のこすゑさへ
宇田川きく子

としたつけふはあたらしくみゆ

いとゞしくしけりもゆくか姫こまつ
またあらたまのとしをむかへて　岩瀬八重子

はつひかけのほる朝はときはなる
まつのみとりもいろまさり見ゆ　隈本ちゑ子

かと毎にたつるまつか枝いろはえて
としのはしめをいはふけふかな　古関こと子

あたらしきとしをむかへて門ことに
たてしこまつのいろのよきかな　勝野としえ子

はつひかけにほへる山のひめこまつ
ときはかきはのいろそゆかしき　國友武子

あら玉のとしたちかへる今日といへは
まつのいろさへあらたまりみゆ　川村すゑ子

ふるとしの雪をそのまゝあらたまの
としたちかへるにはのまつか枝　大藤銀子

あら玉のとしたつけさはかとまつの
かはらぬいろもめつらしきかな　坂口ふく子

はつひかけまづ松かえにさしそめて
うらうら千代のいろそ見えける　宮　はく子

いく千代もかはらぬ松のみとりさへ
としたつけさはあたらしきかな　林　環子

としごとに加はるまつのいろなれど
なほあたらしやとしのはじめは　星野榮香子

あら玉のとしたつけさにきて見れは
尾の上のまつもいろあらたなり　星野千春子

とし立ては空のけしきものとかにて
まつも千とせのいろもそへけり　萩原草子

みめくみのつゆにうるほふひめ小松
いく千代かけてかはらさらまし　久松はるの子

をさまれるみよのさかゆを新たまの
としのはしめのまつにみるかな　長松かれ子

たちかへる年のあしたのかとまつや
ゆたけきみよのすかたなるらん　金森俊子

あら玉のとしのはしめはめつらしと
おもはぬまつもをかしかりけり　杉山綠子

いろかへずきみかにひさしふる松の
みさををおのかこゝろともかな　池江榮子

ゆたかなるとしをむかへてこの朝け
みとりいやますにはのおいまつ　池江もと子

あら玉のとしのひかりにさそはれて
みとりいやますかとのおいまつ　神宮司森子

かと毎にたつるときはのまつにたに
かはらぬ千代のいろは見えけり　大熊つれ子

汲みあけてけさたてまつる若水に
うつるは松の千代の影かな　大熊よう子

あら玉のとしふるまつのさえたにも
このよなからのいろそみえぬる　高橋ふぢ子

幾千年さだかならさ松か枝は
立つ年ことに色やますらん　渡邊てい子

としことにいとなみたつるかと松も
あらたまるけさはめづらしき哉　道廣八重子

さむかりし庭のこまつもあたらしき
としをむかへてうれしけに見ゆ　北村靜子

ゑみ榮えのほるはつひのかけをうけて
ひときはまさるかとのまつかえ　金谷仁惠子

あら玉のとしたちしよりちとせふる
まつもあらたのいろにみえけり　竹内ひさ子

一月五日兼題　梅をめづる詞

天　京都古川町三條南　川部孝子

まつ人の香にと、むかしの人のめでけむ梅の花むかり、ゆかしきものはまたあらざりけり、清きかをり、氣高きすがたは、更にもいはず、ふりつもれるみ雪の中より、操たかく匂ひ出でぬる、何にかはたくへむ。したはしの花の心やと、打ちむかひつゝ見れど、いとゞあくよなくてなん、さるにても、今の世は、あだなる色にのみ、心を染めて、この花の操を、たゝふるものゝ少きこそ、あやしき事の限りなれ。

撰者曰・詞簡にして意いたれりこの文もまた梅のこさしさいひてん

地　伊勢度會郡宇治中之切　河村君子

梅むかりめづらしきものはあらじ、ゆかしきその花のさきては、みやびを知らざる身にも、歌の心を思はせ、ねならぬその香をつたへては、谷かげに冬ごもる鶯をさそふ、あやの袖にかをりて一しほけだかく、あさの袂にうつりてその人の品をかくすめり、あはれ、此の花よ、霜の夕、雪のあしたをしのぎて、咲きいづるは、益良雄の操の如く、たをやかにゑめるは、少女子の姿に似たりや、されど、いにしへ武士の箙にいさましき例をのこし、みやび男の心に、「月やあらぬ」となげかしめぬ、櫻にいとふ雨は、かへりいろをそへ、紅葉にかこつれど、なかなかに香を送りて匂ふ、げに梅むかりめづらしきものはあらじかし。

人　千葉縣安房郡豐田村沓見　三幣みさを子

世にめでたき草木いとおほかれど、花の勝れてうるはしきは、その香おくれ、にほひめでたきものは、その色おとり、色をも香をもかね備へたらむは、いと少し。さるを、この梅よ、北風さゆる冬の最中より、咲きにほひて、其の花のいと清らに白きは、鶯の縫ふてふ花笠にやなりぬらむ。そのねならぬ香は、物しめやかなる春の夜毎に、手枕近く通ひきて、立かへり昔の事も、戀しくおもひいでらるゝなど、花さへ香さへ異木にすぐれて、いとめでたき上に、そのおひたてる木立のさままで、げに似るものなしや。されど、昔より、その操を君子にたぐひて、あまたのみやびをのめづるも、うべなりけり。さるを、今の世の人、まめなる心うすれゆきて、花やかにのみなりゆくまゝに、かの春の日かげに咲きそめて、艶になまめかしき櫻をのみめでゝ、けふは上野、あすは隅田と、あくがれありくめるは、いかにぞや。その麗しさは、げにこの花にしくものなからむ。されど、その香のおくれたるさまは、心ねおけたるかたち人の、心殊によそほひて、立てらむが如し。梅の雪間よりにほひいでゝ、春の光の立ちそふまで、色香あせで、いはゞ、いと貴やかなる人の、心をゝしく、いかなる苦をも忍び、いかなるわびしさにも、耐ふるさましたると、そのけぢめいかにぞや。おのれ、世の

人の、その心はへをそとはで、容貌、さてはその粧の美なるをもて、紳士淑女と思ひあやまり、金銀財寶に心暗みて、おのが操を破りあるは、ひさゝかの難事にあひて、忽ち心くづをれて、かの櫻の、三日見ぬ間に、散りゆきたらむが如く、九仞の功を一簣にかく、ねせもの〳〵おはかるを、なげかはしく思ふまゝに、この梅を、朝な夕な、心の友とめづるも、其の操にならはまほしき、おのが心のすさびになむ。

人

備前國和氣郡閑谷　西　艶子

櫻は美しけれど、風にちり易く、海棠は艶なれど、雨になやみ易し、花よけれど香なく、實愛でたけれど、花惡しきが如く、凡て何にまれ、勝る所あれど、必ず劣る所あり。さるにても、梅ぞかり、劣るかた無く、愛でたきはあらじ。色も香も、共に美しく、香ぐはしく、其の實、將た愛でたく、木ぶりさへいと、をかしきぞかし。況て霜を凌ぎ、雪ををかして、咲き匂ひたる、なかなかに、常磐木にも劣らぬ操にそある。實に人ならば、潔士とやいはん、節婦とやいはん。されど、梅は、花中の君子とこそ、稱へらるゝなれ、いたづらに、文好むのみの、花ならんや。さる故を以てか、心有る人は、彼の華やかなる、櫻よりも、甚くこを愛づとぞ。實に理なりや。

秀逸（五篇）

甲府　名取正代子

梅こそめでたきものなれ、まだふりつもる雪の中より、それかあらぬかとむかりにはゝゑみそめて、白たへの色のうるはしきに、月のてり渡る夜頃は更なり、やみにもそれとしるきまで、ねならぬ匂ひ、そこはかとなくかをりみちて、よそながらもいとゞゆかしきに、まして其實さへ、食料として世にひろくもてはやさるゝをや、さては、萬の花の魁をして、よく霜雪に堪へつゝ、春もまだきに匂ひいでたる、其の雄々しさ、松の操にもをさ〳〵劣るべしやは。されど、古より君子とめでたゝへられ、將某の君の、東風ふかむ匂ひおこせよとて、いみじうあはれがられしも、げにこの花のほまれぞかし、又むかし。人の色よりゝ香こそとうたひけんもさるものから、色香はともあれ、實さへめでたきは、いかで似るものならんや。そも〳〵、花にして實なきは、今の世の大方のならひなめり、さるを、人の身の上におけるも、いたづらに姿かたちをよそほひつゝ、みるめをのみめでたからしめて、其の心の實なききは、此の梅にもはづべかりけりと、思ふまゝをかくなん。

富山縣　春野かすみ子

四時折り〳〵にさきにほふ花のかず〳〵、何れか床し

からざらん。何れかめでたからざらん、さはあれど、一きはすぐれてめでたきは、菅原の大臣のめでたまへりし梅の花にてぞありけれ。そも、此花よ、俗にうつらず、塵にそまず、氣高きけはひ、すが〳〵しきにほひ、これや此花の精神とやいはん。雪に親しみ霜に睦み、百千の木草にさきがけて、年のうちよりまづ春めきたつは、其の操とやいはん。風にたわまず、雨にあせず、やさしき其つや凛たるすがた、これぞ此の花の威嚴ともいふべきか。或はたふとき御舘のほとり、或はいぶせき茅屋の軒端、野べ山あひもいとはず、さきにほふは、其の仁惠ともいふべきか。あなめでたしともたふとき哉。されどこそ、古へより、人々の花の兄なりとも、君子の風ありともいひたゝふるなれ。まことや、清らなる精神、雄々しき操、凛たる威嚴、温たる仁惠、あだし花のれよぶべうもあらずかし。思ひ見るに我らども其の高雅純潔なる心を學むでやは。

東京　目黒咲子

美はしき花はさま〲多けれど、よく堪へ難き寒さを凌ぎ、春に先だちては〻笑み初むる梅こそ、いと愛でたけれ。其姿のけ高き、はた其花の面わの清くして、仇めかぬ樣は、神女にもたとふ可し、蕾まだかたしと見るうちに、南の方にさしたる枝より、まづ二つ三つ綻びぬるが、日にそひて花になり行くを見る、いと樂し。かくて盛りともなれど、遠く香を送りて、谷の戸出でし鶯を誘ひ顔なるも憎からず、雪の朝、月の夕、いづれも眺めをかしく、や〻盛り過ぎたるが、風のまにまに散り亂る〻風情も、亦捨て難し、鉢にしたるを文机の邊りに据ゑて眺むれど、床しき薫りあたりにみちて、香灶くことも忘られてなむ。

石川縣　渡邊茂登子

四季をり〳〵の花の種々あるなかに、誰人もよしといふなる櫻は、みめかたち麗はしきをやめの、富貴の家に生れて、綾錦を粧ひたらんが如く、余りに艶にて、思ふことなけれどいはず、橘は花さへ實さへ匂ひさへといひけんも、其香は少しこちたくて、梅の淸きに似べうもあらず、

きさらぎの頃、まだ肌さむきに、やをら窓の戸たし明くれど、雪げの風にまじりて、そこはかと薫りくる梅の匂ひは、げに如何なる憂きにも操かへぬ人の如く、いか斗うれしからんよ。廣やかなる前栽のきら〻かに、置石小草なども故ある所に、あたり芳むしく咲き匂ひたるは、富みて驕らず、下さままで情ある人にかよひて、またなくめでたく、又あやしの賤が軒むに咲き出で〻、心なき童に折られなどして、なほ匂ひこぼる〻は、姿うるはしき女の、貧しくつらき夫もちて、物うき顔もせず、立はたらくが如く、いと〳〵ゆかし、さては、若

菜つむ野邊、かのこまだらに雪殘る山べ、あるは小川のほとり、主しらぬ垣ねの中までにわりても、美しうすが／＼しうけ高きは、此花にまさるものやはあると、新玉の年立かへれど、また冬のも中のけふ、むろ咲きながら匂ひこぼる丶をかめの梅の花を見つ丶、思ひやりてかくなん。

信濃　御味元以子

一とせのうち、咲く花多かるなかに、こと花の寒さにこもりゐるころ、かたき蕾を破りて、咲きいづる梅の花、げに花のさきがけとやいはまし。もろこしの人は、菊を花の隱逸なるもの、蓮を花の君子なるもの、牡丹を花の富貴なるものなりとてめでぬ。げに、菊のひとりかくれて咲きいでたるは、こよなくあはれ深く、蓮の泥にそまぬも、牡丹のはなやかなるも、みなめでたけれど、雪まじり霰みだる丶如月の空寒きころ、白玉の如き花の綻びそめて、ふる雪にかをるを丶しさは、常磐の松にたくへつべくめでたし。まして、點々咲きいでたるさまは、雲井に高き星に似て、其風趣の高くゆかしきは、なか／＼に、朝日ににほふ山櫻の艶麗なるにまされり、されど、昔よりいたくはやしつ丶、歌に文に多かる中に、かの菅公の、こちふかばにほひおこせよとのたまひしこともしのびいづれは、さらにゆかしさまさる心地ぞせらる丶。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

新葉和歌集に梅のはなよそのかきねのにほひをも木のしたかぜのたよりにぞしるといへるはうべなりけり、此ごろの山里は、朝風夕風のふきのまに／＼なにがしの讀ならねども、いとふかうかをりぬるものから、風雅人にも風やおとづれつらん、ふりはへて妾が梅薬軒をおとなふ聲しきりなり、君ならでたれにかみせん梅の花ともいふべき今日のけしきかすみかかれたる空に色をも香をもしる人のとひきましつれば、梅をめづる詞の花を人々とゝもに、疊紙のはしつかたにさかせつるになん

高橋信子

梅こそいとめでたけれ、吹きすさぶ北山おろしおどろおどろしく、白たへのみ雪もまだいとふかきころいぎたなき草木をおどろかし顏に先咲きいづるなんをゝしくめでたき。かすむにほひは風に送られて、人をも鳥をも招きよせ、さてそがおもむきは、觸ることを忘れしむ、雪の下より紅に咲きいでたるはあてにやさしくひろは、ゆきよろは月かと見まがふ、白き花はいとすが／＼し、四季をり／＼の花多かれど、いづれかこれにまさるべき、櫻ははなやかににぎはしき方こそまさらめ、たかくあてなるおもむきなければ、品劣りて下﨟めきたり、まして藤、卯花、橘、桐など古の人にとりいでられためれど色も香も、たぐふべしやは、あはれ貴き人のうゐなしたるこきうすき紅梅は、天さかるひなのくさむらにさみしげに咲きいでたるまで、をゝしくも品たかくもうるはしくもあるや、ならふべきは梅にこそ。

駒澤ます子

新玉の年たちかへる其あした、庭面の梅をながむれば、去年の風吹きすさぶ夜、又雪ふりつもるあしたのさむけきにも、おくする色なく、早々と咲きそめて豊けき　御代のさまを喜ひがほなるは、實にも目出たく皇御國の明らけく治る事などおもほひて、嬉しうなん、

治れる御代しりがほに早々と
庭面の梅は綻びにけり

新野さよ子

年月流れて改まりぬれさ、花のさかぬかぎりはなほふる年のやうにて物たらぬ心地なんする。されさ、稙根の雪も、古年のまゝにて消ねやられば、よろづの草木皆芽ざゝん樣もなし。かゝる時しも、庭面にうゑし梅の花の降りつもれる雪のあした、ふきすさぶ嵐の夕、さへ、つゆ其性をまげず春の光りにさきがけて、雪げの母の人知れずにつぼみを破りてさきそめぬ、そぼふる雨にはかに匂ひ、東風のそよふくまにくゆかしき香を惜げなく來る人毎に花の香をたもさにしめて歸らしめ、たねせず物に匂へごもつきぬは花の香にて、いさも目出たきこさになん。さればにや、古より之を詩歌などに作りて、もてはやす人多かり。かの管原のおさゞか、村雲の掩ふ身さなり給ひて、筑紫のはてに漂ひたまふ時さへかくまで梅に別れをつげ給ひしこさ、いさもたふさきためしならん、げに櫻は花の王さはいへご、操のけ高く姿のたゞしき梅の色香には及ぶべくもあらじ、あはれ〳〵、學びの道にたづさはる人もかく其まごゝろを一すぢに研しなばいかでかくはしき名の世に知られでやは。

大寺涙迷子

いにしへより、都鄙貴賤の分ちなく、松の操のかたき、竹の直かろ、梅の薫れるをもて、ほぎごさのためしにひかざるはなし、實にこの三つは、何れ劣らぬ目出たき物にしあれご、そが中にも、梅は冬こもりせず、夙くより霜雪を凌ぎ、萬木に魁して、にこやかに咲きいで、なつかしき薫りの卑しからぬは、まここに優にやさしく、しかも心高くこそあれ。さりわけこれが古木は、一入ながめも深く、花ぞ昔の香に匂ふ、いつも變らぬ目出たき物にぞあなる。されば、女子は難波津に咲くこの花の薫りこそあらまほしけれ。去るを、大方の世の人心、花さしいへば唯、色の艶なるをのみ愛づるは、そも如何にぞや、

ゆかしさてあたには折らしうめの花
こゝろつくしのかをりふかさに

乾嘉代子

萬の花に先だちて笑み綻ぶ春つげ草を見る毎に、得もいはれずかなし。如何に置く霜深くさも、如何に積む雪高くさも、挑まず屈せず、かくはしき花を開く、奥床しきの、かぎりならずや、何事をなすにも苦しみかなしみをへざれば、なりがたし、如何に學才ある人にもせよ、うき苦勞をおそれ、腕を拱ぬきて考ふるのみにては、頭に雪を戴き、梓の弓を腰にはるに至るも、なごか思ひのさげらるべき、實に苦しみあればおびありさか、艱難にひるまぬ梅を鑑さし、心の駒に鞭うたばめでたきこさのきはみならん、

宇津木[illegible]子

庭もせに、散りしく落葉か上に、霜白う見ねて、朝戸出の風、いさ寒く覺ゆるものからさすかに、梅さく窓の、さしうくかめに手折りてなさ、思ひし折もありけむを、日毎に花のかずもそはりて清げなる姿にねならぬ香のいや高きのみかは、雪をも、霜をも凌きにしさて、風の花に雜らはぬみさをの程も、思へは、わか心のはしたなく、いさおもはゆくこそ、おもほねしか。

畠山千代子

文よめば文かをり、衣を動かせば衣又香り、吹き來る風もなきに、折折ねならぬ香の打しきろは、梅が枝になん。梅はこさ木にすぐれて、花さく香さへいさめでたきを、人目も草もかれぬべき冬の中に花をひらき、暗はあやなき春の夜にかをりを放ち、其の操は君子にもたくらぶべきを以て、古より聖人賢者の、こをめづるもうべなりけり、わらはさるたふさき人にたぐふべきならねご、日頃こをめでつゝ、色香は生れつきなれば、比べむやうなけれごせめてその操だにもならはまほしさ、思へるまゝを拙き筆に此くなん。

田中ひろ子

まなびやに通ひしこさもなき身なればにや、親しき友もなければは、眞に有情の友もがなさ、切に思ひなりて、去歳もさめて庭に植ゑ付けし紅梅の枝ぶり殊に宜しきをうれしみ、久しう心を込めて、土かひ水やり、雪霜にもあてじさ、いたういたばり養ひし甲斐ありて、まだしき程さ思ひの外、早う咲き出でゝ、風なきに室内くまなくねならぬ香のみちたる嬉しさよ、まして其色香のたへに清らにして、且つ其姿のをゝしきは、誠に古ひ人の書の葉の如くさながら、武士の心にもたぐひて、

朝夕我が怠りをいさめ顔なるも、殊にうれしうおもほえて、またなく目出たき友なりけり、あはれ此の花なかりせば、いかにして此うらゝかなる春の月と花とをめで樂しまむ、いかにしてか世を渡らむ、思へば、げに〳〵花中の君子なりけり。

降田楓子

松竹と共に世にめでたきものゝためしに引かれ、蘭菊とならびて君子と稱へられ、好文木などいひて文に歌に古よりあまねくもてはやさるるは、梅になんありける。そも此梅よ雪に堪へ霜をしのぎ草も木もまだ冬ごもりして、山姫も霞の衣よそほはぬ頃より、紐とき初めて、色も香も共に氣高くめでたきのみか、其の盛りいと久しく、且つ美しき實を結ぶなど異木の及ぶべきにあらず。實にや、昔菅公の深く此木を愛しさすらへの身となり給ひし時、東風吹かばと詠じ給ひけんも理にこそおのれも、いたく好みければ、いにし年、まつ人の香になど云へれど南の軒に植ゑ置きたりしに、昨日今日早くも春にさきがけて、三つ四つ綻びたればいとも嬉しうて、肌寒き風をも厭はず、朝な夕なめがれず打守れどもなほあかぬ心地すれば、終日見て文讀む友とせばやと、やがて軒近う机を移し、さて更に見出せばまた新しきが三つ四つ打ゑみて、得ならぬ香を送るに、身は仙家に在るかとうたがはるゝこそをかしけれ。

移し植ゑし軒の松が枝ほゝゑみて
學びの友となりにける哉

北原季子

松は長へに千代も八千も色かへぬものよと、やんごとなき上つ方にまてめではやされ、晉の猷玉は、竹を樂みて此君とめでうつくしみ菅、公はかぎりなう梅を樂しみきとか、此三のものは、草木の王とたへくれて、いと目出たき初春の光むこふるも、やがて此ものにこそ、わきて梅は、百花に先んじて、紙の如きうすきくちびる以て、吹きまきおろすふゞきに逢ひては心よしとほゝゑみ、皓白雪のこをうつむれば、紛々たる香を以て風に送らし、人々の心をいさぎよくし、さてははるけき谷間よりたづれきて、いと親ばしきこわ音にて、鶯のくるは轉つるもめでたさよ、實は讃させも保ちうべく、彼の軍人など、飢に苦みし時などには、梅の實をおもひ出づれば、また〳〵いきほひたつとかや、されば聖人賢者も、こをめづるもうべなりけりな、かくめでたかるゝも、これひたすらに梅の德にこそ。

谷口婦佐子

よろづ足らひぬることの有りがたきは、世のさがにしなれば、花も亦其の理にはもれずやあるらん。大かたは、色のよきは香なく、香のめでたきは色おくれ、花のをかしきは實あしく、實のすぐれたるは花のみごころなし、たゞ梅のみぞ、色も香も花も果もさりそろひて、いとめでたし。されば、己はいたくこをめでゝ、花咲きぬれば朝は鶯よりも早くとひ、夜は月の傾くまでもうかるなり、此の頃は、はや咲きぬれば、例のとく起いでゝ、庭に下りたつに、殘月影淡くして はや西嶺に枕せり、今朝は庭のも盛になりぬ、隣も垣根のも盛になりぬ、前の園も、後の林と、皆盛りにて、遠きは雲のたなびけるかとあやまたれ、近きは淡雪のふれるかと疑はる、風のまにまに香りみてるに、鶯のほゝとうち出でたるもいとをかし、香をめで、色をもてあそびつゝ、そこはかとなくうかれありく程に、朝日かげ花やかにさしいでたり、さしのぼるまゝに、やゝ〳〵にうつりあへば、雲と見ゆしは萬點の星とかゞやき、雪と見ゆしは千顆の玉とぞ光りわたる、めでたしともいはん、をかしとやいはん、たとへんことばも知らずなん。あはれ此花よ、かく人にめではやさるゝは、よく色も香もさりそろひたるが故なるへし。人も亦しかぞあるらん。才も行もよく備へたればこそ、世にもてはやさるべけれ。いかにみの形はよにすぐるとも、心の色うすく、操のにほひおくれたらんには、いかでかは人に愛せらるべき。此の花をこそ、身の鑑として、ふるまふべけれと、思ひつゝくる折しも、朝の物ものしてよと、竈のよぶに驚きて、家にいれど、綸袖は々紛たり。

坂田喜美子

一年の中、まつとまたるゝものゝ多かる中にも、花ばかりいみじきは

あらじ。ここに、冬枯の頃となりて、殘れる花もなく、さびしきながめのみ打つゞきたる折しも、まちにまちつけたる梅の初花の、南の枝よりして、やうやうふくらかにほゝゑみそめたるを見出でつるこそ、うれしさもうれしき限なれ。いざ、なりて久しうかわきはてたる花瓶にものせんとおもふにも、今となりては、さすがにあたらしき心地せらるゝもをかし。そも〳〵、此花は、萬の花の魁をなして、よく、霜に堪へ雪を凌ぎて、香さへいみじうめでたく、匂ひいでたるは、げにものゝふのかへぬ操にも似たるかな。されば、古より、松竹のかはらぬ色にたちならべて、めでたきものゝためしにひきたるも、うべなりけり。將其の花の色香のみならず、實さへ味めでたきを以て、世にひろくもてはやさるゝこそ、こよなき梅のめいもくにはありけれ。

羽田叉子

實にゆかしきは梅子の君ぞかし、年はたち返りぬれど、空ふく風は身にしみて、門邊のやなぎ糸もけふらず、垣根の若草まだもゐいでぬをまつ人の香と、昔の人のいひけむ君の、ひとりほゝゑみたまふぞうれしき。雪にうもれては、香をさめて鳴く鶯を迷はし、春たつ風にほころびては、「むらさきだちたる、雲のあけぼのゝ空」山本うすくかゝれる霞にかをりて、和人の紬の衣に匂ひ、ふりもせず盛りもはてぬ月の夜、星かさばかりおぼろに匂ひいでゝ貴人の綾の袂にかほり、あるは床の間に請せられて、あるじのたしなみの程をも示し、ともしび消ゐはてゝ後も、なか〳〵にさやけく枕にかをり來たまふなど、げにゆかしきは梅子の君ぞかし。

足羽よね子

菊は霜がれ、紅葉も散り果てゝ、秋の千草は大方に冬枯し、ふきしく風は身をさくばかりにて、みぞれや雪はたゆまなく、池の水はさながら鏡の如く凍りて、四方のながめもいと寒く、げにたへがたきそのうちに人目にとまる梅の花、色は紅白こきまぜて、ひとり操正しく咲きにほひ、年立ちかへるあしたよりは、旭の出づる其本に、鶯うつりて、さも嬉しげに、此明らけき御代の初音して木つたひつゝ、花のつゆにて羽洗へる樣は、一入面白し人々この香を得んとて、きそひ來りて、花の下にて歌よむもあり、あるはひさごの酒にゑひしれて、あちこちさまよひあるくもあり、又小女子の少女を手折るもいと惜むべく思へどいつしか春の暮風にさそはれて、花もゆくへ知らずなり、遂には枝もたわむまで實を結ぶに至る實もあからむにつれ、人々に賞味せらるかく世人の心を樂しましめ、賞せるは全く霜の中よりして、冬の寒さをいとはず、忍び〳〵て、百花に先ち、香しく咲きにし功のあらはれたるならん、かゝる梅だに春を知るものを、人にしていかでか怠るべき、心の駒にむちうちて、愈よ勉め、ます〳〵勵みて、一すぢに梅の心に勝らん事をこそ望むべけれ。

內田咲子

つもりし雪は、四方の山邊にうせもやらず、萬づの草木は時をうながしてねむり頼なる折からひとり、梅花は時をゐがほに咲きほこり、こもり勝ちなる人の心をよび起すこそ、げに愛らしけれ。世の萬木にすぐれて、古より貴きも賤きも、梅をいとふてふ者もなく、終にはうるはしき實をさへ結び、世の人にめではやさるゝぞ、最ともいとも目芽度き限りなるあゝ世の人、此の梅を見よかし、こはこれ、天地のめぐみにたもつ、香ひぐさならずや、菅公の梅を惜みて歌をよませ給ひしも、理ある事にこそ。

綿野りき子

氷鏡はりつめて、ゆるみもやらぬ寒さにもかゝはらず、咲き出でゝ春を知らする梅の花よ、其のかをり、いとたへにやさしう、枝ぶりさながらゆゝしき女房のすがたにもたとふべく花のかんばせ得も云はれぬ、愛敬あるぞかし、まいて朽つとも風にちらぬ花の樣のいとも〳〵めでたしや。

菅谷さみ子

花紅葉いづれはあれど、梅こそなか〳〵にめづらしけれ、白き濃くも、薄くも、紅梅、皆よろづの花にまさりて、疾く咲き出で、日影にかゞやきあひたる、色も香も、げにたぐひなく、木立ものさびて、こち〳〵しき枝に匂ふにも似ず、鶯の羽風に、一ひら二ひら散りかふも、又なくをかし、

されば、いにしへより、この花に匂ふ言の葉の、かず〳〵あるもうべなりや。

加藤てい子

空はいさ麗かにうちかすみ、長閑にして梅が香のにほはぬ里はなかりける明日今日、たれこめてのみ春のゆくへも知らさらんは、あいなきわざなればさて、心合へる友もあらされば、たゞひさりそゝろあるきにそこはかさたさりゆく消すがら、むら消の雪間をわけて、もえ出つる若草をめで、あるは又鶯の初音に驚かされつゝ、ひろしさにはあらされど、古くものさびたる木々の數多枝さしかへて、龍の臥したらんが如くたちならびたる一の園に至りぬ、南に向へる方は、大方花は咲きほころびて、艶を競い麗を爭ひ玉の如き朶は、目もまばゆき迄に濃なるにひきかへて、北につらなれる樹は、僅に笑を含みて、唇未だ開きやらず、其のかをり得も云はずなつかしく、おのれ世の人々をまねびて歌よむすべも知らず、徘句なんど口づさみせんの才もなく、まして人に衒り誇らんの花よりも麗しきみめかたち、鮮なる粧もなく、又花よりも神なる情を養はんの心にもあらされば、只人なき陰に、暫やすらひて、冬の日の寒き風に堪へ、寒き雪霜を凌ぎて、節を破らず、末つひに芳の花にさきたちて、咲き匂ふいさをを誠に愛づる人十中の二三も恐なり、さ聞けば梅も如何にはにはなけんさ世の移り行く末の樣なさ思ひ出て、旣に胸をいためつゝ、春の日も長しさ思はてありけるに、夕日のかげの、山の端にさしかゝり、鴉の森に急ぎ行くに驚かされて、おのれも、如何で此の花の如く、山にもあらず、川にもあらぬ世の中の、うきにつらきを忍び得て、御國のためにたかきいさをを現はして、など、やくなき事を思ひつゝ人のさがむるばかりに、袖に移れる香を家つさに歸りしも又をかし。

吉岡歌子

梅櫻李桃の春の花、露を妬み霞にきほひ、さりざりに捨て難き樣にはあれど、櫻は梅に匂を讓り李桃は共に櫻梅に及ばず、あはれこのめでたき梅の花よ雪の中より咲き出てゝはねならぬ薫りに寒さを忘れしめ、あるは鶯誘ふしるべさなり、或ば友呼ぶよすがさなる、暗香人を襲ふ月の夕べには、疎影横斜のかげを宿し、雪にあひて素彩を加へ、水に對して趣あり、笠に縫ふてふ鶯の、木づたひ交はす雨の日には、今一入の色香をそふ、ましてあだなる花に似ず、節の久しき、操のたかさ、塵のうき世になづまざる、賢人君子の樣あるをや、あはれ、彼の雪を欺く花の色は淸き心の色を示し、闇にもしるき梅が香は、隱れぬ德をあらはすめり、あなめでたの梅の花や、なつかしの梅が香や、うべなうべな、千代をことほぐ例には、松竹梅さならびさなへ、あるは文好む木さめでははやさるゝこさ、

藪内津義子

あらまれる年の始めさて、空いさうらゝかにかすみ渡りたるかさ思ふばかりなるのごけさに、まごの戸おしあくれば、いさなつかしう、風のかをれるに、ふさ心づきて見出せば、雪にたへ霜を凌ぎて、咲き出でたる梅の、南の枝に二つ三つほゝゑみたるにてこそ有りけれ。いつもかく、早く咲きし事なき梅の、思ひがけなく、年の始めに咲きそめたる、花さへ香さへ、將たその實さへ、げに花橘にもまさりてめでたきは、梅にこそさ、咲きそめたる軒端の梅をめでつゝ、かくなん。

新玉の年立つ今日を祝ひてや
　匂ひそめけり庭の梅が香

中里園子

花を見、花をめづる中に、本朝昔より花さ稱する者は、梅中古より花さ稱ふる者櫻になん。けにや世の諺に、花は櫻に人は武士さは、たがいひけむ。其時代はしられざれご。また俗にいふ、梅はをのこ、櫻はめのこなり、さいひけるこそ、ことわり誠にこそ。されば、ありさあらゆる梅、冬さり立つ春の頃に至れば雪の有るがなかにも、たゆまずて、美しき花咲き、春つぐるこそひさしほゆかしけれ。されば、昔よりつくれるにはに、櫻はいめ、梅なければ、飾れるさこに、軸ものなき如しさ、風をさそふる屏風には、四君子の一にいりて、かを空の中に放ち。妹脊をちぎる敷島の島のうてなのつるかめも、まつこさほがむ、梅ならで四方のうみしつ

かならむさうたはれ。またなには津に、咲くや此の花冬ごもりと、ものせられけるこそ、いみじくたふとけれ。ゆゑに、昔は、王仁が此の花、となづけ菅公が飛梅超居が好文木、直幹が濡宿梅、なと、めでらるゝこそいみじくめでたけれ。あはれ。おろかなるわれながら、うめをめづるあまりの筆ずさひに、かくものしつるになん。

東野さく子

花に情なしとは誰が云ひけむ。中々に人こそ心なきものにはありけれ。たへ難き霜よの風に、櫛けづり、さけそむる雪の雫にゆあみしては、年の花より〳〵におぼつかなう思はせ、木々は皆枯れはてし中に、ひとりゑみ初めては、昨日までとふ人もなきかきねを春になしがほなり。雪ふかき谷にこもれる鶯にも知らせまほし、心深き花の香に袖を、ひかるゝ夕べは、げにいそぐ道をば、よきて行くべかりける木蔭になん。

熊谷まき子

凡そ、世の中に、花といふ花多かれど梅ほどをかしきはあらざりけり、雪にもたわまず、頓て春風ふけば、朝ごちに薫り來て、文机の興をそへ、道行く人の袖をさへ引きとゞめたるは、あだし心のやうに思ひなさるれど、かばかり色香深き花の、から國にも得あらじと思ふに、いとゞ慕はれて、猶幾本も植ゑ添へまほしうなむ。

西村章子

春の花、さはにはあなれど、花としいへば、櫻に限りたらむ樣に、又なくたゝへぬるも、げに神代よりねざしけむ、色さへ香さへ我國ぶりに咲きいでゝ、霞のまよりこぼれ出でたる匂ひの、いひしらずをかしければなるべし。されど、こぞめの梅の、風猶さえさほりて、消え殘りたる雪の中より、氣色ばみたるつぼみの、はつかに綻びたるも、をさ〳〵おとりたりとは見えずかし、其の枝ざしのかど〳〵しきも、霜にたへ、吹きすさぶ木枯にたゆまぬ雄々しさもあらはれて、なか〳〵なるに、咲きいでたる花の、さるけはひはなくて、ほゝゑみたる、いとらうたげに、春風は吹けど吹かねどいひけむしろき匂にこそ。いにしへの事もたちかへり戀しう思ひいでられて、哀れさもいやまさりぬ。

眞島千鶴子

梅の花は寒さいとはで咲き初めて、うもろゝばかりふりつもる雪の中にも、ゆかしきかをりはうしなはず、枝ぶりのをゝしう、いさましきは、又たぐひなくなんおぼゆる。まづ、此の花のさき初むるや、鶯のたづれきて、こゑうるはしくなきいづるなど、もろ人の心を春ならしめ、花てふ花におくれず咲き出で、いともめでたき花にぞありける。

日吉あき子

あら玉の年たつあした、老も若きも頭みあへるに、花瓶にさしたる梅が香の、さゝかなりたる、いとすが〳〵しく、心も共にあらたまりたるやうおぼゆ、まして、菊紅葉匂ふ秋の頃より、人目には枯れたる如く見えながら、枝をも折らんばかりの嵐霜をも凌ぎて、あづさ弓春より早く、よろづの花にさき立ちて咲出で、ふりつもる雪にも、ぬば玉の暗にもまぎれず、立ちよる袖にうつり、春風にたぐへられては、鶯さそふしるべとなれる色香こそ、よろづのさはりにうち勝ちて芳ばしき名をあげたるすぐれ人にもたとふべけれ、されば、むかしより、色かへぬ常磐の松、千代のふしある竹と共に、目出たきものゝためしにも引き、歌に、詩にさま〳〵めではやされぬるもうべなりや。

室町早苗子

木の葉は散り、草は枯れて、かどの木立梢さびしく、前栽の飛石に、霜の色冷かなり、あはれ、世はかくあさましく成り果てける者かと、今は見る思ひたねて、書齋の障子かたう閉ぢ、はかなき書物新紙などかい見るに、げにあさましきは、獨り外の景色のみには、在らざりけり、世は日に開け月に進むとは、くちぐちに日ひはやすめれど、そは只うはべばかりにて、春の花秋の紅葉と何ぞ撰らむ。誠や、其の美しう見ゆる色も、其のかぐはしき匂ひも、一朝時を移りて、雨ふり風吹き、さては霜雪の至るに及びては、皆其の姿をとゞめず、今の世の人の心も、亦かくの如し、文に見傳へに聞く貞女烈婦のあとは全くたへて、口心に叶はず、心行に件はず、打見るにはいと艶に美しうやさしうはあれど、その奥處を探り見れば、今見る冬の草木の狀に變らざりけり、あはれ、かくのみな

り果てたる世に、吾は誰を師とし誰を友として、古のあとを尋ね、古りにし教を學ばむか、などと思ひ續くる折から、ねならぬかなりのつとおそひ來るに、弁しらずふりかへり見れば、こは昨日友の送りおこせし盆梅の、炭びつの暖かさにそゝのかされてか、弁が思ひをなぐさめむとにか、今しも冬枯の景色に似ず、一片二片ひもときて、ゆかしうも咲めけるなりけり、あな嬉しや、げに梅こそは數多き草木の中に、獨よく皆にたへ霜をもしのぐみさををありて、彼の古人が烈婦のかゞみともなし、貞女のみさをにもたとへ、さては君子ともたゝへける花なめれど、又なき友を得つる心地して、かたはらにひきすうれば、その姿も、その色香も、その心根さへも、あだならぬさまのねならぬに、奇々ゆかしうて、打しをれむとせし心も、にはかに時めきけるに、浮世をへだてし障子の中は、更に冬の空とも思はれずてなむ。

濵野時子

年立ちてより、見るものきくものにつけて、よろこばしき數々あるが中に、まいてうれしきは、寒さの中にさきいでたる梅なりけり。おほかる草木は、冬ごもりして、霜の花さへたわ〳〵なるに、これやこの花こそ、やさかふりつむ雪の日に、さむさたゞよそにさきいでゝ、はげむにほひぞめでたき、げにや、松竹のみさをにたぐへて、世にたゝへらるゝも、ことわりにこそ。あはれ、かたはしき梅の花よ、いまよりうるはしき實のむすびてよ。

長野孝子

小車のめぐるよりもはやく、冬はいつしか吳竹のひとよ二夜と過ぎがてぬ、いとひつる雪の空には、霞の袖に立ちかへて、鶯はかなたの梢、こなたの竹に、春を囀り、いとのどけき日に、一しほめでたきは、垣根の梅になんありける、三雪のころより咲きそめて、日數とともににほひそはり、晝は終日、霞の衣を色どりぬは玉のやみにも、ひとり夜床にさへかをりくるは、花淺をしたふ飛なば、花もしたふかとおぼねて、めづる心もいやまさりぬ、つたなき言葉の花をもさかせまほしけれど、いかにせん、みやびの道はふみもならはれび、賤妾が心のまに〳〵、梅をめづる山路の落葉かくなも。

日高かず子

古より梅をめづる人をまれふとにはあられど、つく〴〵打見るにつけても、たゞならぬ心地ぞする、冬さるやがて、枝やすからぬまで、吹く木枯、朝の霜、夕の氷を凌ぎ、やう〳〵花咲く頃、降り積む雪に、枝も折れなんばかりなるは、いかでかき拂はまほしう思へど、そをいとふとしも見ねず、花の笑眉清らかに、いよ〳〵うるはしき香を放つこそ、げに梅の操なりけれ、あはれ、世の人、この操の高きにはづべきをもしらで、いたづらに色香のみめではやしなば、梅もさこそ本意なからめ。

吉富うめ子

冬空に、寒し〳〵と室内にさら籠り、只々火桶にのみくすぶり居りし此ごろ、ふとまどのすき間より匂ひくる香り得ならず、あなゆかしやと、障子引きあけ見れば、荒れたる庭の梅花、なつかしくも一片氷雪の間より咲き初めにけり、夫れ、梅は、古より四君子の一、百花の長と稱へられ、詩歌好む人々に、殊に愛せらる、我も幼きより愛する心深く、寒さも打忘れしばし心を花にうばはれけり、げに理りや、其のよく節操の風霜氷雪のなんを忍び、百花に先んじて、香しき美花を開く、其花の姿華美ならず、氣高く淡白にして神韻なるこの、描き筆に寫されず、其の雅言に屈せざる事、萬物の長たる人も及ばず、愧づべきことにこそ。女の道も斯の如く、如何なる氷雪も撓みなく、巳れの職を守りなば、など梅花に劣るべき、聊か愛づる心をかくなん。

前橋のぶ子

風待ち雨乞ひたりし夏の暑さも、いつしか行きて、霜寒く冬となりにけり、日曜日の朝まだきに、學びの友たち二三人と、神崎文雄を訪ふ、人の少きは、まだ時間の早ければにや、されど、梅花は我を待ちて笑み顏に咲き、傍なる巖の苔、初雪に洗はれて、塵をも掃らひ、我を待つ様、いとおかし。見渡せば數多の梅花は、雪の如く、其梅の香をしたひて來る鶯の羽風に送る薫こそゆかしけれ、匂ひゆかしき此の梅園は、幾年經ぬかさ分なく、苔むす幹は、龍の臥すかと思はれて、目出度く浮世の外

なる極樂も思ひやらるゝぞかし、雄にから歌を歌ひて歩を移し來る一人の男子、梅の許に立ちて、手を延ばして手折らんとすされど、梅花は從はずしてはれ歸る、梅花飛びて雪の如し、男子天を仰ぎて嘆ずるものゝは鴨川水と雙六のさい叡山法師にあらで、此花なるべし。噫汝は此の花を愛して折らんとす、何ぞ無情なる、此の花、木草の中にて、丈夫に譬へづべし、此の花又丈夫の丈夫ならん、松の常葉に榮ゆ、竹葉變らざるものから、若し花あらば散らで常葉ならむこと難からむ、寒風肌を針して、風物蕭條、朝に霜になやまず、雪の中より咲き出で淸香を放てるなど、櫻松竹菊も遠く及ばず、さるを世に櫻をまたなきものに云ひなして梅をおとしめ來たれど、櫻はさくら、梅は梅なり、何かは較べておとりまさりのあるべき、櫻の花ののどけくて、夜目遠目の宜しきをば、梅の淸香に比すべきを嗚呼若し花情あらば、世の不公平をかなしまん、さる無情にも手折るとは、時に朝熊山の鐘鳴り渡り、鳥の塒へ行くとて三つ四つ二つ飛びたれば、時節に就きぬ。

浦井登子

あつさ弓春たちかへりてより、空もうらなつかしう霞みそめて、日頃己が好める南窓の許なる梅が之は、一日〳〵蕾のふくらかになりゆくを鶯の初音と何れが先ならんと、心たのしく待ち渡る折から、昨日今日、殊の外うらゝかなる春の光に、早や三ひら四ひらはならぬかに匂ひて、花笑み初めぬ、日頃待ち渡りし我れは飛び立つ斗り心うれしう覺えて、急ぎ父君母君などにも告げ參らせ、共々行たゞへて興ぜしが、去年は、此初花に、鶯の來鳴きて、いたく興をそへにしを、さるにても鶯の巣ごもる谷の戶は、去年の雪未だ深くふり積りて、のどけき春風のふき通はでやなど、何となう物足らぬまゝに、遠き深山の谷のさまゝで心に浮びて、里の子が戯れに吹きならす空音も、もしやと、幾度かはかられて、惶たゞしくをちこちをながめやるも、我ながら心をかしや。

廣野　いはほ子

雪のいとう深かりしあした、日かげいとうらゝかにさしいでゝ、心おのつからのどかなりければ、うづくまり勝ならんも心なきわざと思ひて、やをらすさりいでぬ。庭は、見るかぎり、白かねのいさごしきたらむやうにて、軒もまがきも、わいためたになし、折からふとかほりくるは、さてもしるき梅が香なるへしとて、そなた樣を見やる、いとわきがたけれど、能くみれば、庭のあるじは、げになかばごほりはゑみ榮ゆいでゝ、ゆかしき鶯のねをさへさそひぬべき風情、めでたしなど言はむもおろかなり、あはれ、此のあるじよ、時もあるべきに、かゝる草も木もうらがれて、人目さびしき　の最中に、雪にさへうづもれながら、いよよ、その色のきよく、いよゝ、其の香のかくはしさよ、たとへば、みさをたゆまぬたをやめの姿に似たりとやいはまし、など思へば、いふかひなき身の、かへりみられて、耻しうさへなりぬ、おしなべての世に、香のみたかき薔薇色のみ深き牡丹は、このあるじに向ひてはなしけがらぬかは、似づかはしき鶯のあひちぎりて、春を告ぐるも、世に見習へとの心なるべしなど思ふほどに、日影一層はなやかにさしかゝりて、やう〳〵ゆるみ行く雪に例の香は一しほ著くなりぬ。

新桑まゆ子

一りん二りんとのみ思ひし紅梅の、今朝の雪にて見れば、はや三分どほりはほゝゑみかけしなりけり、あなあはれの花や。其の姿のまだうら若くて、つぼみ勝なるは、十ばかりなる少女のさまにやたとへつべからむ、心許なさはざるものから、せめてなかばどほりも咲きそろひたらばふりうつむ雪も、少しはうしろ易かるべしとぞ思はるゝ。されどこの梅よ、雪はものかは、夜毎の木枯、朝ごとの迷霜、たちかはりおきかはれど、何時も美色しくて、日毎に立勝りてさへぞ見ゆる、あな、あはれの花や、斯くせずともおなじくは今少し春をまちて、咲き出でたらむにば、うらゝかなる霞のとばり、あたゝかき空のふところに、心やすき眠も催ほさるべきをと、思へど、なかなかに其によらぬこそ、汝が世にほこらふ所、人の汝を愛づる所なるべけれ。青き竹の色、みどりの松の姿、そのみさをはいづれとなけれど、紅梅の一きは色も香もなつかしきには、似もかよはぬなるべし。あはれ、今少しさきそろひたらば、吾は一枝たまはりて、千代のかざしにこそせめ。

阿野まさ子

ふりつもる雪にもおぢず、さく梅の操こそ、いとめでたけれ、かず多き四季の花のそが中にも、梅にまさるもの、をさ／＼あらずかし。皆冬來ぬれば、かれくちぬるが中に、此のうめのみは、ふきすさぶ山おろし風もいとはゞこそ。霜がれし木々をば、いましめがほににほひゆかしく咲くなんご、いかでこと花の及ぶべき、手をりて、花がめにさしつくれば、へやの中香のみちておのづから心ちよし。又盛も打すぎて、ちりかくる折など、白梅の風にひらめきて、雪かとまがふばかりなるも、いとおもしろし、すべて、いづこにも／＼點うつべきふしなく、めでたしともいとめでたしや。

高砂き代子

およそ世にこえてなきにひとりして、時に先立つは、物ぐるほしきわざなり、さるを、梅は、こと木にすぐれ、冬枯に露霜さゆるいとひなく、ものすさまじき寒を凌ぎ、木々はみな冬ごもりする雪の中より、ひとり長閑に咲き出で、えならぬ床しき香を放ちて、おふけなくも、九重の花のお瓶にさしそへられ、あるは又聖人賢者の友となり、或は少女のかざしとなり、萬の人の目を樂ましむる、其の香のたへなる目出たさよ、其の色の清らなるいみじさよ、なにもてたぐへん、又似るものなく、風の便にことよせては、まだ春しらぬ鶯さへ誘ひ出して　新玉の年たつあした、初音をそふるなど、げに梅のいさをぞや、かくてぞ、實に花中の君子とは云ふべき、操を十かへりの花咲く松の深みどり、君が園生に葉かへせぬ貞なる竹にたぐへても、いづれかれの操のおとるべき、是や三操の一樹にめでらるゝも、又目出たき梅のほまれにこそ。

稲原薫子

あなゆかしやな窓の梅、うらゝけき春の光にさそはれてにや、今朝は、三つ四つ計りほころびそめて、えもいはれぬ薫に、怠りがちなる文机の塵も、拂ひ清められぬ。花の中にも、この花ばかり、めでらるゝものはあらずかし。雪にも折れず、霜にもたゆまず、嚴冬をたへ忍び、あらぬ木の芽も見えそめぬ中により、萬の花に魁して、ゑみこぼるゝめでたさ、實に四君子の一と、むかしより、もてはやせしもうべなりや。人の此の世に處せんにも、この花の如き心なくてやは、あゝ貴きはこの花なりと、一輪とれば、花もはねある心地やしけん、風もなきに、ひら／＼と袖にかゝりくるに、一入なつかしく思はれてなん。

林久子

新しき年のはじめのうれしさにさそはれけん、昨日まで、よそに見し庭のわか木の梅もほゝゑみ、かれたりとおもひ捨てたりし老木とへけしきはみたる、いとうれし、初日の影ににほひあひたる花のか、むづかしげなる庭にあまりてなん。いろもかも知る人にと、ひとりごつ折から、ほぎこといひにとてきたりしは、我待つともなるも、にほひのそはるこゝちして、いとうれし。もろともに。うちみて、花の玉と詩人のほめたゝへたるさくらにも、いかでおとるべきなど、かたりあふも、いと／＼たのし。

西川順子

葉かへせぬ松のみどり、色かへぬ竹のみさをと、ならび稱せられて、いとめでたきは、雪の下よりほゝゑみそむる梅の初花にこそ。かくこの花のめでらるゝは、その姿のやさしきのみにはあらで、風も凍らんばかりの寒さをも凌ぎつゝ、春まだき百の花に先だちて、ゆかしき香りを世におくる操になむ。實に松竹とならび仰がるゝもうべなりや。

中山登美子

松は、野にありても山にありても或は疏籬の隅にありても、たゞに己の花の美しく、香の清きのみならず、あたりの樣をさへ床しく見せ、あるは形斗りなるに小村などの、裝はいぶせく、心に叶はぬものも、それ近くこの花の一ト本二タ本さき出つるあれば、をかしきものとぞ眺め愛でらるゝ、たとへば、德高き人の、常其居る所を俗には移さゞるが如し。又この花は、おく霜にも、はた降り積む雪にも、たへて、花珍らしき頃、こと花に先だち、床しき匂ひと共にさき出で、詩人のみやび心をあこがれしめ、やんごとなき大宮人にもかざゝれ、いやしき賤の女にも愛でられ、あるは清らなる世捨人の友ともなりて、神代より多くの年を經ぬれ

ど、この花にあきぬといふ人だになく、咲くを待ち散るを惜み、上もなくもてはやさるゝも中〳〵にことわりなり。其色其香、たぐふべきものなく、冬こもりする其ゆかしさ、世の人のをしへ草と覺ゆれば、國つ人を始め遠き外つ國の人にまで愛でらるゝは、げにさる事ぞかし。

菊池ふみ子

あはれ、梅こそ、こと木に勝れて、花さへ香さへいとめでたけれ、人目もかれはてたる冬の中よりさきそめて、雪ふかきあしたの窓に薫りそめたる何にかたとへむ、おのれこの木の霜雪にたわまぬ其操にあえまほしとて窓ちかく植ゑおきつるが、今年もをりをたがへず、つぼみをふくみけるに、此頃のけしきたちたる春の光にさきそめて、朝な夕な、得もいはぬ薫を窓の中にこもらすさへあるに風のたよりにたぐへて、鶯さへさそひ出せる、うれしともうれし實に此の花よ、心ある人の歳寒四友の一つにかぞへあるは君子とめではやすも理なり。又彼の何がしがえびらにさして戦にいで、かくはしき名をあげたるも、この花のたかきかをりにあえたるなるべし。はたかしこけれど、北野の大神の、ことに此の花をあはれとめでさせ給ひしも、霜雪をしのぎて、操をかへず、世にたぐひなき色香をもてるをいみじと、おもほしての御業なめりと思へば、なつかしとも又一しほになん。

宇多田やう子

年立かへる初そらは、またいとさむき冬ながら、なんとなう長閑なる心地も覺えぬ、書齋の下、すきまもる風のいと床しければ、やをら打出で見るに、こはいかに、園生の梅が枝、ふりかゝる雪をも厭はて、いと嬉しう年をむかへ顔にほゝ笑み初めて、その色の麗しさ、雪をもしのぐばかりに淸くて、得ならぬ香の馥郁たるえも言はれぬ心地してなん。げに、色をも香をもと歌に文に、もてはやされては、人の邪氣をはらひ、よく寒へ忍ひたるその操は、貞女烈婦にたぐひて、女子の鑑とも玉ともなりぬべしと思ひ見れは、心の底もいたく淸み渉りて、あら玉の年のはじめに目出度き花とめづるはげにこの梅にこそありけれ。

泉さい子

白梅は雪にたゆます、冬まけて咲きて紅梅は久方のかすみのたちそむるころほころひ萬の花に先かけて咲きいづる花にしあれは、そのすがたかなりともかくはしきこと、世にたとふるにものなし。されは古しへより今にいたるまで、花てふはなのひじりともたゝへ、梅を詠したる歌のたくひ、かぞふるに限りなし。あゝめでたきはこのはななるかな。ひともこの梅のことく、雪にたゆます、萬に先かけて、つとめいそしみなはさこそうるはしからめと、いよ〳〵この花のめでたさそゝろにしはたれてなん

泉なつ子

花ちふ花の中にもいと淸らに、樹ちふ樹の中にも其幹のいと妙に、近く見ても遠く見ても、或は茅屋の軒端に咲ける、谷川の斷巖によれる、竹外一枝の春をもらしたる、多き少なき、皆取り〳〵に風致のめでたく面白きは梅の花にそありける、まして霜に冒され、雪に埋れながらも、敢て其香を失はず、いと氣高に雄々しきはうべ花の兄とも、君子とも賞へらるゝ故にそある。妾のいとも愛する此花の、文題を、朝夕友とし讀なる此卷に設けられたるうれしさにいさゝか思ふよしをかくなむ。

河原芳子

古より、歌によまれ、詩にうたはれて、かくばかりほめたゝへらるゝ花はあらじ。桃、櫻、さては牡丹ふぢの花など、四季をり〳〵に、うるはしき花はあれど、世のけがれたるちりをさけて、ひとり淸らかに咲き出でたる梅の花にまさるものあらむ、あゝ、梅や、梅や、その花の白きは、いさぎよき心をあらはし、その香の高きは、りゝしき操を見せり、されば、朝日に匂ふ山櫻は、さもあれ、雪のあしたに咲きかをるゝこの花こそ、げに雄々しきやまとをのこのまごゝろにもたとへつべくなん。

六郷蕉子

まだ世の春の麗らかならねばさや、蕾める花の一枝すら見えそめぬに、立つ春の節を違へず、雪のなかより早やゑみそむる梅の姿こそ、げに雄々しけれ。さるに、覺束なき蕾の頃より匂ひすぐれて、あやなき闇の

色にもかくれぬさまなど、限りなうゆかしと思ひやらる。さてこそ、睦月の風の寒さ、身をきる計り吹く朝にも、此花のふくらかにほころびて、なつかしき影の垂氷にうつるを見ては、ひき窓の戸さへさすがに閉めがたく覺ねぬ。清少納言が、梅はこくもうすきも、とほめそやせるは、いみじう嬉し、根方に、まだ白う雪の消ねやらぬ頃は、況して、薄紅梅の花の色ひきたちて見ゆめり。今迄見あきし雪の色さへあるものを、白きは棄て難くも餘りにことことしからず、さはれ、此花の淸きは云はずもあれ、己れは唯姿心ばへのすぐれていみじう高妙なるをたゝへまし、哀れ、梅の花、よしや荒ぶる風のれだみにふれて、敢へなく花の散らさるとも、わが此袖にも袂にも充ち滿てる殘んの色香は、とこしへの思ひ出となりて、世のうさ忘るゝよすがともなりなんかし。

寺尾まさ子

古より梅は松竹とならべたゝへられて祝賀のむしろなどには、必ず此三種をかざりて祝ふ習はしは、何くの里も同じ事にて、目出たき花にぞある、けに、春は他の花よりいち早く、雪しもをしのき咲き出てしねも言はれぬ香りをはなては、文人雅客は、雪の中をものともせで、杖をひきてたづぬるは、いみじき花の德にこそ有りけれ。己は梅をめづる事の、人にもましていと深ければ學びの窓ののきばに植ゑおきつるに此頃の雪の中より一ツ二ツほゝゑみて、ねならぬ香りのもれくるに、いざをりてかめにさゝばやと思へと、かゝるかん苦をしのきて咲出てし花なれば、あたらをしき心地のせられてなん。されど、のきばにたきてふゝきにまかせはつるも、心なきわざなれは、自つからちる迄はめでゝ、ちりなん後も、久しく香りをとめんとて、一枚手をりて、とこのかざしとはなしぬ。あはれ、心なき木にして、己かつとめをまもればこそ、此くは雪にまじりてにほひそめしなれ。人も、此心かけ有りたらんには、なとか世に後るゝ事のあるべき、毎に、其花ぶりは、もゝ櫻のあた〳〵しきにはにもやらず、しとやかにて、深窓の中に人となりし淑女の、みさを正しきごとければ、なべて、女子は、此くこそ有りたけれと、なつかしさかぎりなく思ふになん。

田代治・子

世の中に咲く花の、種々ある中にも、櫻は花の王と云へど梅は其れにも劣らじとぞ思ふ、如何となれば、林も霜枯れ、水の流れも止む程の懐あはれなる極寒中に、梅はいとふ色をも見せず、枝も折れなん計りの雪の下に花は笑ひ初め、香は庭にくんじみちぬ、嗚呼勇ましの花なる哉、諺にも梅は寒苦を凌きて淸香を放つとやら、誠に然り、父昔より高名の人は、必ず艱難辛苦をたへてこそ、名をあげたれ、誠に、梅は、人のいましめともなり、實にめづべき花にこそ、

塙いさむ子

世の中に、花てふ花はいと多かめれど、梅こそたふとく愛でたけれ、あはれ、此花よ、なべての異木には似ず、冬籠る時は、すさまじき雪霜の害に遭ふも、聊も屈せず撓まず、いよゝ堅く節操を保ちつゝ、やがて光り長閑けき春立返り、霞たなびく頃を待ち得て、獨百花に魁けて、きよらにあざやかなる花を開き、ねならぬかをりを起して、其姿さへけだかくをかしきは、またくらぶべきものもあらずかし。況んや、時來れば、名殘惜しまで、風のまに〳〵いさぎよく散り落ちて、後に味よき實さへ結ぶは、げに終りまでめでたくたふとき樹ならずや。やがてこれ英雄君子にもたとへつべうなむ。むべ、古よりめでたゝへられて、九重の雲深く、高きかをりをあげゝむ、げに草木の君は梅ならむかし。

小野けさじ子

待つ人の香とむかしの人のめでてけん梅の花はかり、さがしき物はあらじ、雪にくもれる年の内よりかつさけ梅とさけはれ、ほころびぬればうへは九重の宮にましますすめらぎを始めまゐらせ、下はふせやに住ふ賤の男に至る迄、いかでかゝるいみしき花を愛せさらん、朝な夕な、見るにつけ聞くにつけ、景を述べ情をのべ、みやびに歌ひ出ては、むすほれたる人の胸をも排き、其のすくれたるは、後の世までも、多くの人にもてはやさるゝになん、實に菅公の愛し給ひしも道理にこそ。

山崎しつ子

世に花としいへは櫻にまさる花なしといひなして、梅をおとしめつれ

と、はさくらなり、梅はうめなり、何かはおとりまさりのあらざらん、さくらの花のあてやかに、遠目のよろしきをば、うめの花の近よりて見おとりすることなく、其香の氣高きにくらぶれば、さしもおとるまじくや、梅の花の露霜になやまず「雪のうちよりさきいづるこそ、すぐれてをゝしけれ。大よそ、草木の中にて、雪のうちよりかをりいづるは、うめをおきてはあらざるべきに、花さへ香さへ、にるものなきぞめでたき、まして、庭の一枝をりきて、かめにさしたるが、埋火のあたゝかなるにさそはれて、春をもまたず咲きそめてかをりける、いみじうにるものもなくこそおぼゆれ。

長谷川春子

まつ人の香と、昔の人のめでけん梅の花ばかり、世になつかしきものはあらじ雪降り積り嵐吹きしきる冬の最中になりぬれば、四こと樹々は、おのがさまゞゝなる花の色香をもいづこにかあとをかくし、折々白妙の雪にあひて、しばし其姿を裝はんも、もとよりまことの花の姿ならねば、やがては消えうせて、もとのあさましき枯木の林になんたちかへるめる、げにも世の中まことにあはれに物さびしくして、人のめを樂しましむるものとてはさらになしとるを、たゞひとり、あるは白、あるは紅、のまことの花の、雪にまじりて、いと〳〵らうたげに、其花さへ世にきよらかにして、なぐさめ顔にも笑み初めけるなむ、まことにめづらかなるや。人々の、この花をしもとりわけ賞するも、げにもことわりとやいふべし。この花のごと、よの常の人にもたちまさりて、姿やさしくさねすぐれ、よくおのが本分を守り、目ざましき勳功をもたて、かぐはしき名を世にはなちたらんには、いかにたふとくけだかかるべき。ことに、女の身は、いかなる霜雪の苦しみも、よくたへしのびて、其分に安んじ、淸くいさぎよき操を守り、よに勝れし姿よ、かしこき母よと、あふがれんこと此の梅の如くあらましやと、しづかまがきの梅を見て、いささかおもふむねを、かくはしるすになむ、

廣田さめ子

咲出る花に、いづれめでたからぬはなし、されど、たぐひなくひいでたるは、梅の花になむ。あたらしき、年初の日影をまちゐて、いひはやくもひもとき春風のふくまゝに、ねならぬ香をたゞへて、人の袖にも匂はせけり。さればあやなきやみもしろく、あるは待つ人の香などに、もあやまたれぬ、遠き山ざとの花のさかりは、消えのころ雪かとみえ、まがきのはなをおぼろ月夜の影と思ひしもをかし。されば、鳴かぬかぎりはなとよまれし鶯も、めでゝや宿とさだめけん、げに色も香も花の兄にこそ。

岩瀬八重子

谷の戸出つる鶯のこゑもいとゆかしくのどけきに、まどうちひらけば、さとふき入るゝ風にたくひて、いとなつかしき香のするは梅の花になん。げに花さへ實さへ其香さへといひけん、花橘にもまさりてめでたきはこの花にこそ。平安の昔に大伴の卿は筑紫に、おほくの梅をしきりに移し給ひしとかや、あるはこの氣高き香をめで、其の法師の古の帝たちかへり戀しと書きおかれたるも、ことわりなりかし。されば、やんごとなき國のみぎりに植ゑられて、大宮人の詩に歌にもてはやさるゝもあれば、かく人めとほきしづが垣根の片隅にゑまふもあるは、花の宿世とり〳〵にあはれなり。この花も、さる處にいたしたてゝ、明くればはぐゝまば、いかばかりかめではやさるべきをと。梅に心あらば、夕がほならねども、口をしの花のちぎりやとこそは思はめ。されど、色をも香をも知れるとにはあられど、已この花によりて、心たのしく、花また已によりてその色香むなしからず、實に幾春の心の友とこそはなりにけれ。

畑中よね子

寒さに庭の木の葉皆散り果てゝ、殘るは松のみどりのみなる此頃、ひとり春顔に香り床しく開き初めしは、梅にこそあれ。新年を待つ身には、心せわしく、花の事などは、忘れ居りしに梅が香に花を好む妾は、ひとしほうれしく、ゐあひぬる友たれかれ打つれたちて、梅園に行きて、樂しく遊びたらんには、日頃のうつを晴し、精神の愉快如何ばかりならん。

久松はるの子

閉ぢこてのみ物學びせる身には、月花のころさへ知らで過ぎつるが常なり。今日しも、未明より起きいで、物の本をとくりひろげつゝありしに、ふと窓のあたりと覺しく、ねならぬにほひのすれば顔さし出てし見まはすに、いつこよりか、人の乙女が、今をさかりの梅の枝をかつきて

ゆくなりけり。見るからに、うとうとしくてありしことのいと口惜しく我にもあらでやをら庭に出づれば、朝東風ここちよく吹きて、薄霞おぼろに立てこめたり。はるかにうち見やるに、彼方の梢には、雪のふりかかりたらんさまなり、あやしみながら近よれば、さきの日まで蕾みたりし梅の、はや咲きいでたるなりけり、得ならぬ匂の衣にしみて、いとゆかしうおぼゆるもをかしきに、ひとりにてはをしなど思ひつゝありけるに、いつれの梢なるらん、鶯の世にもやさしき發音して、徐ろに鳴き出でたる、譬へかたなき心地して、うたよみ習はば、と思ふもかひなし、さる程に、家にかへり、硯に向ふに、拙き筆にも梅のかをりはいとしるかりけり。

○兼題歌文當撰者諸嬢に告ぐ

本號の兼題歌文當撰の君たちへはそれぞれ既定の賞品を贈り參らすべし。さて、人の撰に入り給へる君は、豫定書籍の内何れか一部を參らすべければ、よしと思ひ給へるを撰びてとく申込み給へかし。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所 姓名
…………………………
…………………………
…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題
住所 姓名
……、……、……。……。
……、……、……、……、
……。……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

少年讀本

寺崎廣業畫

全部五十冊 毎月一回發行

洋裝菊判紙數百四拾自美本

正價(前金) ●一冊十三錢●六冊七十錢●十二冊一圓卅錢●廿四冊二圓五十錢●郵税一冊四錢

依田學海翁著 第四編 三條實美公

全壹冊大判洋裝 百二拾餘頁 正價金拾參錢 郵税四錢

搢紳の中に在りて、古來罕に觀る所の英豪、維新の大功臣三條實美公は、こゝに依田學海先生の史眼に依て、其眞相を發揮せられ、先生が獨特の靈腕は、這般偉大の忠臣を描き出して殆んど餘蘊なし。眞に少年諸君の好讀本。

戸川殘花君著 梶田半古畫 第參編 河井繼之助

既刊 全壹冊洋裝 正價拾三錢 郵税四錢

福地櫻癡君著 第壹編 **高嶋秋帆** (既刊) 水野年方畫

中村秋香君著 第貳編 **白河樂翁公** (既刊) 富岡永洗畫

武島羽衣君著 第五編 **新井白石** 横山大觀畫

大和田建樹君著 第六編 **藤田東湖** 中村不折畫

野口珂北君著 第七編 **水戸烈公** 近日刊行

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

三輪田眞佐子著

女子教育要言　全

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史の曩に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきもの丶標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べらる丶本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に重せらる丶かを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を如何にして其身を處するに足る技倆を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠からずと雖多く教育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に説き諭されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懐く婦人と雖針をもてる少女も苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目録

●定價金二十錢
●郵稅金四錢
●郵券代用一割增
但一錢切手に限る

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

皇后陛下御製和歌

東久世伯爵題字
磯野德文撰

皇朝婦女鑑

挿畫筆者 松本楓湖 富岡永洗 永峯秀湖 其他數氏

第一編

用紙舶來上等品
菊判美本密畫數十入
口畫松本楓湖畫彩色摺

定價一冊代金三拾錢
郵稅金四錢

本邦婦德の美其の淵源遠し之を繼承し之を發揮するは今日婦女子たる者の任務なり**本書**は**斯主旨**に依りて太古より現今に至るまで貞淑賢良の婦女數百人の傳を撰み以て**百代の明鑑**と爲さんことを期す**大日本帝國の女子**たるもの此に依りて益々其女德を養ひ以て**神州國民の慈母**たらんことを貸せよ

本書の特色とする所は**事實正確**なるに**本書の特色**とする所は**文章流麗**なるに

本書の特色とする所は**挿畫精美**なるに**本書の特色**とする所は**氣品秀麗**なるにあり

以て**婦德の經典**と爲すべく以て**文章の模範**と爲すべし

第一篇（木華開哉姫命●豐玉姫命●倭迹々姫命●狹穗姫命●倭姫命●弟媛命●神夏磯媛●速津媛●弟橘媛命●宮簀姫命●神功皇后●阿曇の總子媛●髮長媛●吉備兄媛●玖賀媛●國依姫●田道將軍の妻●忍坂大中姫命●衣通姫●少々等●草香幡梭媛●●

目次（栲幡の皇女●引田部の赤猪子●棚津媛●三重采女●置目●振姫●物部麁鹿火妻●山田皇女●松浦佐用姫●馬飼狀依の妻●大葉子●豐御食炊屋媛命●上毛野形名の妻●寶皇女●陸奥前采女●櫻兒●鬘兒●眞間手兒名●菟名日處女●鵜野讚良皇女

第二篇（奈良朝より平安朝まで）**四十餘人**の傳をおさむ**挿畫筆者松本楓湖**以下斯道名家數氏

目次

第三編以下 毎月十五日發行凡七編乃至八編にて完結の豫定

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 **靜思館**

文學雜誌之泰斗

第四年第壹卷



一月元旦發行

題目	種別	著者
三尺角	小説	泉鏡花
縺れ糸	小説	廣津柳浪
緣不緣	小説	後藤宙外
三枚襲	小説	小杉天外
夕霧	小説	川上眉山
衆生心	小説	島村抱月
桐火桶	雜錄	幸田露伴
新油柄杓	雜錄	尾崎紅葉
銀溪夜話	雜錄	長田秋濤
近世話園	雜錄	依田學海
時文評論	人文	後藤宙外
園藝談	譚叢	KH生

文苑時報投書箱
懸賞詩歌俳句披露

○別册大附錄○

蠻國大馬鹿覽會

表紙 懸賞文賣 河村清雄

口畫 回暦 武内桂舟

小説挿畫 桂舟中

元旦七景 桂舟社中

暫 市川團十郎扮装

刷新 年茲に改まると共に我新小説は從來の面目を刷新し多々益々我文壇に一異彩を放たん事を期す

歡迎 然して又文苑投書箱及新小説の批評等喜んで歡迎すへし

狂歌 今年より新たに狂歌募集の擧あり委細は本誌について見らるべし

實價

一册 金二十錢
六册 前金壹圓十錢
十二册 前金貳圓十錢
郵税一册に付二錢づゝ
郵劵代用一割増爲替は
東京本局宛

發行所 東京日本橋區通四丁目
(電話本局五十一番)
春陽堂

夜の鶴



阿佛尼の肖像

夜の鶴

開題

此の書は阿佛尼の作なり。一名を阿佛口傳とも云ふ。女子の歌よむ可き心得を書きたる物なり。同人の著書庭のをしへに女房の歌は餘りことことしく磨きくたせる方なとには候ふましく候ふ。然れはとて艶なるすかたにひきとられて魂の候はぬもわろく候ぞ。歌のすがた趣はよるの鶴にこまかに申し參らせ候ふ。御覽候へ。と、やうに記せり。一般の人の歌詠むやうを書き列ねたるやうなれと殊に女子のためにとて心したるけなるは此の言によりて察すへし。ことに此の書は本文の頭註に云へるか如く其の娘紀內侍の爲に書き與へられたるものなり。女子の歌論たること彌明なるへし。

阿佛尼は十六夜日記の著者として名高き婦人なり初の名を右衞門

の佐といひまた安嘉門院四條とも云へり。父母の姓名世に傳はらず。前但馬守平度繁に父事して人となり後順徳院の皇后安嘉門院に仕へ奉る當時才學の名漸あらはる。大納言藤原爲家の後妻となり爲相爲守等を生めり。爲家の歿後かさりおろして阿佛房といひまた北林禪尼とも云へり。播摩國細川の莊園の事によりて前妻の子爲氏と不和を生し實子爲相の爲に鎌倉の裁許を請はむとて東國にくだり弘安三四年の頃遂に鎌倉にて歿せらる。此の書は關東へ下向以前に書かれたるものゝ如し。されは北條時宗の時代に出來たるものにて今より六百二三十年以前の古書なり阿佛尼の歌學は夫爲家の傳統を受けたるものにて俊成定家兩卿の正統なり。されは其の歌論も亦冷泉家の神髓と云ひて可なり。

阿佛尼の作歌は世々の勅撰に入りたれは今の世に傳はれるものも甚多し。作者部類に其の歌數を掲けたれと殘月抄の云ふ所最精密な

れは今茲に其の調査せし所を轉載すへし。安嘉門院右衛佐とて撰集に載れるうた續古今三首四條とて載れるうた續拾遺六首新後撰一首玉葉十一首續千載一首續後拾遺一首風雅十一首新千載一首新拾遺三首新後拾遺一首新續古今五首通計四十四首あり。夫木抄のする所通計五十一首みな安嘉門院四條とて載せたり。歌枕名寄に引用るし歌七首とあり。これ等の書によりて本人の詠み口調を知るへし。
此の書は秘傳として廣く世間に傳へざりしより世に之を翫ふもの甚少し慶安三年正月京都の書肆堤六左衛門といふもの開板したることあれといくばくもなく板木失せて其の摺本も今は傳はらず。塙氏の群書類從中に修めたるものの僅に今日に傳れり。本書の稿は中院通茂卿の手書にて松井幸隆の挍合したるものなり。今慶安板の書と塙本とを挍合してかりそめに頭註を施し且傍に漢字を塡して其の意を知り易からしめたり。俄にしたる業なれは云ひ漏せることとも多

かるへし。されと本文の正穀なることは余か信して疑はさる所なり。

春園　下田義天類識るす

○よるのつる　此の書名は子を思ふ心より書き記されたるか故の名なるへし。伴蒿蹊は其の著庭訓抄に此の書のことを釋して阿佛尼の娘なる紀内侍か爲にかゝれたるなるへしといへり。たしかなる據所は未見出さゝれとも事のさまげにさもありなむとぞ推はからるゝ。

○昔より此の大和歌の道を得たる人々末の世の爲にさま〴〵書き置きたる物、とは先參議藤原の濱成か撰へる歌經標式、宇治山の僧喜撰か撰へる喜撰式、菅丞相か撰へる孫姫式、安部淸行か撰へる石見女式等歌論の鼻祖なるへし。これを世に和歌四式といふ。また公任の新撰髓腦、能因歌枕、俊頼の無名抄、仲實の綺語抄、淸輔の奥儀抄を五家髓腦といふ。これ又歌論中の名高きものなり。其の他範兼の童蒙抄、俊成の古來風體抄、定家の三部抄、順德院の八雲御抄、基俊の悅目抄、などその數あげて算へ難し。余が曩に収輯したる歌學史料中には百四十二部を

夜の鶴

阿佛尼作
下田義天類釋

さりがたき人の歌よむやうをしへよとたび〳〵れはせられ候へども我かよく知りたる事をころ人にもをしへ申すべけれ。いかでかはといなみ申さをあながちに恨れはせられ候もわりなくてすゝろなる事をかきつけ候ひぬるろ。努々人にみせられ候まじ。むかしより此のやまと歌のみちをゑたる人々末の世の人のためにさま〳〵かきれきたる物どもも家々にもてあそび人ごとにならふ事れはく候へはいまさられろか

なること(言)の葉にていつく(何所)をはしめに申すべきともれ(覺)ほゐ候はず。[脱文]いつる日を「あかねさす日」「久かたの月」「あし曳の山」「玉ほこの道」「むは玉の夢」などやうの言葉はいつれの歌枕にもれなしこと(同事)を申すべく候めり。」唯ふるき(舊)物とも(共)を能く御ら(覽)むせられ候へかし。是はたゝ(只)とし(年)比の歌よみと聞ゐし人のあたり(邊)にてわつか(僅)にみゝ(耳)にとまり(留)候ひしこと(事)のそ(惣)いはれたる心ちにいささか(聊)れもひ(思)出られ候かたはし(片端)を申し候へ共さなからひがれ(僻覺)はゐにて候ふらむ。初學抄と申てきよすけ(清輔)のあそむ(朝臣)の書きれかれて候物にも歌をよまむには題のこゝろをよくこゝろうべし。と候とれは

収めたり。其の後篇また百餘部あり。以て其の多きを知るへし。

○いつる日を云々　此の上に脱文あるへし。諸本皆此の如くなれども斯くては事のさま忽然なり。義も通じ難し。倩考ふるに「あかねさす日」「久形の月」云々などのこと葉はいづれの歌枕にも同じことを申すべく候ふめり」と有る論ひざまは定家卿の詠歌大概の說を取り出したるに似たり。詠歌大概古歌取の事を論せられたる所に

あし引の山郭公。三吉野のよしのゝ山。久かたの月の桂。時鳥なくや五月。玉鉾の道行人。如此事全雖二何度一不レ憚レ之と云へり。此の論と能く相似たり。此のことを云ひしもの誤脱となりて其の結文のみ殘りたるにや。阿佛尼は定家卿の男爲家卿の後室にて家學維持の爲に最力を盡されたる人なり。此の人にして歌のことを云はむとす。必定家卿の說を唱導すべき筋合なり。然るを文中に詠歌大躰の家說を云はざるものは甚怪しむべき所なり。と云はざりしに非らず。臂頭第一に云ひたりしを書脫したるが故にこれを見ざるのみ。思ふに詠歌の秘訣一子相傳の奧儀を記したる所なりし故にことさらに之を削りて世に示さゝりしものなるへし。今此の欽文を補はむ爲に左に詠歌大概のあらましを意譯すへし。

凡詠歌の要は情と詞と風躰との三つのものを整ふるにあり。

情は新しきを以ちて先と爲へし。人のいまだ詠ぜざる心を求めてこれ詠ずるにあり。

詞は舊きを以ちて用うへし。大かた三代集を出づべからず。先達の用うる所新古今古人の歌は同しくこれ用うるも妨なし。

風躰は堪能の先達の秀歌に倣ふべし。古今遠近を

論ぜず、宜しき歌を見て其の躰に倣ふべし。近代の人詠じ出す所の心詞は一句と雖謹みて除弃すべし。七八十年以來の人の詠じ出したる所の心詞は努々これを取り用うべからず。古歌を取りて新歌を詠する事は五句の中三句に及ばゝ頗過分にて珍氣なし。二句の上三四字はこれを免す。されど猶能くこれを案ずべし。詞事を以ちて古歌の詞を詠せむことは頗無念ならむか。花を以ちて花を詠じ月を以ちて月を詠ずるたぐひなり。四季の歌を以ちて戀雜の歌を詠じ戀雜の歌を以ちて四季の歌を詠ず。此の如き時には古歌を取るも難からむか。

あし引の山郭公。　三吉野のよしのゝ山。
久かたの月の桂。　時鳥なくや五月。
玉ぼこの道行人

此のごときの事は全何度なりと雖これを憚らず。

年の内に春は來にけり。月やあらぬ春や昔。
さくらちるこのした風。ほの〴〵とあかしの浦。

此のごとき類は二句なりと雖更に詠ずべからず。以下略すこれ詠歌大概の重なる所なり。本書の初にこの事ありしが省略せられて其の末のかたはしをのみこゝにとゞめたるが故に何のことゝも聞えぬものとなりぬるなるべし。

え候。又題のもじを上の句にみなよみはて〔皆詠果〕ゝ下の句にいひこと〔云事〕のなき〔無〕にすゝろ〔坐〕なる事どもをつゝけ〔續〕たる心いと〔甚〕見くるし〔苦〕とて候き。或人山家卯花といふ題にて山里のかきねにさける卯花はとよみ〔詠〕末はなにとよ〔何共〕むべきともおぼえ候はざりけるやらむ。わきかへぬ〔脇壁塗〕れる心ちこそすれとよみて候けるいとをかしとて候き。それもやう〔樣〕によりて〔依〕又上の句に題のもじ〔文字〕をいひ〔云〕はてゝ〔果〕もくるし〔苦〕からぬ事も候にや。ことに〔殊〕戀のむすひ〔結〕題どもは題の理をあらはさず〔顯〕おもはせ〔令思〕たる事は上手たちはよまれ候とおぼえ候。逢不逢戀といふことを京極中納言定家卿の歌とおぼえ候

色かはるみの〻中山秋こえて
　又とほさかる相坂のせき

かやう（個様）にうれほく（多）よまれ（詠）て候める。我ならは逢ひてあはさる戀うくるしきなとよましと覺え候。また皇太后宮太夫俊成卿の歌臨ミテ期ニ變シタル約チ戀と云ふことを

　思ひきやしぢ（榻）のはし（端）かきかき（書）つめて
　　百夜もねなしまろねせむとは

なと〻よまれ（被詠）て候めり。けさう（懸想）人のしぢ（榻）といふ物の上にも〻（百）夜ね（寢）たらはあはむと契りたる人九十九夜さはりなくはし（端）にて數をかきれきたる（書置）にも〻（百）夜にあた（當）

○色かはるみの〻中山　此の歌は秋越えてと云ふ所に飽をもたせ相坂の關と云ふ所に男女相逢ふことをもたせたり。いろかはるみのは容色の衰へ行く身といふ語を美濃へ云ひかけたるなり。容色次第に衰へ行く身の上に飽とへ添ひて彌逢瀨も遠ざかりゆく由なり。

○我ならばとは阿佛尼の謙遜なり。初心の人ならはと云ふべきを愛嬌に我ならばと云ひたるなり。

○思ひきやしぢのはしかきかきつめて此の歌は古今集なる曉のしぢのはしがき百夜かき君が來ぬ夜はわれぞ數かくといふ歌をかくとりなしたるものなり。古今の歌は本來鴫の羽根がきなるをよみ非めてしぢのはしかきとしたるより古來牽强附會の說をさへ取りそふるに至れり。此の俊成卿の歌も此の牽强附會の說を根據としてよめるものなり。その附會の說といふは奥儀抄に問に云はく此のしちのはしかきはいかなるものぞ。答云ふ。如二彼歌論義一はむかしあやにくなる女をよはふ男有りけり。心ざしあるよしをいひければ女心みむとて來つ〻物云ひける所に榻を立てゝこれが上にしきりて百夜ふしたらむ時言はむことは聞むと云ひければ男雨風をしのぎて暮るれは

來つゝふせりけり。しぢの端にぬる夜のかずをかきけるを見ければ九十九夜に成りにけり。明日よりは何事もいなび給はじなどいひかへりにけるに親の俄にうせにければ其の夜はいかず成にけるに女の詠みてやれりける歌なり。是は或秘藏の書にいへりとはべれとたしかに見ぬたることなしといはれたるもの即これなり。俊成卿はこの說を其の儘に根據として此の歌をよまれたるものなり。

○津の國のいくたの川に鳥も射ば此の歌は大和物語なるをとめ塚の故事をよめるものなり。をとめ塚の故事は同物語に

昔津の國に住む女ありけり。それをよばふ男二人なむありける。云々其の男ども顏かたち人の程たゞ同ばかりになむありける。心ざしのまさらむにこそ逢はめと思ふにこゝろざしの程たゞ同じやうなり。云云かゝれば其のよばひ人共を呼にやりて親のいふやう誰もみ志の同じやうなれば此の幼き者なむ思ひわづらひて侍る。今日如何にもあれ。此の事を定めてむ。あるは遠き所よりいまする人あり。あるはこゝながらそのいたづきかぎりなし。これも彼もいとほしき業なりと言ふ時にいとかしこく悦びあへり、申さむと思ひ給ふるやうは此の川に浮きて侍ふ水鳥を射たまへ。其を射あて給へらむ人に奉らむといふ時にいとよき事なりといひて射る程にひとりはかしらの方を射つ。今一人は尾の方を射つ。何といふべくもあらぬに女思ひわづらひて

住わびぬわが身なげてむ津の國のいくたの川は名のみなりけりと詠みて此のひらばりは川にのぞきてしたりけれはつぶりと落ち入りぬ。おやあわてゝ騒ぎのゝしる程に此のよばふ男二人もやがて同じ處に落ち入りぬ。云云とあるこれなり。寂蓮其

る夜さはり(障)いてき(出來)てあはぬ(不逢)ことなとはしらぬ(不知)人なきことにて候へはしるす(記)におよはす(及)。又寂蓮と申ける歌よみ兩人を思ふ戀といふ題をえて(得)

津の國のいく田の川に鳥も射は
　身をかきりとやおもひなりなむ

やまと物語むこ二人の事。おなしく(同)しるす(記)におよは(及)す。かやう(個様)に題のこゝろ(心)をふるき(故)ためし(例)におもひ(思)よそへ(準)よま(詠)れたることとももしは(藻塩)草かきつくす(書盡)べく(可)もあらず(非)。順か詩に雨のうちに月をこふといふ題にて

揚貴妃歸リテ唐帝思

なとつくり(作)たる風情も思出られてやさし(優)うおもしろ(面白)

の故事を思ひ寄せて兩人を思ふ意をよみたるものなり。

○初の五字をは後より能く思ひめくらして本末の契合するやうにすべしとの敎は家々の隨腦に云ひ傳へたる敎なり。歌こゝに然せよと云ふには非らず。初の五文字より次第に詠むべきは常の事なれども、かゝる故實もあるよしを知らしめたるものなり。此の口傳は俊成卿の說にて定家卿の口より世間へ弘まりたるものなり。

○本歌取の歌の事は頓阿の井蛙抄、一條禪閣の歌林良材、細川幽齋の詠歌大概抄等に委し。

くこそ候へ。上手ならではいかでか思ひ寄らむとう覺え候。又歌をあむするにはしめの五もしよりしたいによみくたされむ事は申すにおよはず。からかふへからず。さるは歌よむ故實とてうけたまはりしは、まつ下の七々の句をよく思ひしたためて後第二句よりあむして後にはしめの五もしをはもとすゑにかなふやうに能々思ひさたむべしとて候ひき。上の句より次第に讀むはとに末よわになる事の候へは其のようしむとれはえ候。又本歌をとるやうこう上手とへたとのけちめことに見え候。其のとりやうも定家卿かきおかれたる物にこまかに候やらむ。さなから又

○咲けはちる花の浮世按ふにこれは古歌取の作に非らず。意も詞も皆各別なり。三四の句は適遇中せるのみ。姿は似たれども古歌取の作とは云ふ可らず。

本歌の言葉句のおきところ（設處）もたかはねとあらぬ（非）事にひきなし（引成）てわさ（態）ともよく（良）聞ゆる事も候ろかし。俊成卿のむすめとて候歌よみの續後撰に入りて候やらむ。

咲けはちる花の浮世と思ふにも
猶うとまれぬ山櫻かな

源氏の歌に

袖ぬるゝ露のゆかり（縁）と思ふにも
なほうとまれね倭なてしこ（撫子）

句ことに（毎）かはり（變）めなく（目無）みえ（見）候へとも上手のしこと（仕事）とはなむなく（難無）わさ（態）ともれもしろく聞え候をまなふ（學）とても

猶およひ(及)かたく(難)こそ覺え候へ。かやうの事ともかき(書)つらね(列)候はゝはまのまさこ(濱眞砂)の數かきるべくも候はねとたつとし(貴)とれはえ候ことはかり(計)を御つかひ(使)をとゝ(留)めなから(乍)書きつけ(附)候也。万葉集三代集などにふるき(故)人々よみ(詠)たれはとてむかし(昔)のことの葉(言)とも(共)[illegible]なれ(馴)ぬ歌ともにこのみ(好)よむ(詠)事もさる(然)へからすとろうけたまはり候ひし。「おもはゆるかな」「物にさりけり」「けらしも」「むへ」といふもし(云文字)「べみ」といふ事「と思へは水の」などやうの事はむかしころかたみ(互)にいひ(言)なれ(馴)聞きなれたるやさしき言葉なりけめど時うつり世へたりぬれは人のことの葉もかはる物なれはみゝ(耳)とほ(遥)

○萬葉集三代集などに古き人々詠みたればさて云云此の論能々味ふべし。古歌の取捨は詠歌に取りて尤大切なる所なり。近世古學といふもの勃興してより古來の歌論を一切に破毀し懲して猥りに古人の難句難語を摸擬せむとする惡弊を起せり。縣居翁の教を思ひ非めたるものなり。

○時うつり世へだたりぬれば此の論萬古に渉りて動くまじき確論なり。躬恒貫之等これを實行に示し俊成始めてこれを古來風體抄に明言し爾來六百年此の說歌學社會に行れ來りしを古學の餘弊逐に此の確論を忘るゝに至れり。

○歌はたゞ心を慥に按し鎭めて云々この數語詠歌の本領なり。努々おろそかに見すごす可らず。

くなりたらむ事は人丸赤人躬恒貫之よみたれはとてこのみよむましきやうにろうけたまはり候し。又猶千載新古今の頃より近世の作者ともの歌の名句ともをさなからめをあはせてうはひとりてよむ事いとみくるし。よみ出たる人のためも高名にあらす。能く此の事をつゝしむべしとて候き。今世の女房の歌に露の玉づさとよまれて候しなり。俊成卿の初めて「いく秋かきつ露の玉づさ」とよみ出られたるをしはしさてれかはやとて候き。是は猶今はふるき歌とも申ぬべし。さしむかひたる歌ともをとらるゝころ返す返すもあさましく候へ。歌はたゞ心をたしかにあむし

○口にまかせ人真似打して云云當世の歌詠たちにも此のたぐひいさゝか多きに似たり。鎌倉時代よりの積弊にや。能々みづからの詠歌を顧て其の弊を襲はざらむことを努むべきにや。

○又古の歌のやさしきは如何なる世にも舊り難く面白し。此の論また古來風體抄以來の定說なり。秀歌は古今一轍なり。時代によりて變遷あるものに非らず。愚問賢註の歌體變遷の問答見合すべし。

あつめて言葉をやさしくとりなしてよめとてこそ候ひしか。口にまかせて人まね打ちしてうきたる言葉計にて思ひとけは心は正體なくてにはもあはすもと末かけあはぬ事のみ。この比は此の風たほくみえ候にやうつり行く世々にしたがひて歌のすかたも皆かはり候にこそ。古の歌に今の歌を並ぶれは火と水との如しなど申て候へとも。中頃近き世の人々の歌もむかしの歌にをのつからをとらぬなども候らむ。又古の歌のやさしきはいかなる世にもふりかたく面白し。其のやさしき心言葉をとり今の世にも上手と覚え候人々はこのみよみあはれ候めれは昔今かはる

べきにもあらず。佛の道を傳へうけたまはるにも罪もくどくもさだまりたるぬしもなし。このめはおのづから發心す。只時を得善知識にあふ事こそかたき事なむなれとぞ聞き候ひし。誠に誰をしるべと頼むべきとまよはるれど御法のしるべに聖教世になほとゞまりて候。歌のしるべは万葉古今も猶あとゞとゞまりて候。發心修行にもすゝむ人あらば五の濁の世の末なりともなどか無上菩提をもこえざらむ。道心ある人と數寄たる人との心々によるべき。法命をつぎ歌の道をたすくる事數ならぬ人にもよらじとこそ覺ゆれ。まづ歌をよまむ人は事にふれて情をさきと

○道心ある人と數寄たる人との心々にぞ因るべき。長明無名抄に能因法師が歌の極秘と云ふことをしるしてたゞすきたまへといふ五文字にある由を載せたり。秀歌もさだまりたる主あるに非らず。このめはおのづからこれを得べし。たゞすくといふ一言こそ歌道の善知識なるべけれ。

○まづ歌を詠まむ人は云云此の論ひとり歌詠む上のみにはかぎる可らず。人世百端の工夫は皆かく

のこさくなるへし・此の工夫純熟して人の思想は彌々精密に且高尚なる境に至るべし・思想精密に且高尚なる界に進みて後始めて眞誠なる詠歌もいてきぬべし・歌道さ人世さは決して別立すべきものに非らず・詠歌三昧に一生に送りし時代には此の工夫を以ちてたゝ詠歌の上の事のみさして工夫せしものも有りきさ雖さも今日の詠歌は世態さ離れざらむことを勤むべし・されは此の工夫を世事百端の上にめぐらしその心を以ちて詠歌の本領さすべし。

して物のあはれをしり常にこゝろをすまして花のちり木の葉の落るをも露時雨色かはる折ふしをも目にも心にもとめて歌の風情を立ちゐにつけて心にかくへきにて候らむ。又四季の歌に空ことしたるはわろし。只ありのまゝの事をやさしくとりなしてよむべし。戀の歌にはりこう空ことれはからむともわさともくるしからず。「枕の下に海はあれと」「胸は富士袖は清見が關」とも只れもひのせつなる風情をいはむとていかほともよろへいはむ事四季の歌にことなるべしと申され候ひき。又四季の歌の空こともやうに依るべし。僧正遍昭の「玉にもぬける春の柳か」とよ

○花を雲に似たりとも月を雪にことならずとも取りなす事　これは僞にあらず。眞實の戀情なり。僞とは然らざるものをしか思はすことのいひなり。見聞して然思はるゝものを其の儘にいふは眞實なり、僞にはあらず。此のさかひまた能く思ひ分くべし。

○又古郷といふ題にてふるさとばかり歌むこと。これは初心の爲に心得違する所なり。古歌に例ありとて拘むべからず。其の例は惡例なり。

○月の前の戀、月に寄する戀といふ類云々此の差別さとし得て妙なり。これをこの他の題にも應用して題意にそむかぬやうにと心掛べし。柳題詠はうたの本體に非らず。歌は其の人の心に思ふことを見るもの聞くものにつけて云ひ出すへきものな

まれたるを初めて「有明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪」花を雲ににたり（似）とも月を雪にことならずともとりなす（取成）事ともはいつはり（僞）ながら誠にさおほゆる事なればくるしからず。さしてもなき事を讀むべからずといふこと（云事）も能くよく心得おく（置）べきにや。又古郷と云ふ題にて古里とはかりよむ事常の事なめれど只の歌にもふる里などはよむ事なればさして故郷といはむ題にては奈良の都とも難波の宮とも志賀の宮とも名にふりたる所をうよみたきと候き。月の前の戀月によする戀と云ふ題をも人皆おもひわ（思分）かで只おなし（同）さま（様）によむ（詠）事念なくや。月によすると

り。知らぬ堺の事を云ひ見ぬ山川のありさまを續くるは皆つくりものなり。されと稽古には練習も亦必要なることなり。練習の爲には題を設けて詠み習ふこと最能き手たてなり。題詠をもて詠歌の能事了れりと心得むは云ふまでもなく僻想なれども練習の題詠を廢止せよと云ふはまた誤なり。されは題意に能々心を用ゐて其の細密なる堺をも詠み分くるやうに平常心を用うへし。

○又嬉しかりけり悲しかりけりと云ふ文字を未練の歌よみは常に好みむよなり。此の論もまた心に認めおくへし。俊成卿自讃の歌に夕されは野邊の秋風身にしみてうつらなくなり深草のさとと云ふ歌あるを古來先達と聞ゆる人々の論に三句の身にしみてと云ふ五文字だけは猶蛇足なり。身にしみてと云はでも實に身にしみけむと讀者に思ひやらするやうにいへかしと難せられたることあり。嬉しかりけり悲しかりけりと詠み入るゝは皆此のたぐひなり。誠に嬉しきこと悲しき折だにしかり。況むやさまでもあらぬことをや。

ては只月といふ(云)もしを(文字)かり(借)たるのみにてはよせ(寄)たるにてはあらざるべし。うはの空なるかたみ(形見)にて思ひも出ては心もかよはむ(通)なとやう(様)なるをよせたりと申すへきにや。月の前とてはさしむかひたるやうなるへきにや。

戀しさのむなしき空にみちぬれば
月もこゝろのうちにこそすめ

といふ歌も俊成卿月前戀と云ふ題にて讀まれたりとやらむ。又「嬉しかりけり」「戀しかりけり」といふ文字をみれむ(未練)の歌よみは常にこのみよむなり。げにうれしき事げに悲しき事ならでは常によむまじき事とう

申され候ひし。たゞ歌の本體をば古今の歌を見れば取て本歌にもすべし。三代集いつれもおなし事なれど後撰にはやさしき歌もおほく又みたり(濫)がはしき歌もおほく(多)まじり(交)たり。なしつぼ(梨壺)の五人こゝろこゝろやかはりけむ。拾遺の歌はまた拾遺抄によき歌は皆取り出られためり。後拾遺又歌よみおほく(多)つどひ(集)たる頃なれば面白(き)歌もおほ(多)げに候を難後拾遺と云ふ物にぞ。みきは(水際)も取(筋)出るなど云ふ歌を初めてさまざまそしりたる事も候やらむ。金葉詞花などは歌のすがた(姿)もかはり(變)て一ふしおもしろき所ある歌のみおほ(多)くはいかい(俳諧)めきたる事がち(勝)に候やらむ。それより後

○古今集拾芥抄に延喜五年乙丑四月十五日奉レ詔御書所預紀貫之爲二棟梁一奉レ之大内記紀友則、前甲斐目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等撰レ之云々延喜末奏二聞之一とあり。

○後撰集同書に天暦五年辛亥十月於二梨壺一以二藏人少將伊尹一爲二和歌所別當一能宣、元輔、順、時文、望城、等撰レ之とあり。梨壺五人とは即この撰者をいへるなり。

○拾遺集同書に長徳比大納言公任卿撰レ之云々巳上古今以後謂二之三代集一とあり。

○拾遺抄　花山院の御作

○後拾遺集拾芥抄に應徳三年丙寅九月十六日中納言通俊卿撰二進之一とあり。

○金葉集同書に天治元年甲辰依二白河院綸言一俊頼朝臣撰レ之再三注直天治二年奏レ之披露中度本也とあり。

○詞花集同書に天養元年甲子六月二日依二崇徳院勅一顯輔撰レ之とあり。

の集共も撰者の心得見え候てさま〳〵（樣々）すてかたく（捨難）見え候めり。新古今むかしの歌のやさしきすかたに立かへりてをら（折）はれち（落）ぬべき萩の露。ひろ（拾）はゝ消なむとする玉ざさ（笹）の霰など申すべきをあまりにたはふれ過して歌のさま又あしさまになりぬへしとて新勅撰は撰者思ふ所ありてまことある歌をえらはれけりなとうけたまはり（承）候ひし。其の後續後撰たちかへり道をしろしめす御代にあひてときはゐのれはきれともを初奉り衣笠の内大臣のふさね（信實）ともいへなど道にたへたる人家の風吹絕えぬ人々れほく君も臣も身をあはせ時をえたりける撰者なれはさすか見所も候

○新古今集同書に文久二年乙丑三月廿六日依㆓後鳥羽院宣㆒參議右衛門督通具、大藏卿有家、右近中將定家、前上總介家隆、右少將雅經等撰進さあり

○ならは落ちぬへき萩の露ひろはゝ消なむとするゝ玉笹の霰なさ　この句は源氏物語柏木卷より取れるなり花やかなるこさを言へるなり。

○新勅撰集　同拾芥抄に貞永元年壬辰十二月二日依㆓當代（後堀川）綸言㆒前中納言定家卿奏㆑之さあり。

○續後撰集　拾芥抄に寶治二年七月奉㆑勅歟建長三年十月廿七日依㆓後嵯峨院院宣㆒民部卿爲家卿奏㆑之さあり。

○常磐井のおさゞ實氏卿なり

○知家正三位

○君も臣も身をあはせ古今集の詞を取れり。古今集序にこれは君も人も身をあはせたりさいふなるへしさあり。

○かしこきを見ては云々　論語里仁の章に子曰見レ賢思レ齊焉見二不賢一而内自省也といへり。此の意を取りて書けるなるへし・集註に思レ齊者冀三己亦有二是善一とあり。

○小式部内侍か定頼中納言をひきとゞめ云々此の事は名高話なれば誰も誰も知れることなるべし・されど今十訓抄の文を左に記して其の次第を明にすへし・同書人を侮るへからすといふ條に

らむ。かれにも時による作者おほしなどうちかたふく人も有りけるをましてかの後のことはいかゞ候らむ。心もおよふまじければしこめぬ。むかし今の代々の集共の中に作者も世々に聞る歌のすかたもたけ高くやさしからむを撰みしたひに御めをとゝめて事のついでに題のこゝろをも御覧し分けてかしこ(賢)きを見てはひとし(齊)からむと御心をかけ候べし。當時の人々のうた(歌)をは夢々學ひこのむ御事候ましく候。又とりあへぬ事に時もかはらすよみ出る歌の返事立ながらいひ(云)出だす歌はさしあたりて唯今いひたき(度)事をさま(様)よく(能)つゝけ(續)ぬれは何の風情にも過さて候。小

和泉式部保昌が妻にて丹後にくだりける程に京に歌合ありけり。小式部内侍歌よみに採られて詠みけるを定頼中納言戯れて小式部内侍つぼれに有りけるに丹後へ遣はしける人は參りたりや。いかに心許なくおぼすらむといひてつぼれの前をすぎけるを御簾よりなからばかり出て直衣の袖をひかへて　大江山いくのゝ道の遠ければまたふみも見すあまのはしたてと詠かけけり。思はすにあさましくて此は如何。かゝるやうやは有るとばかりいひて返歌にも及ばす袖をひき放ちて逃られけり。小式部これより歌讀の世に覺いて來にけり。是は打任せて理運の事なれども彼卿の心にはこれほどの歌たゝ今讀出すへしとは知られざりけるにやとあり。これにて明なるへし。

○周防内侍がかひなくたゝむの歌は著聞集に見えたり。袋草紙にもあり。こゝに引きいたさむも煩はしければ省きつ。さるは事からもをかしからぬことなればなり。

式部内侍が定頼中納言をひきとゞめてまたふみも見すあまのはし立と申けること。周防内侍が忠家大納言とかひなくたゝむ名こそをしけれと申かはしける心とさ（鋭）なとはたゝ人の心玉しひ（魂）により歌のみちにしはなれぬるくらゐのあらはれしにて候へはむかし今申にもれよひ候はず。今はかゝる谷の朽木と成りは（果）てゝ候へ共さるやさしき人々だに候はゞなどかは口とく（鋭）あひしらふ事もさふらはさらむと覚えてその世の人々うらやましくこそさふらへ。

終

依連阿上人所望以相傳秘本染筆畢可爲證本云々

右武衛藤原朝臣

左羽林藤原爲廣判

此の一帖者安嘉門院四條號阿佛房口傳也即以彼自筆令書寫畢尤可秘云々

以三條殿御家本遂書寫校合畢右之以寫本加一校畢

通茂書　幸隆校

文科大學敎授兼陸軍敎授從六位內藤耻叟先生序
文科大學敎授從五位栗田寛先生著

天朝正學

全壹册

定價 金三十五錢
郵稅 金四錢

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て嘗て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇內無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國よ至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戶の源義公夙に皇道の振はざるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體しこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明よし學ふ所を知らしめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

國光社譯述

獨逸讀本抄譯

定價金貳拾錢
郵税金四錢

獨逸は、教育の最も普及せる國なり、學問の國なり、實業の國なり、教育の主義は彼我國情を異にするも、教科書たる事實の撰擇、序述の文體等、其方法に屬する者に至りては、**玉を琢くの好資料**となすへき者多からんとて、熱心眞實なる教育者諸君は、獨逸讀本の譯述を促せし事、一再にして止まらず、本社も亦斯道の暢發を以て自ら任する者なり、豈他山の石たるを期せさらん、寸毫たも國家を裨補せん事、轉輾忘るゝ能はさる所憂勞敢て辞する所にあらず、されは、本書に、獨逸最近の讀本を渉獵し、**粹を抜き、精を撰び、**勉めて**原文の眞義を發揮**するを主として、抄譯したる者なり、教育者諸君之を得て**座右の好參考**に供すべく、學生諸君之を得て**朝夕の好良友**となすべく、彼の國**教育の實質を窺知するに於て百千部の教育説心理論に優れること萬々なり**、若夫れ文の流暢にして趣味多きや否哉、事實の新奇にして實際を遠さからざるや否哉、少年文書か如何に發達せるや否やは讀まん者よく知得べければ、略しつ、

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　**國光社**

東久世伯〇勝伯〇松方伯〇品川子〇野村子〇渡邊文
〇富田〇金子〇平田〇川田氏等諸大題家字及ひ序子
品川子校閲●平田東助〇平塚定次郎〇武内常太郎〇湯川寛吉共譯

第三版 盧氏商工經濟論

全二册

定價 上編一圓四十錢 下編一圓二十錢
郵稅 第四種卅八錢
便 小包 十里迄九錢 百里迄十六錢 百里外卅二錢
郵便爲替（拂渡局）若宮町

今や我が經濟は亂調の極に達し恐慌來々々々の聲愈陰害を重からしめんとす是れ専ら我邦人經濟的知識の幼稚なるに職由せずんむあらず今の時に於て之か大に救濟整理の道を講せずんむ終に其歸する所を知らざるなり本社茲に本書の第三版を發行し江湖に紹介する所以豈偶然ならんや

本書記事精確にして理義明瞭なる世己に定評あり誠に國民一日も欠く可からざる良書なり綜錯なる難問題も一讀瞭然一家の經營を完し國家經濟の基礎を確立して今日の急に應するに足るの長計大策を得る所以のもの獨り此書に在らむか

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社

大賣捌 ●東京〇文海堂〇嵩山房〇東京堂●大坂〇吉岡

品川彌二郎
平田東助 合著

信用組合提要

全一冊

一部定價金五錢
郵送費金貳錢
郵券代用は一割
増申受候

商業家の道德を進むるは商業の發達を計る所以の基本なり信用組合は今後殖産興業の上に於いて大に普及せしめざるべからず信用薄弱なる商工業は完全なる結果を收むること甚難し是兩氏が此の書を著されたる主旨なり我が社曩に本書を刊行して同志間に頒ちたりしも部數に限ありしを以て悉希望を滿すこと能はざりき爾來我が社に向ひて之が發行を望まるゝ諸彦日として踵を躡せざるなし今回我が社は大に之が普及を計り同志の希望に應ぜんために更に刊行することゝなせり冀はくは是より四方同志諸彦にまた遺憾なからしむることを得んか

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行所 國光社

國光

國體の尊嚴を保し國權の伸張を力め公平を持し、政黨を嫌ひ獨立を尚び、權勢を謝し若も國家の爲にあらずんば敢て一筆を着ることなし

每號百頁、拾萬餘字盡く是れ憂國の血涙に非ざるはなし世の虛名を厭ひ實行を貴び君國の憂を以て己が憂となす者

國光を讀まずして何をか讀まむ

定價一冊金十三錢●六冊(半ヶ年分)七十五錢●十二冊(一ヶ年分)壹圓五十錢●郵稅一冊一錢五厘●每月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

稟　告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本可致候
一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京々橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必ず御拂濟可被下候
一郵便切手を以て代金に換用せらるゝ時は一割增に申受候
一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らざれば返信不仕候
一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金の證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候
一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らざれば往々行違を生じ相互の不便免れ難く候
一未納稅の來書は一切受取不申候

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社

天つ日嗣の高御位は
天地の共動きなく、皇
國の御榮は、いや年の
はに、榮にゆかんとあ
らたまの年のはしめ
のことほききこに申
すになん。

明治三十二年一月一日

國光社

社員一同

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

明治三十二年一月四日印刷
同　年一月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木頁雄

東京京橋區築地二丁目二十一
（電話番號新橋八八）
發行所　國光社

紅塵庵俗禪譯

◎富岡永洗筆挿繪數圖頗密畫無比極彩色口繪!!

◎總クロース金文字入

四版

清風高節 秀美優雅

獄中花（ひとやのはな）

●全一册●

菊版美本

正價金五十錢 郵税金八錢

神氣清潔なる一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尚優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚し最名譽ある儀表の下に最淸廉なる結婚を爲すに畢る斬新奇警高尚なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が淸淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

▼▼▼▼▼▼試に本書所載の目次を掲ぐれば

國のほまれ ひとやの花

目次

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社（電話番號新橋八八）

（明治二十四年八月四日内務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所 東京國光社印刷部）